山ざくら

第41号　平成22年11月

関東氷上郷友会

人材募集!! 関東地区　関西地区

当社は三井化学（株）、大日本印刷（株）、アサヒビール（株）、ダイキン工業（株）、沖電気工業（株）、三菱商事（株）などを主力荷主に持つ総合物流会社です。東京、名古屋、大阪に主要倉庫を持ち、関東・関西圏の物流をつなぎます。

日本で一番大きなトレーラーが毎日、東海道を走っています。

平成19年秋完成。本格稼動に入った草加物流センター　倉庫規模5600坪（5階建）（埼玉県草加市）

〔主要取引先〕 順不同

三井化学(株)　大日本印刷(株)　ダイキン工業(株)　アサヒビール(株)
キリンビール(株)　沖電気工業(株)　味の素(株)　ハウス食品(株)　帝人(株)

三協運輸 株式会社

代表取締役社長　岸本勲（氷上町出身）

本　　社　東京都足立区保木間 1-1-3　TEL.03(3860)8112
大阪支店　大阪府大東市新田中町 3-3　TEL.072(806)2821
埼玉支店　埼玉県桶川市加納峯 3-7-9　TEL.048(728)9380

物流倉庫所在地　東京　埼玉　神奈川　名古屋　大阪

山ざくら

第41号

夕映えを切り裂く影や赤とんぼ

山ざる　第41号　目次

〈表紙〉可部美智子作陶彫〝光明皇后〟
〈扉・目次写真〉①実りの秋（俳句＝渡邊隆男）
②③旧竹田村の秋……徳田八郎衛・撮影
④静まる旧家の前裁（柏原町・母坪）……徳田八郎衛・撮影
郷音改まらず……坂上勝朗　5
平成21年度「ふるさとの会」開催……6／江上　剛氏講演要旨……8
平成21年度「ふるさとの会」出席者……10／会計報告書……11
祝寿の方々ご紹介……12／懇親会スナップ……16

《特集／丹波Uターン生活》
見よう見真似の農作業……直田　正　20
空飛ぶグライダーの如く……村上　茂　24
後世への「つなぎ」の役目……上田　脩　28
丹波まちづくり八景……小橋昭彦　32

《ふるさと随想》
スモモの生る家……片岡恭子　36
軍歌からリンゴの歌へ……丸川健三郎　38
故郷の思い出……藤田純子　42
故郷との距離……古倉徹夫　44
駅伝の思い出……徳田直三郎　47
柏原エンターティメント……徳田八郎衛　49
柏中34回生の思い出……荻野巨舟　52

《ふるさと発信》
ありがとう！東京支部同窓会……赤井俊子　64
「幸世行進曲」と「佐治川」……臼井くにあき　67
「日本語教室」十二年……時里孝子　73
気象観測三十五年……荻野正裕　77

《近況・エッセイ》
研究ひと筋の道……水谷正寛　86
一着のジャケット……三浦　宏　89
越智研一郎君を偲ぶ……野村節三　92
扉の向こう側……井徳正吾　95
わが家の古きものたち……木呂子恵美子　99
音楽に出会う旅の楽しさ……大西修三　101
定年後に始めた油絵……阿部　勉　103
退職後の私の生活……和田幹夫　105
吉住自由造さん追悼……足立さつき　108
木村つた江さん追悼……池田　忍　110
さらば、環境記者会……足立静雄　112
老人のたわごと……大野善三　113
折々の記(7)……井本義一　119
文芸欄へのお誘い……原谷洋美　127

《丹波を撮る》……徳田八郎衛　58
《いけばな（写真）》……三觜柏洋（三觜洋子）　56・98・131・145
《丹波通信》「丹波の医療危機」その後……足立智和　82
《インタビューコーナー》
笹倉　強さん／合唱指導を通してこころを培養する……編集部　128
《私の職場》世間離れの夢の世界で……足立忠司　132
《山行記》山と温泉に魅せられて・Ⅳ……山本喜則　134
ふるさとトピックス（丹波新聞から）……57・81／会員だより……138
寄附者芳名……146／BOOKS……147／《インフォメーション》……149
《協賛広告》……153／編集後記……166

小景異情

ふるさとは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの
よしや
うらぶれて異土の乞食となるとても
帰るところにあるまじや
ひとり都のゆふぐれに
ふるさとおもひ涙ぐむ
そのこころもて
遠きみやこにかへらばや
遠きみやこにかへらばや

室生犀星「抒情小曲集」より

郷音改まらず

会長　坂上勝朗

ことしは、当会の役員改選の年にあたります。現在役員をお願いしているかたがたは五十二名。年二、三回の役員会にお出ましいただき、いまとこれからの郷友会の運営のありかたについて、ご意見を頂戴するほか、各位の近況をお聞きしたり、現世相についてお互いの感じるところを話し合ったりして、おおいに意義ある「寄り合い」を持たせていただいています。

交わされる会話は、ほとんど共通語（あえて標準語とは言いません）をもっておこなわれますが、やはり育ちは争えず、処々に丹波なまりが顔を出し、場の雰囲気をなごませます。

これは、わたくしたち丹波氷上郡出身者の会ばかりではなく、どの地方からの出身者の会合でもいえることで、おおかたは、各々の地方の言葉で会議がすすめられていることでしょう。まことにほほえましくも心温まる風景ではありませんか。

お国言葉がいつまでも改まらないのは、なにも日本人ばかりでなく、たとえばお隣り中国は唐の時代の賀知章というひとの「回郷偶書」と題する七言絶句には

「少小にして郷を離れ　老大にして回る
　郷音改まるなく鬢毛摧つ」とあります。

郷音はお国訛り。鬢毛こぼつとは、モミアゲも白髪になってしまったということ。賀知章は唐の玄宗につかえて名をなした官僚で、八十歳を過ぎてから故郷に帰ったということです。長い中央官庁勤めにも、生まれ故郷の紹興の言葉を押し通したのでしょう。ついでにこの詩は、あとこのように続きます。

「児童相見るも相識らず
　笑いて問う　客は何処より来たるやと」

郷音は、当人の生まれ育ちの証明ツール。わたくしは、これを今まで以上にたいせつにしていきたいと思っています。

平成21年度「ふるさとの会」開催

平成二十一年度の「ふるさとの会」は十一月二十九日（日）正午より東京都千代田区の九段会館で行われました。今年は特別に総会に先立つ十一時より作家でコメンテーターとしても大活躍中の江上剛氏（本名・小畠晴喜さん、山南町出身・1954年生まれ）に講演をおねがいし、「元気で生きよう。やまざるの世相雑感」と題して、懐かしい丹波での生活から紐解かれた楽しい話や苦労話、銀行マンから作家へ転進したいきさつなど、興味深いお話を聞かせていただきました。同郷としていちいち話の中身が見えるという親しさも加わり、総会前に大層の盛り上がりを見せました（講演要旨は8ページ掲載）。なお、氏は平成二十二年六月、日本振興銀行の社長に就任されました。

総会では坂上勝朗会長（写真）の挨拶に続き議事に入り、谷口副会長（会計担当）より会計報告・監査報告・会務報告があり、いず

れも全会の承認を受けました。

満八十歳を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」では今年は足立和己氏、上田實氏、大垣忠男氏、鈴木和栄氏、田中久仁彦氏、細野京子氏、前田和市氏、由良貴久子氏の方々にご案内を差し上げ、ご参加頂いた足立和己氏と前田和市氏に坂上会長より祝辞と花束を贈りました。

懇親会は岸本副会長の司会で開会、今年も辻重五郎丹波市長にご出席頂き、丹波市が誕生して五年の記念に当たる今年、これまでとこれからの丹波市について熱く語って頂きました。上野重喜理事の乾杯の音頭に講演を頂いた江上さんも交え、いよいよ丹波訛りの抜けきらない会話の輪があちこちに広がり、いつもの楽しい宴会になりました。恒例のお楽しみ抽選会は、より多くの皆さんに喜んで頂けるよう、今年から「丹波の山芋」一キログラム、「丹波黒豆」〇・九リットル、「黒豆・丸大豆の煮豆」三袋がそれぞれ全員に渡るようされ、参加者全員何かのお土産を楽しめるようになりました。その他、ご参加の会員の浅野智哉氏より著作、「りんごの絆」の山本明男氏よりお食事券（二万円相当）のプレゼントの抽選もありました。

名残り惜しい会も中締めとなり、高見秀史常任理事の三本締めで、来年又元気に会えることをお約束し閉会となりました。

坂上会長から祝寿のお祝いを受ける足立和己氏（右）と前田和市氏

江上　剛氏講演要旨

平成21年度の「ふるさとの会」は、江上剛さんの講演会から始まりました。ベストセラー作家の江上さんは山南町出身の小畠晴喜さんで、今やテレビ、新聞等でも大活躍です。「〝元気で生きよう〟やまざるの世相雑感」をテーマに約1時間お話をしていただきました。

本名で話すのは恥ずかしいと前置きされながら、ペンネームのいわれ、家の仕事、村や家族の関係について話し始められました。

講演される江上　剛氏

――家の誰もが読まない新聞を読み、子ども新聞に俳句を投稿して賞をもらった。本屋のある柏原へは行ったことはないが、父が大阪への仕事帰りに本を買って来てくれた。その読書感想文を書くのが好きだった。柏高へは一九番で入学。結構出来る人が居ると驚いた。

高校時代は文芸部に入り、大江健三郎、椎名麟三、サルトル、カミユをよく読んだ。サルトルの『嘔吐』に勝手に感銘。サークル誌「沙羅の樹」に、僕だけが小説を書いた。マネキンが灼熱の太陽に溶かされていくという内容で、それが劇になった。

生徒会活動もやった。家政科と商業科には人気があったが、普通科では嫌われ不信任ばかり。大学受験は親父が勝手に京大へ願書を出した。やる気はなく勉強道具を全部捨てた。友だちが「落ちてるよ！」と郵便を持って来てくれた。それじゃ東京に行こうと早大へ。上京して初めて自由な気持ちになれたが、悪さをしようとすると母の声が聞こえてきた。

大学では内ゲバをくり返す時代で「明日、怪我しな

いでしょうか？」と阿佐ヶ谷の占いのおばさんに見てもらったら「大丈夫よ！長生きするわよ」と。

やる気が失せて先が見えなかった頃、思い切って井伏鱒二先生に電話をした。「今から来なさい」と。豪邸ではと畏れたが、門に名刺が貼ってあった。それからお付き合い頂き、相当影響を受けながら様々な勉強をさせてもらった。母から送られてきた松茸を先生に届けたが、展望のない自分が恥ずかしくて家に上がれず、先生は「まともになった時に一緒に食べよう」と言ってくれた。後日、佃煮にしたのを出してもらい感激した。

留年すると就職案内は来ない。仕送りもなくなり、いろいろなバイトをして暮らした。銀行は〝お祖父ちゃんの敵だ〟と言われていたので入りたくなかったが、友達や先輩の紹介で第一勧銀に就職した。父は「一生頭を下げておれ」、厳しかった母は「信金より大きいのか」と喜んでくれた。

入行してから立場上おかしいことがあると分かる。職業の誇りを感じ毎日泣いていたが、様々なことを体験し、しがらみなどの膿を出した。ドタバタがあった後、女房から「このままだとぬれ落ち葉よ！　何かやったら」とアドバイスされ、朝日カルチャーの小説コースへ。兼務しながら小説を書くようになり、楽しくなった。井伏先生の「小説はいつでも書ける」その時が来た。作家になる心算はなかったが、多くの友だちに助けられている。姉、兄は既に亡く、去年、母も亡くなったが、テレビに出ると喜んでくれた。父は丹波で姉の子と暮らしている。めったに帰らないが、このように話させていただいてありがたい――と話を結ばれた。

＃

なるべくしてなられた作家業だと感動しながら聞かせていただきました。親睦会にも参加していただき、盛会に終えることができました。翌日の江上さんのブログに「昨日は九段会館で行なわれた故郷である氷上郡（丹波市）の故郷の会に行った。一二〇年以上も続いている伝統のある会。多くの人の前で、時間を頂き、話をさせていただいた。故郷の人の前では、本名の人間になってしまうのでダメだ。でも多くの元気な人との出会いを楽しませていただいた」と。嬉しい後日談でした。

（文責・岡田昌子）

◎平成二十一年度「ふるさとの会」出席者

（順不同・敬称略）

〈来賓〉

辻　重五郎　丹波市 市長

村上　佳邦　丹波市 秘書広報係長

森　哲男　兵庫県東京事務所 所長

長澤　均　兵庫県東京事務所 課長

皆川　広一　神戸新聞東京支社

〈祝寿〉

足立　和巳（青垣町）　前田　和市（山南町）

〈会員〉

○青垣町（2名）

足立静雄　飯田光雄

○市島町（10名）

荒木輝雄　河野征美　高見秀史　藤田千治　藤田徹

藤田　純　細見充彦　丸川宥次郎　丸川健三郎

山本喜則

○柏原町（10名）

浅野智哉　岡　吉明　岡田昌子　小田晋作

可部美智子　小谷　崇　高尾久子　三觜洋子

山本明男　山本雅子

○春日町（5名）

足立知佳子　金出一郎　木呂子惠美子　富田貞子

松田けい子

○山南町（17名）

池田　忍　植木十和子　梅田重二　久保春雄

久保良雄　下井源治郎　勢川武彦　仲　一聡

中居篤子　原谷洋美　廣内卓生　廣内雅子

廣瀬安伸　廣瀬庸世　藤原ひさ子　前田和市

若森敏郎

○氷上町（19名）

足立吉雄　足立明子　安達健一郎　足立正喜

井上　巖　上　高子　上田道代　上野重喜

上野忠明　臼井小五郎　岸本圭司　岸本　勲

小山としこ　坂上勝朗　谷口浩章　谷口　捷

本城英明　山口和久　山森直美

会 計 報 告 書

（平成21年7月1日～平成22年6月30日）

関東氷上郷友会
会計理事・谷口　浩章
原谷　洋美

（単位：円）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
繰越金	2,522,502	郵便貯金 1,722,502円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円	出版費	879,873	『山ざる』40号
			通信・印刷費	122,884	総会・役員会案内等
			総会費	613,846	総会関係支払
年会費収入	396,000	延191名	会議費	167,000	役員会等
総会費収入	419,000	61名	支払手数料	20,980	振替手数料
役員会費収入	158,000	延45名	消耗・備品費	73,735	事務用品・広告費等
寄付金	194,800	延63名	繰越金	2,417,520	郵便貯金 1,617,520円 定額貯金 800,000円 振替貯金 0円
広告料収入	605,000	延65名			
その他	536	利子等			
合計	4,295,838		合計	4,295,838	

監査の結果、上記の通り相違ありません。

平成22年7月26日

会計監査　岡林道男

　　田井小五郎

祝寿の方々ご紹介

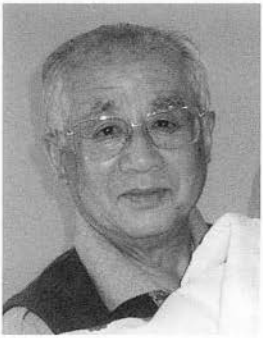
郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる13名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、6名の方から回答頂きましたのでご紹介します。（誕生日順）

①生年月日
②ご出身地
③上京の年月日
④上京の動機
⑤これまでに最も印象に残ることは
⑥祝寿を迎えられてひと言

小笠　勝啓様

①昭和5年5月7日生まれ
②大阪→柏原町→春日町
③昭和26年3月
④乳業会社研究所勤務
⑤戦時疎開令で大阪の中学から柏原中学に転校。授業はほとんどなく、小倉の山で薪づくり。出征軍人農家の農作業の手伝い、校舎内に仮設された東洋ベアリング工場で軍用機用ベアリングの組立て、調整作業に従事。終戦まで日勤・夜勤を繰り返し、戦時動員下の中学生時代を過しました。

昭和41年、35歳の時、北海道大学に提出した学位論文により博士号を頂きました。当時、牛乳を130℃以上の高温で2秒間瞬間的に加熱し急冷する処理法は実用化されておらず、厚生省令認可まで時日を要しました。しかしこの処理法と無菌充填処理法の併用によって、現在では牛乳、乳飲料、プリンや豆腐など広く本処理法が実用化され、家庭用冷蔵庫の普及により消費



〈生まれた年＝昭和5年・庚午・1930年〉金解禁で船出したものの、アメリカに端を発した世界恐慌の大津波に翻弄されて日本経済はたちまち難破寸前に追い込まれた。ロンドン軍縮条約に調印したのは「統帥権の干犯」として政府攻撃がなされた。

者の利用性は著しく向上しました。

⑥53歳の時、講演中に脳出血で倒れ、医術だけでは回復は無理と言われ、退職しました。妻の手引きで仏縁につながりお寺参りを始めました。20数年間の仏様の眼に見えないお力とお加護、効果的な医薬品、治療、運動によって、今の健康な自分があります。

時間的な余裕も出てきたので、今までご指導いただいた先生方や上司、友人達を加えて囲碁の深みを楽しむ会を持ち、また近年発展の著しい中国、東南アジア、インドなど妻と同伴で旅行し、残り少ない生かされる一日一日を感謝と喜びで過ごしたいと思っております。

梅田　重二様

①昭和5年8月3日

②山南町和田

③昭和37年10月

④勤務先より転勤命令により、神戸・大阪・名古屋・東京と流れて参りました。転宅は12回を数えましたが、昭和45年、横浜に自宅を新築し落着きました。

⑤昭和34年（1959年）9月26日㈯午後、伊勢湾台風に見舞われたことです。最大瞬間風速55m、バスもストップ。鉄筋4階建ての社宅にやっと辿り着くと、部屋の中は霧雨状態。スチールサッシが飴のように曲がり、ガラスの隙間から雨が吹き込んでいました。記録的な災害でした。

⑥70歳を過ぎた頃、何故か無性に勉強がしたくなりました。青少年時代、学徒動員や敗戦で勉強したくても出来なかった反動ではないでしょうか。私の毎朝は午前4時に始まります。ラジオ深夜便「心の時代」を聞くのが10数年来の日課です。5時になりますと、8年前に始めた書道の練習を2時間半程行います。朝食後、前夜に録画した教育テレビの「英語番組」を観ます。英語

教室に10年、書道教室に通って7年。出来れば「書道10年」「英語15年」なんとかやり通す時間を与えてほしいと願って止みません。

水船　隆昌様

①昭和5年8月25日
②春日町
③昭和24年4月
④大学入学のため
⑤大学卒業後、全額政府出資の原子燃料公社に入社、専ら日本国内のウラン鉱の探査と金属ウランの製造を行っていたが、日本には他の地下資源と同様、ウラン鉱も殆どなく、アメリカ型の軽水炉発電を盛んに輸入していたが、将来は自主技術で開発した発電を行うべしとの議論が起こり、高速増殖炉の開発が必要として、原子燃料公社を解体し、燃料と炉を一体として研究開発する動力炉核燃料事業団（動燃、昭和42年設立）が設立された。その時、自分はたまたま、公社の労働組合の中央執行委員長をしていたため、組合員の職場確保、生活を守るため、政官財に対する働きかけのため全精力を尽くした（国会にも参考人として出席した）。

今や、電力は原子力発電が全体の4割を占めるまでになっており、日本の原子力発電も自前で建設し輸出までもするようになっている。当時、われわれ労働組合の主張は大筋において間違っていないと思っている。ただ高速炉については技術が大変難しいためトラブル続きで、今年になって再度の臨界となり、順調に経過することを祈るばかりである。「もんじゅ」頑張れ。

⑥一人でも多く親元を離れて、独力で活躍される若人が、丹波の地から多数出られることを望む。

常岡　幹彦様

①昭和5年8月25日
②柏原町上小倉
③④昭和23年2月、翌年の芸大受験のためご指導いただきたく上京、山本丘人先生の門を叩く。

⑤佐伯祐三、岸田劉生、村上華岳、長谷川等伯等々油、日本画を問わず理屈抜きに魅力を感じる。後年、北宋の范寛に衝撃を受ける。
⑥傘寿には特別の感情は湧いてきません。仕事の延長線上に80歳があり、より密度の濃い時間が生きられれば、これ以上の幸はないと思っています。

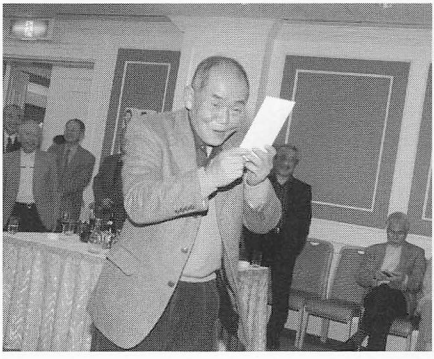
高田美佐子様

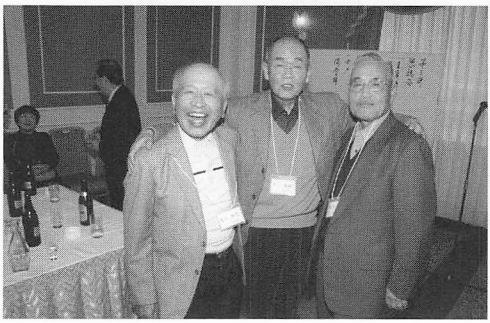
①昭和5年8月26日
②福知山市
③昭和23年(日時は忘れました)
④国鉄入社と結婚のため
⑤夫と二人でパリ生活を4年ちょっと過ごしたことです。
⑥とうとう傘寿を迎えることになりました。この分だと天寿を全うしそうな勢いです。

井手　梅野様

①昭和5年8月31日
②春日町多利
③昭和34年7月
④主人の転勤
⑥毎日を元気に過ごさせていることに感謝しています。25年余り一人で生活して参りました。いろいろな事に遭遇しましたが、何とか乗り越えました。今は周りの人達に感謝のほかありません。ありがとうございます。

懇親会スナップ





山南支所と谷川地区の遠景（撮影：直田）

見よう見真似の農作業

直田　正（山南町在住）

丹波はやはり高校卒業までお世話になったかけがえのないふる里。長男で男一人という事情もあり、また都会では所詮根なし草との想いもあって、会社を辞めれば丹波へUターンするのは自然の成り行きというか、帰巣本能というのか（私は人間にも当然この本能が備わっているのではないかと思っていますが）、そんなことを漠然と心に描いていました。

その間、一九九四年には関西への転勤話があり、ほぼ決りかけていたところ、翌年一月の大震災で大阪・神戸支店は縮小の一途となり、関西までハーフターンの希望は叶わず、結局、最後まで東京勤務でサラリーマン生活を終えました。退職後、暫くして義母の介護の問題が出てき、東京と丹波を行ったり来たりの生活を余儀なくされましたが、最終的には昨年春に丹波に転入を果たした次第です。

以来一年余。両親が残してくれた田畑を引き継ぎ、米と野菜を手探りで栽培しています。小規模ながらも水の管理、施肥、あぜ草管理、二〇数種類の野菜との付き合い、雑草、害虫、害鳥との戦い等々で、時間を持て余すほどの余裕はなく、近隣の農家の作業や生育状況を観察しながらのヨチヨチ歩きの農業をしています。どちらかといえば、作業の段取りが悪く、後追いが多くなり、なんとか取り繕っている状態です。晴耕雨読は理想かもしれないが、天気予報を見ながらペースをうまくとって行くのは簡単ではない。それにしても近所の人達はやはりベテラン。上手に作ってはるなと感心しているが、「あんたのお父さんは篤農家やった」と言われ、下手はできないな、と少なからずプレッシャーを感じることもあります。

思い起こせば、両親はともに地の人間です。父は二〇代の九年間に及ぶ満州での兵役を終えて復員し、その後ブラジルのような広大な土地で農業をやりたかったらしい。日本の道は狭くて歩きにくいと言っていたのを記憶しています。地元食料事務所に長く勤務し、米の検査官として地域の米作農家とのお付き合いがありました。母も父亡き後、二五年に亘り女一人で田畑を守り、八〇代になっても耕運機を動かして田圃を鋤いていた。「そんなことやってる人、この辺におってないで」と近所の人に関心されてもいました。私も地の人間、一旦地元にUターンした以上、両親の足跡から善かれ悪しかれ影響を受けることは避けられないと認識しています。

こちらの生活で、今も努力が足りないのは早起きと早寝です。分かってはいるが、東京での生活のリズムがなかなか変わりません。ついつい夜更かししてしまいます。農家の友人に「あんたら都会の人やな」と言われていま

田植え中の筆者

す。彼は朝五時前には起きて一仕事をしているのです。

地元との付き合いは自治会を通じて、毎月の常会、年に数回の清掃活動とその後の懇親会、お祭り等の行事に参加とまだ限定的です。Uターン直前に役員選挙があり、来年三月までは役割が回ってこないこともあり、今が一番気楽で自由な時間なのかもしれません。四〇数年振りの田舎は知らないことが多く、地元の皆さんと馴染んでいくのにはまだまだ時間がかかるので、この間に勉強しなくてはと思っていますが。もちろん、幼馴染の方もおられ、顔の変化にも拘わらず、昔呼び合った「〇〇さん、〇〇ちゃん」で通じるのは生まれ育った所の強みかも知れません。ここ山南町谷川七区には八五戸も加入し、谷川全一一区の中では一番の大所帯。若い世代も多く、知らない人が大部分といってよいほどです。これから、いろいろな機会をとらえ、特に若い世代とうまくコミュニケーションをとっていきたいものです。

◆

Uターンして未だ日は浅いながら感じることは、まず第一に、丹波もご多分に洩れず少子高齢化が確実に進行していること。まだ急激でないだけ増しかもしれませんが。両親を見送った際には地域・親戚の皆さんにお世話になっていますので、新聞のおめでた・お悔やみ欄には真っ先に目をやり、菩提寺との付き合いを含み、失礼にならないよう務めるのは最低限の義務と認識しています。

それにしても目立つのはお悔やみの人数が圧倒的に多いこと。数か月前には丹波市の広報誌で人口が七万人を切ったことが確認されていました。丹波市の高齢化率（六五歳以上の人口比率）は二七・二％とのこと（平成二一年六月末データ）。全国的には二二・八％（二〇〇九年）で、都会に近い田舎の丹波としては、もう少し低いのではと思っていましたが、全国平均より高いとは驚きです。丹波市六町の中では春日町が二九・七％で一番高く、柏原町が二一・八％で一番低い。ちなみに山南町は二八・七％。地元谷川七区は何と一七・四％で、若い人によると、久下では当地区の評判が良いらしく、今も一、二軒が新築中です。かかる高齢化に伴い発展する事業は、当然のことながら、医療、介護、そして葬祭ビジネス。昨年末、小川で一か

所、七月中旬には谷川でも新規オープンとなる予定です。我々団塊世代はマーケットとして大いに期待されている訳です。競争も厳しいようで、新聞のチラシには葬儀場の広告が良く入っていますが、近所の葬儀場の内覧会では、なんと実際に棺に入って体験するコーナーを設けるとか。そんなこと体験してどうなるのか摩訶不思議です。

次に感じることは田舎でも安全・安心は過去の話ということ。昨今、泥棒が多く物騒になってきました。都会から出張？してくるらしく、昼間に入られるケースもあるとか。かくいう我が家も、昨年一一月、旅行中に空き巣に入られましたが、なんと今回で二度目で、近隣に格好の話題を提供した次第です。丹波警察によると、市内では置き引きや窃盗は減っているのに、空き巣が倍以上の増加ぶりとか。そういえば窓は閉め切って、玄関もしっかり施錠している家が圧倒的に多いようです。特にこれから暑くなれば、我が家はエアコンが好きでないので、玄関や窓はすべて開けて周りに田圃からの冷気を存分に取り入れたいものです。空き巣に三回もやられることはないと楽観していますが、甘いかも……。

将来を見渡せば、丹波も厳しい状況が続くと思われますが、都会に近い田舎としての丹波の存在は、とても貴重です。人口の維持には就業機会を確保することが一番ですが、そのためにも交通の便が現状より悪くならないことが重要であります。この点について、ＪＲ西日本に一言。ＪＲの特急列車は大阪発午後六時すぎ以降、毎列車が谷川に停車するが、その列車を優先先行させるため、福知山行きの快速列車を篠山口で一二～一八分も時間調整で待たされ、ウンザリします。なんとか改善してもらいたいものです。

丹波は黒豆等で、すでに全国的に有名であるが、その良いイメージを維持し、都会人、外国人にも開かれたコミュニティを築いて、更に発展していくことが望まれます。以前、転居通知を出した折には、関東の友人はほとんど例外なく、一度丹波を訪れてみたいと言ってくれています。その際はじっくり丹波を味わって、それなりに消費してもらわなくてはと思っています。丹波ファンを一人でも多く増やしたい。微力ではありますが、出来るところからお手伝いして行きたい。

空飛ぶグライダーの如く

村上　茂（山南町在住）

ガタンゴトン、ガタンゴトン……、実家のすぐ裏を、定刻どおりに走る早朝六時の福知山線快速電車の音で目をさます。私のUターン生活の一日の始まりだ。

土曜、日曜、祭日関係なしに、大抵はこの時刻から一日がスタートする。今日は何日？　何曜日？　なかなかすぐにはピーンと来ない。こんな規則的な生活が故郷で送れるとは全く思ってもいなかった。早いもので、Uターン生活も六年目を迎えることになった。

もしもあの時、あの物（者）に出会っていなかったら今頃、一体どんな生活をおくっていたであろうか？

と考えると、何とも不思議な感じすらする。あの時の、あの出来事が私の第二の人生を変えてしまった。自分でも全く予想だにしなかったことで、時には夢ではと錯覚することさえもある。

あの時、あの物との出会い？。そう、二〇〇六年八月七日、真夏の日差しの強い昼下がり、旧友の足立洌氏と実家の前を流れる篠山川の河床敷きの地層を調査中に、太古に眠る大型生物の体の一部が露出しているのが私の目に飛び込んだ。これが私の故郷での生活を大きく変えることになった国内最大級の草食恐竜「丹波竜」の肋骨であった。

そして、この四年間の発掘調査で採集された大・小一万個に近い化石数が次々と丹波竜とその時代の周辺環境の全貌を明らかにさせてきている。丹波竜と共に歩む過去四年間と、今後に私のUターン生活を充実させ、有意義なものにしてくれる強いパワーに、誰にともなく感謝して過ごす日々である。

◆会社人間からの解放

二〇〇五年、大阪・梅田の繁華街の一角にある中華料理店で部下や同僚に送られて三七年間無事勤めあげた視聴覚・光学機器メーカーの国際営業部を退社し、完全な田舎生活を始めることになった。六〇歳の定年

を迎えるに当たって、「自分は六〇歳までエンジン全開で頑張ってきたつもり。六〇歳以降はエンジンを一旦止めて空飛ぶグライダーのごとく、自然体でゆったりと飛行をつづけ、無理をせずに飛び続けられるだけを飛べればいい。そして、静かに着地すれば文句のない人生であろう」とずーっと思ってきた。

会社という拘束される社会から解放されることが何よりもうれしかった。エンジン全開して飛行していたときの肩に背負った荷物を全部放り出し、軽くなってグライダーに乗り移った。そして、スーツを脱ぎ棄て、ネクタイも外したその自由感になんとも表現できない解放感を覚えた。しかし、正直、会社には多くを感謝しないといけないとも思っている。入社後、海外向けの販売一筋で世界の広くに出向き、たくさんの人との出会いを通じて見聞を広めてきたことは、私のこれからの人生の大きな支えになってくれるのも決して忘れるものではない。

◆Uターン人生は独身生活？

定年前によく家内と話しをしたものだ。自分は定年を迎えたら田舎に帰る。特別にやりたいことがあるわけではないが、父親が生前に息子（私）たちが帰ってくれることを期待して建て替えてくれた我が家にどうしても住んでやりたかった。面倒みる両親は今はいないが、両親が世話になった地元の人たちにも何らかの役に立ちたい気持ちも強かった。

「お父さん、そんなに田舎に帰りたかったら、一人で帰ったら？　私は娘の近くでマンションでも借りて孫の世話などして過ごしたい。あんな不便で生活しにくいところに帰りたくない」

このこと（帰郷）が話題になると、いつも我が家は険悪な状態になった。確かに、母親亡き後、父親が一人で住んでいたころ、月に一、二回の里帰りでも何かと理由をつけては一緒に帰らないことも多かった。その都度、なぜ嫁は帰らないのかとのオヤジの言葉に、「いや、今日はたまたま他に用事があるようで帰れんかった」と苦しい言い訳をすることも少なくなかった。私には二人の娘がいて、定年前に次女が先に結婚して宝塚に住んでいる。長女は相手もいない状態だったが、どうしてか、定年を迎えるころ、ようやく結婚の相手

が見つかり、結婚することになった。東京勤務の相手は結婚を機に大阪本社に戻してもらうことになったのだが、急に住む家を探さないといけなくなり、相談を受けた家内が「どう、私たちの家に住まない？　私はお父さんと田舎に移るから……」。そばで話を聞いていた私は、家内の突然の言い出しに「この機会を逃したら、一生、自分は田舎でひとり暮らしだ」と思い、「お母さんの言うとおり、この家を提供しよう」ということにおさまり、夫婦そろって丹波にUターンできたことを今更ながら喜んでいる。

◆田舎生活のスタート

田舎（山南町下滝）に戻った私は、何の目的も目標も持ち合わせていなかった。一〇アール程の田畑に米を作ったり野菜を栽培したりしていたが、所詮、打ち込めるの程の仕事にもならなかった。持て余す時間の中で、家のまわりのことを少しずつ手がけてきて、好きなゴルフを週に一、二回（会社のころは月一回）やることにも、特に家内の苦言を聞くこともなかった。時には家内をつれてゴルフに行ったのも、苦言から逃れるためであった。しかし、生活に大分なれるようになると、田舎では六〇歳は若者、もっと年を重ねた人でもいろいろと仕事をやっている。ぶらぶらしている亭主のことがどうも気になるみたい。何か仕事を探したら？　にも、なかなか田舎のこと、自分にあった仕事が見つからない。「亭主が定年後ゆっくりさせてもらえるのは一年が限度か？」を実感するようになった。

◆旧友との再会

ある日、一本の電話がなった。大阪での学生時代を共にした仲のよい友人の一人からだった。もう三〇年も会っていなかった。柏原町にある「年輪の里」の喫茶店で会った二人は、お互いに近況を話し合いながら、畑仕事やゴルフでなんとなく時間を過ごしている私に、彼の趣味の一つである地学に関すること（地層調査や化石さがし）への誘いを受けることになった。幸いにも私の住んでいる山南町下滝は篠山層群といわれる一億一千万年前の地層が残っているところ。ここらあたりで地層を調べたり、化石さがしたりしながら地元をもっとよく知ろうとした私の気持ちを動かした。

その結果、恐竜マニアや愛好家たちからうらやましがられる大発見につながった。思いがけない旧友との再会が一連の幸運のドアを開くことになったのです。化石発見から半年遅れてマスコミに発表したあと、友人と二人で確認し合ったものです。「お前と俺は、この恐竜を通じて切っても切れない強い糸で縛られてしまった。これは死ぬまでどうしようもない二人の運命だな」と笑ったものです。

◆地域社会への参画

友人と二人で名付けた「丹波竜」が二〇〇七年一月の発表により静かな地域を急にごったがえすことになった。車や電車で見物に来る人は一挙に地域住民の数倍となった。ちょうどその頃、山南町時代の上久下（校区）公民館が市の指定管理者制度のもと「地域づくりセンター」として地元で管理、運営することとなった。初代活動推進員（センター長）に当時の地区要職にある人達が私の家にやってきて「Uターンして間がない君だが推進員を務めてくれないか。君は今やこの地区で知らない人がいない。上久下地区のために何とか頑張ってくれないか」と頼まれて、「私にできることなら……」と快諾した。

恐竜化石発見で、何とかしてこの急速に高齢化の進んだ、活気に欠けた、生活面での不便さの目立つ地域に活力をつけたい。そんな気持ちだけで今日まで過ごしたように思う。

化石発見以降、地域住民の五〇倍（約八万人）の訪問客を受け入れるようになった。見学者のための案内板、木製実物大モニュメントや展望台、恐竜の里広場には農野菜、グッズの販売、化石発掘体験などの施設（元気村かみくげ）をつくり地域の活動拠点としている。

これらすべてに中心的役割を果たせたことは喜びと誇りに感じるところ。また、講演活動を通じて多くの、それぞれ異なる分野で活躍されている人たちとの出会いは、何にも優る丹波竜から私への大きなプレゼントとなっている。お陰さまで、家内も田舎生活になれて不平不満なく過ごしてくれているのが救いであり、家庭内円満である間は地域のために汗を流す気持が折れることはない。

後世への「つなぎ」の役目

上田　脩（春日町在住）

◆自己紹介

私は昭和一八年七月二〇日に丹波市春日町棚原で四男三女の末子として生まれました。国領村立進修小学校から春日町立明徳中学校、そして、兵庫県立柏原高校を昭和三七年三月に卒業しました。第一四回卒業生となります。昭和三七年四月に関西学院大学に入学。昭和四一年三月卒業と同時に東リ株式会社（旧・東洋リノリューム）（本社・兵庫県伊丹市）に入社、同時に営業として東京勤務の辞令を受け、五月二三日に東京駅に降り立ちました。二二歳の時でした。

現在の妻と東京で出会い昭和四六年に結婚、二人の息子に恵まれ、次男が誕生した昭和五三年に名古屋勤務の辞令を受け、家族で引越し。四年たった昭和五七年に東京勤務の辞令により東京に転居しました。

東京在住時代には「関東氷上郷友会」の九段会館での総会・懇親会に出席させて頂き、またゴルフの仲間にも入れて頂きました。丹波の我が家には一九八七年一二月一一日、真名カントリークラブで足立様、近藤様、岡林様とプレーし、グロス94、ネット76で優勝しました時の伴仲信次杯の立派な楯が飾ってあります。

◆学生時代

柏原高校時代の最大の思い出は、昭和三六年春の第三三回選抜高校野球大会に近畿地区を代表して同期の選手が主力になり出場したことです。その当時、私は柔道部のキャプテンをしておりましたが、急遽設立された応援団の団長に指名され、三月二九日初戦で作新学院と対戦、丹波から貸切バスを連ねて駆けつけた満席のアルプススタンドで声を嗄らして応援しました。結果は作新学院の八木沢投手（後に早稲田大学からプロ野球で活躍）の好投により2対0で惜敗しました。青春時代の思い出の一コマとなりました。

関西学院大学時代は文化総部の「謡曲部」に飛び込み、日本の伝統芸能・世界遺産「能楽」の虜（とりこ）になりました。何故「謡曲部」に入ったのか……。生まれ育っ

素謡「盛久」シテ
（於：京都嘉祥閣）

た丹波は昔から伝統的に「謡」が盛んな所でした。父母は私の小さい時から、いつも近所の人達と「謡」を楽しんでおりました。

その声が私の体に沁み込んでいたのでしょう。「謡曲部」の部室の前を通りかかった時、聞こえてきた「謡」の響きに引きずられ飛び込んだというのが実態です。

「謡曲の更なる精進」は、丹波に於ける生活の骨子であり、丹波市謡曲同好会監事、春日謡曲を楽しむ会、成松浅井松吟社、阪神間の仲間の会「友宝会」の代表を務め、氷上寿学級謡曲クラブの講師等謡曲三昧の毎日を送っています。

◆丹波にUターンの動機

勤務していた東リ㈱の役員をしていた平成9年に、創業九〇年になる老舗得意先（本社・東京）の再建を命じられ、社長として出向しました。着任早々、山一證券・北海道拓銀等の破綻に始まる経済環境の様変わりの中、会社再建は容易なことではありませんでした。四年目を迎えた平成一三年に主力株主に抜本的な支援をお願いし、それがまとまった一一月に、私を含め全役員が責任を取って辞任しました。そして、翌年一月に東リ㈱を退職しました。

元々、いずれはUターンすると決めていましたので、それが少し早まっただけとのことで、成人になっていた二人の息子を東京に残し、生まれも育ちも北海道の女房と二人で、平成一四年三月に故郷・棚原に転居しました。

◆歴史文化を大事にする地域づくり

故郷・棚原には先人達が遺した貴重な歴史文化資源が数多く存在していました。それらは神社、仏閣であり、ご神体や本尊を祀ったお堂・祠、大小の石像物、そして江戸時代から大正にかけての数多くの古文書等でありました。これらの文化資源の歴史、謂れ、存在する理由について、一部のお年寄りの間で語り継がれ

ているだけで、正確な史料として残されていないため、殆どの地域の人達は知らないのが実態でした。

四〇年間離れた故郷に対する恩返しとして、数多く存在する棚原の歴史文化資源に光を当て、調査・研究した上で大切に保護・継承し、後世に伝えていく「つなぎ」の役割を果たすことを使命としようと考え、地域の有志と一緒に平成一六年四月に「棚原パワーアップ事業推進委員会」を結成し事務局長に就任しました。

〈平成一六年～一七年度の活動〉

棚原の歴史文化資源をまとめた本「棚原見てある記」（A5判・カラー91ページ、７００円）を平成一七年三月一日に発行しました。同書には棚原の歴史、地図、名所・旧蹟、自然遺産、古墳・遺跡、古文書、指定文化財、伝統行事・言い伝え、文化資源所在略図、年表を掲載しています。詳しくは棚原のホームページ「http://tanabara.gozaru.jp/」をクリックして頂き「棚原の里:故郷探訪記・棚原見てある記」をご覧ください。

〈平成一八年～二一年度の活動〉

棚原の古いお堂の中には江戸から明治時代にかけての数多くの古文書が保管されていました。大正二年に調査された時の簡単な目録があるだけで実態は殆ど把握されていない状況でした。この課題を解決するために丹波市教育委員会と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの協力を得て「棚原歴史文化研究会」が発足しました。

①　棚原古文書の調査と目録作り

神戸大のスタッフより古文書の取扱方、調査方法、目録取り等の基礎的なノウハウを伝授していただきました。しかし、古文書を読んだことのない我々にとっては大変苦痛な作業でしたが、寛永四年（一六二七年）から明治時代までの文書約一千点の目録を取り終えることができました。

②「棚原の古文書を読む会」の開催

出来るだけ古文書の理解と読める人を増やすため、地域住民と地域外の興味ある方を対象にして「古文書を読む会」を平成一八年～平成二〇年にかけて五回開催しました。

③「故郷をもっと知ろう…親子教室」の開催

棚原の子供達及び、その父兄を対象にして棚原の歴史文化を勉強する「親子教室」を開きました。

④「古文書展示会」とその「解説セミナー」の開催

平成一八年から調査を開始した数多くの古文書の中から主要な文書の公開展示会と同時に代表的な文書を教材にした「棚原歴史の解説セミナー」を棚原公民館で開催しました。

⑤パンフレット「ここまで分かった棚原の古文書」発行

古文書の調査・研究のまとめとして、「ここまで分かった棚原の古文書」パートⅠ、パートⅡを発行し、地域住民に配布しました。

〈平成二二年度の活動〉

調査した古文書の中に大正五年に当時の村長が「将来村誌材料トナルモノヲ蒐集シテ二巻トシテ保存ス」としてまとめられた巻物二巻がありました。その巻物には約一千点の中から元禄～嘉永時代の二九点の文書が蒐集されています。

この巻物に蒐集された文書をテーマ毎に分類の上現代語に訳し、読み易いエッセー風にまとめ、冊子として平成二三年三月に発行する予定です。

◆丹波生活に於ける菩提寺との係わり

故郷・棚原にある浄土宗の菩提寺「松林山浄圓寺」は慶長元年（一五九六年）開創されました。

その菩提寺にて平成二〇年一〇月一五日から一九日の五日間にわたり五重相伝会が開筵され私も参加しました。毎朝、真っ白な浄衣とお袈裟を着け、お香で身を清め、たくさんのお坊さんに導かれながら、心をしずめて一心にお念仏を唱え、一歩一歩本堂に入場していきました。この緊張感と感動は、終生忘れることはないでしょう。入場する本堂はいつもの見慣れた場所ではなく、五日間儀式が行われる道場へと変化していました。

初日の開白法要から始まり、先ずは剃度式、そして四日目の懺悔式を行う暗夜道場、最終日の要偈道場と密室道場です。この五日間は長い歴史と伝統を踏まえた全て約束事であり、何から何まできっちりと組み立てられておりました。五重相伝会を受け仏門に帰依したこれからの日々、尊祖崇佛、お念仏を欠かすことなく仏さま、先祖さまに見守られながらの人生を送っていこうと決意した次第です。

丹波まちづくり八景

小橋昭彦（春日町在住）

七月の週末。農商工連携「丹波ニューツーリズム」事業のモニターツアー。遊休農地を都市部の企業に貸し出し、食や自然について学ぶ「研修会場」に利用してもらおうという計画だ。五十代の移住者が起こされた会社と農家が協働、単なる農業体験ではなく、継続的に農地を社員教育に活用できるのが特色。「はたらく」ことの基本に、生命や環境への思いやりのある世の中にしたいと考えて、ぼくも協力させていただいているが、商品化に向けてはまだ課題が多いと痛感。

#

翌日は、日が傾いた夕方から、「こどもの森」の整備（写真）。地元の小学校区で今年からはじめた事業で、こども園と小学校に隣接する山を、子どもたちが遊べるように開こうとしている。三十年近い歴史を持つ「春日町森林同好会」の指導の下、自治協議会とこども園運営協議会が加わり、地域をあげて取り組んでいる。作業はこの日が一回目。まずは常緑の低木や下草刈り。一時間あまりの作業で、森は見違えるほど明るくなった。かつてはあたり前だったろう子どもの山遊びも、今では山が荒れてまず見かけない。森と子どもの距離を、再び縮めたい。

#

この、こども園運営協議会というのは、民生委員や小学校の校長先生、ＰＴＡ、こども園保護者会などからなる、地域こぞって子どもの成長を支える組織であ

る。わが小学校区ではこの春、保育園と幼稚園が合併して認定こども園が開設されたが、それに伴って作ったもので、全国的にもユニークな組織ではないかと思う。子育て支援が注目される時代にあって、地域と連携した子育て環境作りのモデルになればと願っている。こどもの森整備を通じ、地域と連携して自然保育・教育をする場として認知を高め、全国から子育て世代が移住するきっかけにしたい。

#

翌朝。凝った筋肉をほぐしながら、全国の恐竜関連情報をチェックし、ウェブサイト「恐竜.info」に反映する作業。丹波市での恐竜化石発見に続き、篠山市でも哺乳類や角竜の化石が発見され、篠山市から丹波市にかけて広がる「篠山層群」が、有数の化石産出地として注目されている。この春、恐竜化石をまちづくりに活かそうと、県の主導で「たんば恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会」が設立された。前述のサイトは、事務局を務められている財団法人兵庫丹波の森協会とともに立ち上げた、この協議会のホームページである。丹波地域の情報だけではなく、世界の恐竜情報を収集・発信し、恐竜に関しては日本随一のサイトにしようと狙っている。そんなわけで、自らの勉強も兼ねて、日々何本かの記事を追加。観光協会が丹波焼の恐竜カップを作ったり、地元団体が発見現場の残土をさらに細かく割って化石をさがす「三〇〇人の発掘大会」を催したり、協議会会員はみな、元気だ。それらを情報の力で後押ししたい。

#

午後、丹波新聞社から、お願いしていた記事のデータが届いた。毎週の定例作業だが、これをサイトに反映させる作業を依頼する。こちらは、丹波市から委託されている、ふるさと丹波市定住促進会議（副委員長を務めさせていただいています）のホームページ「いきいき定住物語」のサイト。一週間（二号分）の丹波新聞の記事から、地域づくりや都市農村交流に励む地域団体・人の記事をピックアップし、ホームページに転載している。地域でがんばる人たちを応援するとともに、志を同じくする全国の人たちに呼びかけ、丹波への移住を促したいという狙いだ。毎週四、五本の記事を取り上げており、それらを読むと、丹波にはなん

と多くの、志を持って地域のことに関わる人がいるのだろうと、いつも感動する。

#

ふるさと丹波市定住促進会議は、十人ほどの民間委員が中心だ。もともとそれぞれの立場で地域づくりに関わってきたメンバーばかりで、会議の場でも、定年後にゆっくりする田舎もいいが、若者が夢を持って挑戦に来てくれる町にしようと、意気投合している。今、日本では地球温暖化や無縁社会が課題となっている。そうした時代において、丹波地域に残された自然環境や地縁は、最先端の「地域資源」ではないか。これらを活かして日本の未来を切り拓く、挑戦心あふれる若者に来てほしい。合言葉は『丹波から、挑む』。丹波市が連携協定を結んでいる関西大学の学生さんたちとも協力して、自分たち自身が「挑んで」いる。

#

若者といえば、先日、有機農業の世界大会が神戸で行われ、視察ツアーとして、各国の農業者が丹波市を訪問された。交流会で、ここ数年内に丹波市へ新規就農された方々を紹介する機会があった。その場で驚いたのは、そこに立った人だけでも二十名近くと、丹波市に、すでに多くの若い就農者、それもIターン者が多くいるということだった。これには、早くから「有機の里」として力を入れてこられた市島町の取り組みの積み重ねが大きい。視察受け入れの母体となった、丹波市有機の里づくり推進協議会のホームページでも、これら若い人たちの姿を通して、農業の、丹波市の未来を伝えたいと、決意をあらたにした次第である（写真は有機農業の実地研究に励む仲間たち）。

#

有機の里づくり推進協議会の例会が毎月第一火曜だから、その夜はいつも、毎週火曜が定例会の丹波医療再生ネットワークとはしごになる。丹波の医療といえば、お母さん方による「県立柏原病院の小児科を守る会」が有名だが、丹波医療再生ネットワークは、開業医や薬剤師さんが中心になって結成された集まり。縁あって、末席で勉強させていただいている。七月からは、毎月第二火曜に「ざわざわカレッジ」という講演会を開催し、広く地域の人々に医療を学ぶ機会を提供している。ぼくもiPhoneを片手に、インターネット中継をお手伝い。医療崩壊は、全国的に大きな課題になっているが、住民主導で医療再生を図ろうとする丹波の動き、ぜひ今後とも注目いただきたい。

#

近況報告も兼ねて、最近関わっている動きからいくつかを紹介した。しかし、自治基本条例や若手企業家の研究会、地域を超えたツーリズム連携、丹波布や芸術家の集いなど、触れられなかったことも多い。少子化・人口減少が進む中、丹波には、それほど多くの、自分たちで地域を活気づけようとがんばっている人たちがいる、ということだ。

最後に、時を遡って、数年前のエピソードを紹介したい。ある大手電信電話会社から、社内報向けのインタビューを受けたときのことだ。質問のひとつが、

「私たちに何をしてほしいですか？」

だった。誰かに依存する考え方に慣れないぼくは、とっさこんな返答をした。

「むしろ、みなさんが地域のために何ができるかを、考えてほしい」

何万人と社員のいる会社である。地方出身者も多いと聞く。そのひとりひとりが、自分たちのふるさとのために何ができるかを考えて、行動してほしい。それが積み重なることで、大企業が変わり、日本が変わる。そんな思いから口に出た回答だった。

拙稿をお読みいただいたみなさんに、これまでの地域への愛情を感謝するとともに、これからも、ふるさとのために、そして力を尽くす仲間たちのために、お力添えをお願いして、筆をおかせていただきます。

（柏原高校昭和58年卒）

スモモの生る家

片岡恭子（山南町）

今年も我が家の庭に沢山のスモモが生りました。狭いながらも花と実が楽しめる木を何種類か植えています。でも、大きくなっては困る思いがあって、毎年刈り込みをしていました。ある年、刈り込みが出来ないことがあり、これが幸いして、次の年から、小さいながら立派に実をつけるようになりました。脚立を目一杯広げ、それに登り、手と虫採り網を使っての収穫です。これまで木に登ったこともないのに頑張れるのは、折角生った実を鳥の餌にしたくない一心です。

今回、採れたスモモは隣近所、職場の人達、知人などに分け、その数は千個以上になりました。私もゼリー、ババロア、ジャム、アイスクリームに混ぜ込んだりしていろいろ楽しみました。が、採れた半分は処理しきれず、捨てる結果となりました。

実家（常徳寺）の井戸の側にも、大きなスモモの木

がありました。幹も太く、古い木だったように思います。今では家の改築で切られてありません。

お寺に続く石段も、工事の車が入れるよう半分程削られてしまいました。この石段の両脇には竹藪があり、大きな桜の木も何本かあり、春には檀家の人達のお花見が催され、私たちの目を楽しませてくれました。

雪が降った寒い朝には、雪の重みで「バシッ」「バシッ」と竹が割れる音を、お布団の中で聞きました。学校に行く頃にも、竹がしなって雪のトンネルが出来ていました。

二十三歳頃まで、家族と過ごしたあの日、あの時の思い出の詰った懐かしい家でした。その家も檀家の皆様のご尽力で新しいお寺に生まれかわり、平成十年三月、落慶法要が行われました。

自衛官の主人と結婚して、佐世保に三ヶ月。山育ちの私には、急な坂道が多く、高台にある家から、出入りする艦が良く見える風景は珍しいものでした。

この頃、今は亡き、従兄の竹村正男先生（柏高）が故郷を離れて暮らしている私を心配して、修学旅行（引率）の際、訪ねて来てくれました。

佐世保の次は、横須賀へ。練習艦「かとり」（世界一周）、砕氷艦「ふじ」（南極）に一年ずつ乗り組み（何れの艦も今は廃艦に）、帰国後は、江田島、呉に一年、そして、私と子ども達は横須賀に落ち着きました。

主人は、家族（母子家庭）を支えるため、高校を中退、海自生徒一期に入隊、トップを走り、幹部候補生学校に進み、努力で裏打ちされた表街道を歩んでいました。が、四十九歳の若さで、この世を去りました。

存命中は、私も幹部の奥さんということで、日本、米軍の奥様方との交流（日米夫人会）があり、横須賀に寄港していた「ミッドウェー」や「ブルーリッジ」を見学させて頂いたり、ベースの中にも気軽に入ったり、オフィサーズクラブでの食事も貴重な経験でした。

横須賀は海あり山あり、温暖な気候で、住みやすい所です。でも、生まれ育った故郷ほどいいものはありません。帰っても、もう父や母が迎えてくれる訳でもありませんが、なぜか帰りたくなります。

今は、片道二千円程の料金（高速道）で行き来出来ますので、運転出来る間に出来るだけ帰郷したいと思っています。過ぎ去った日々に浸りながら……。

軍歌からリンゴの歌へ

―鴨庄村の場合―

丸川　健三郎（市島町）

毎年、終戦の日が近づくにつれて、否応なく昭和二十年という年のことを思い出す。その当時、私が住んでいた兵庫県の丹波地方は大都会とは違って、戦争の影はやや薄かったし、私もまだ小学校（国民学校）の三年生と幼かったが、それでも、この日を境として世の中が大きく動いたことはよく分かった。この文では、その頃歌っていた歌を手掛かりに、私の周辺での変化を綴ってみたい。

＊出征兵士を送る＊

この年の六月、私の一家は徳島市から兵庫県の鴨庄村（現在、丹波市市島町鴨庄地区）へ戦争疎開で引っ越してきた。引っ越して間もなく、たぶん六月末の頃だったと思うが、出征兵士を見送ったことがある。その頃、都市部では、出征兵士の見送りは近親者だけの質素な形になっていたようであるが、鴨庄村では大勢の人が参加する形の見送りが普通に行われていた。

見送りの当日、小学生は特別の早起きが必要だった。出征が、一番列車に間に合うようになされたためである。参加するのは出征兵士と同じ部落に住む生徒に限られていたようだが、それでも二十人ほどが集まった。部落の大人達も大勢集まった。その場所は村の鎮守の神様、知乃（ちの）神社であった。この神社は村の西の端近くにある。

神社は鬱蒼とした森に囲まれていたが、夜明け前のこととて、一層荘厳な感じを漂わせていた。その境内に、幟旗を背にして白たすき姿の出征兵士が立ち、それを中心として皆が集まった。たぶん、村の長老からの挨拶などがあったのだろうが、それは覚えていない。ただ、出征兵士の緊張した顔ばかりを覚えている。その頃は既に戦争も末期で、出征兵士の生還は難しいのでないかと、皆が不安を感じていたはずである。兵士の顔にも決死の覚悟が現れていたのだろう。

集まった生徒たちは、出征兵士がいよいよ出発するときに、日の丸の手旗を振りながら、「出征兵士を送る歌」（作詞・生田大三郎、作曲・林伊佐緒）を歌った。

この歌は今でも代表的な軍歌として、時々聞くことがある。これは戦に出て行く勇士の悲壮感を歌いあげた出来の良い軍歌なのだろう。しかし、私はこの歌がどうも好きになれない。むしろ、この歌を聞くと、憂鬱な気分におそわれる。それは、あの時の出征兵士の見送りを思い出してしまうからかも知れない。まだ夜の暗さが残る神社境内の様子や、私語さえも許されないような、その場の重々しい雰囲気を思い出すのである。

＊軍　歌＊

前掲の歌はともかくとして、軍歌は当時の子供達の好みであり、私もよく歌った。当時はやったものには、例えば「空の神兵」「加藤隼戦闘隊」「ラバウル海軍航空隊」「若鷲の歌（予科練の歌）」などがあるが、子供達の間では、軍歌の替え歌もよく歌われた。

しかし、あの当時の状況は、年頃の若者にとっては、替え歌などを歌って喜んでいるほど甘いものではなかった。軍歌の歌詞をみても異常な世の中であったことがよく分かる。前掲の「出征兵士を送る歌」にも「我が大君に召されたる生命（いのち）」と言う言葉が出てくるが、軍歌の中には死を思わせる文言が沢山散りばめられているのである。例えば、「恩賜の煙草を頂いて、明日は死ぬぞと決めた夜は」（空の勇士）、「花も蕾の若桜、五尺の生命引っさげて、国の大事に殉ずるは」（学徒出陣の歌）、「東洋平和のためならば、なんの命が惜しかろう」（露営の歌）など、枚挙に暇がないくらいである。学校教育の中でも軍神（戦功を挙げて戦死した兵士）が讃えられ、国に生命を捧げることの尊さが教えられていた時代であった。

＊終　戦＊

終戦となって世の中は変わった。まずは、鴨庄村へもジープに乗った進駐軍兵士がやって来た。村の役場へ来たのだが、さらに村の一番奥にある神池寺まで行って、隠匿された武器などないかを調べたらしい。

村の雰囲気も終戦に伴って徐々に変化した。私の周辺の変化のひとつは、この文の表題の通り、軍歌からリンゴの歌へ、であった。ただし、「リンゴの歌」（作詞・サトーハチロー、作曲・万城目正）が登場するのは終戦の数ケ月後である。戦後いちはやく現れたのは流行歌と言われるジャンルの歌で、これはもともと戦争中からあったものである。軍歌に圧倒されて隠れて

いたのが、終戦とともに息を吹き返したのであろう。
私の周辺で流行歌を歌ったのは、当時、我が家の二階に住むことになった二人の若者であった。植村さんと西木さんで、二十歳前後の方である。この若者がなぜ我が家へ来ることになったのか詳細は知らない。典型的な軍需産業であった東洋ベアリング社が終戦とともに改変され、その柏原分工場が閉鎖となったが、そこに勤めていた私の父は行き場を失った。父の部下であった二人も、その時に行き場を失ったのであろう。とにかく、我が家に来た二人には特に忙しい仕事がある様子はなく、村の製材所に出かけては、そこの隅にあった金工用の旋盤を使って、木製のお椀などを作っていた。もともと旋盤工だったのだろう。
私は時々、二階の若者たちの部屋へ遊びにいっていたが、二人とも歌が好きで、私の知らない歌をいくつも教えてくれた。例えば、「男の純情」「旅の夜風（愛染かつらの歌）」「誰か故郷を想わざる」「勘太郎月夜唄」などである。二人のうち西木さんが特に熱心で、これらの歌を大学ノートに、一頁に一曲ずつ、きれいに書き写しておられた。当時は歌の本などない時代だったから、このような歌詞も口伝てに仕入れたものが多かったであろう。西木さんにとってこのノートは宝物のようだった。

＊戦友の死＊

西木さんのノートに軍歌はなかった。ただし、一曲だけ軍歌に分類されるかも知れないものがあった。それは「九段の父」（作詞・大高ひさを、作曲・能代八郎）であった。悲しい調子の歌で、戦死した戦友の父を背負って靖国神社へ参拝する情景を歌ったものである。戦友は、「心に残るはただひとつ、手足不自由な父のこと」と言い残して戦死したのであった。西木さんは時々この歌をしみじみとした調子で歌っていたが、友達か親戚に戦死者がいたのかも知れない。
終戦後何年も経た現在では、戦死者のことなど忘れ去られてしまったかに見えるが、沢山の方が戦争で亡くなったのである。私の親戚でも伯父の一人がビルマ戦線で戦死なさっている。そして後には伯母と子供五人が残された。いま手元に「鴨庄村誌」があるが、これには昭和十二年以後の村からの出征者がすべて記載されている。それによると、昭和二十年一月以後に出

征された方(総数三十八名)に戦死者はいない。たぶん、前線に送られる前に終戦を迎えたからであろう。私達が見送った出征兵士も、無事帰還されたに違いない。しかし、この年以前はひどい状況で、特に昭和十八年の出征者の場合は、総数四十一名、そのうち実に十八名が戦死されている。出征の時に悲壮な覚悟をせざるを得なかった訳である。

＊リンゴの歌＊

「リンゴの歌」は戦後のヒット曲第一号と言われている。これは終戦の年、十月公開の映画で使われているので、はやり出したのは年の暮の頃だろう。この歌には、戦争中には見られなかったような明るさがあった、とよく言われる。いま、振り返ってみると、それは当時の若者達の明るさの反映でなかったか、と思われる。そして、その明るさをもたらしたものは、端的に言えば、若者達がもはや出征することも、戦死することもなくなったという事実であったろう。我が家にいた二人の若者は、軍需産業従事者の故をもって徴兵を免れていたようであるが、それでも、戦争中は徴兵の可能性や、本土決戦の予想からくる重圧感に悩まされていたはずだ。

あるとき、例によって二階に遊びに行ったときに、この二人が取っ組み合いのけんかをしているのに出くわしてしまった。原因が恋のさや当てにあることはすぐ分かった。植村さんが彼女からもらった写真を、西木さんが傷つけた、と言ったことのようであった。植村さんの彼女については私にも見当が付いていた。製材所の近くに住む娘さんで、ちょっとおしゃれで、「リンゴの歌」が似合うような明るい感じの人だった。このけんかがどのような結末になったのか、私はすぐその場から退散してしまったので、分からない。ただし、この恋が実らなかったことは確かである。新しい年を迎える頃には、この二人の若者はそれぞれの故郷へと帰ってしまったからである。

植村さんや西木さんのように、運良く出征を免れた人もいた。終戦が間に合って無事戦地から生還できた人もいる。しかし、「リンゴの歌」を聴くこともなく、逝った兵士もまた多かったのである。

故郷の思い出

藤田純子（市島町）

丹波を出て四〇年余り過ぎました。歳と共に故郷を懐かしく思う気持ちが一段と深くなってくるようです。唱歌「故郷」のように、子供の頃を思い浮かべますと、故郷の山や川が鮮明に蘇ってきます。家の前から見た山の稜線、村では一番高いこの山に学校の遠足では、汗を掻き掻き、やっとの思いで登ったこと。それが、いつか実家に帰った時、その山にはテレビの中継塔が建ち、車でスイスイと頂上まで行けるようになっておりました。

川と言えば、夏休みになると川へ水泳に行っておりました。早い昼食を済ませると、地域の大きい子達に連れられ、子供の脚で二〇分近く歩いて大川へ。大人の監視があるわけでもなく、ただ、この辺りから先は深みがあるから行かないようにと言われていたくらいで、大きい子達が良く面倒を見て、危ないこともなかったようです。大きい子は潜って魚を獲ったり、浅瀬を堰き止めて、何かの草で水面をたたき、なんだかボーとした状態になっている魚を獲るような漁法（？）もあったようです。女の子は小さな石の下にいる小魚やカラス貝を獲ったり、ワイワイ、バシャバシャ、水遊び。水泳というより水浴びというようなものでした。炎天下、帰る土手には川原撫子（なでしこ）が沢山咲いておりました。心地よい疲れでの帰宅後はお昼寝です。その川での水泳もいつの頃からか、川砂利の採取で出来なくなりました。その後、学校にプールが出来ましたが、私たちが学校のプールに入ったのは高校の二、三年の頃だったように思います。

故郷の思い出で忘れられないのが蛍です。家の近くの小川でも飛んでおりましたし、時には家の中へ入ってくることもありました。「蛍を捕りに行こう」という時は大川まで行きました。菜種の種を落とした空枝を持ち、それで打ち落として、ネギ坊主の茎に入れました。すると緑の茎を通して柔らかな明かりが点滅し

て見られます。大川には竹藪が川面を覆っているところがあり、その竹一面に蛍が止まって、幻想的な光を点滅させています。そして、それが川面に映り、二倍の輝きとなり、正に満天の星を見ているような美しさでした。あの素晴らしさをもう一度味わいたいと思いますが、最近あちこちで復活している「蛍の夕べ」などに行ってみても昔の感動は得られません。やはり遠く離れた故郷のずっとずーっと昔の思い出だから、余計に素晴らしいのでしょうか。

今では一年の過ぎるのがあまりにも早く、出来ればお正月など来てほしくない心境ですが、子供の頃は本当に指折り数えて待っていたお正月でした。元日にはみんな揃って学校に行き、お正月の式典がありました。帰ってくると凧揚げ、独楽まわし、羽根つき、カルタ、福笑い、双六と、みんなで楽しい遊びがいっぱい。私たちの地区は小さく、子供の人数も少なかったので、順番に各家庭に遊びに行っていました。お昼間は外遊びが多かったようですが、夕食を済ますと次の家に。夜は炬燵に入って、カルタやトランプ、双六。大きい子も小さい子も一緒になって楽しく遊びました。時には大きい子が、怖〜い話を小さい子に聞かせたり。各家ではおみかんやお菓子を用意して持てなしました。子供なので夜もそう遅くにはならなかったと思いますが、そんな毎日が七草近くまで続いたと思います。毎日毎日遊んで、今の子供たちには考えられないことでしょう。こんな風習も子供会活動が活発になるのにつれてなくなっていったようです。登校時も帰ってからの遊びも大きい子も小さい子も一緒でした。

子供にとってのもう一つの非日常はお祭りです。秋の村祭りは一番賑やかでした。大きな神輿が宵宮から飾り付けられ、祭り太鼓が鳴り響きます。当日は氏子の若い衆が百段余りの石段を神輿を担ぎ降ろし、村の神様がお集まりになるお宮まで渡御があり、そのお宮には村の各地から5〜6基の神輿が集まって神事が執り行われます。子供たちも屋台店の沢山出ているそのお宮まで行き、普段はあまりしない買い物を楽しみました。夕方にはまた神様は帰って来られ、石段を登っての宮入です。もう半世紀以上も前の思い出です。道路や街並みは変わっても、懐かしい故郷の風景や行事はそのままに、記憶の中に生き続けています。

故郷との距離

古倉徹夫（柏原町）

◆大阪からの故郷通い

就職して二〇年近くの東京暮らし、父に「一〇年間は好きなことを……」と言い、「あと一〇年だけ好きなことをさせて欲しい……」と繰り返し、お盆と正月だけの故郷帰りをしていました。

そんな父も亡くなり、家庭の事情で大阪まで戻り池田市に自宅を構え、九年間、私の〝故郷との距離〟は手の届く近さになりました。

さすがに「平日は勘弁して……」と言いながら、母の思いもあり、長男としての務めを果たすべく、大阪・池田からできるだけ故郷の冠婚葬祭にも参加し、地区のコミュニティにも加わるようにしてきました。

当時、五〇歳前後の私にとって、多少は歳を取ったせいもあるかもしれませんが、子供の頃には当然と思っていた、或いは、感じなかった時間と空間に触れ、本当に楽しい時間を過ごしました。

裏山からのウグイス、田植えの後の蛙、裏の竹藪からのヒグラシ、家の回りから秋の虫……、身近に四季の声を聞き……、正月行事、彼岸、お盆行事、旧暦三、五、七月節句、お宮様やお地蔵様の当番など……季節・暦の季節の行事に触れ……。

ある時には、我が家がお観音様の当番になりました。お観音様のお祭りでは女性が集まり、観音堂の中で歓談します。多分、昔、多忙で拘束されがちな女性達のレジャー・憩いの時間作りだったのだと想像します。

お観音様の敷地の銀杏（ぎんなん）も当番の役割の一つです。息子と銀杏を拾い、果肉を取り除き、洗って干して、ご近所に配ります。風に吹かれ本当に大きな銀杏の木から銀杏の落ちる光景は壮観です。秋の風が舞う度に音を立てて銀杏が降り注ぎます。こんな秋のふる里を体感したのは初めてでした。

思い出深いふる里と接する中で、長い東京暮らしの

私にとって、私の知らなかった故郷を知り、ある時は驚きと新鮮さを含みながら、故郷の四季・自然は自分の本当に好きな生活空間だと再認識する機会でもありました。

◆東京に戻ってきて七年

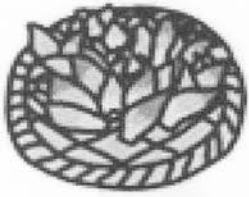
七年前に仕事の都合で東京に戻ってきました。大阪時代と同じような〝故郷との距離〟とは行きませんが、以前の東京暮らしでの〝故郷との距離〟とは様変わりしました。

現在、母も他界し誰もいなくなった柏原の実家の維持や墓参り等で、月に一度弱のペースで東京↓大阪・池田↓柏原の行程でふる里に戻っています。

ある時には、経済産業省の某委員会の委員をしていた折、偶然にも柏原町が中心市街地活性化でリストアップされていました。私は喜んで、何度か丹波市までお邪魔して、いろいろとアドバイスもさせて頂きました。

一方、家内は私の面倒（東京）と自宅の面倒（大阪）をみながら、義父母の世話もあり、大阪・池田から車で頻繁に柏原に帰っています（多分、私が一番面倒を掛けているとは想像していますが）。また、義父は柏原高校の音楽の元教諭で、高校グランドの隣に自宅があり、比較的、私の実家の面倒もみやすい距離に位置しています。

そのような中で、家内と私は、蕗の薹、タケノコ、実山椒に葉山椒、柿に栗など、柏原の実家で取れる季節の味覚を満喫し（東京からの移動のため、実際は全部の収穫が出来るわけではないのですが……）、また、義父が作る新鮮な野菜を贅沢に頂いています。



家内が実家の裏庭で取れる蕗の薹を天ぷらや佃煮にしてくれます。

子供の頃の栗の木は無くなりましたが、生前、父母が新たに植えてくれた栗が良く実ります

家内と私の時間の流れの中にはいつも故郷が有ります。家内は「都会生活も良いよね……」とは言っていますが。

◆現役後の生活を夢みて

男性は「リタイアーしたら田舎暮らしをしたい！」。でも、妻は「あなただけ行ったら……」がよくあるケースだと思います。また、現実には柏原も高齢化が進み、ご近所でも一〇年後には空き家になる危険性の高い家屋が多く点在します。

しかし私は田舎ものですし、〝故郷との距離〟が限りなく縮まり、その中に生活の一部を置き、自然を満喫した生活を送りたいと切に願っています。世間によくいる地方出身の男性の一人です。

私も年末には還暦を迎えます。家内と「現役生活もあと何年かな……」と話し合っています。私にとって幸運なのは、家内が同じ柏原町出身であり、多分（？）、私の願いを叶えてくれるものと思っています。

◆さいごに

柏陵同窓会の副会長もさせて頂いていた母から、「東京に行ったら〝氷上郷友会〟に入りなさい。あなたにとって有益なことですよ」と言われながら無精をし、結果的に母が入会手続きや会費を払ってきてくれていました。その間、私は故郷を離れ新しい世界に飛び込みたいとの思いも強く、会報のみを頂いておりました。再び東京に戻ってきて、年齢的なことでの躊躇も少なくなり、再度、会員の皆様と交流させて頂くことになり、また、この様な機会を頂き深く感謝しております。

（会社役員、同志社大学非常勤講師、㈳日本都市計画学会 理事）

タケノコはメンテが大変です。何週間にもわたり生えてきます。その間、定期的に採ったり、その後、間引いたりします。

駅伝の思い出

徳田　直三郎（青垣町）
（旧姓・外島）

故郷青垣を離れて四十六年。現在の横浜青葉区に住んで二十七年になりますが、頭髪に霜をおく年齢（六十八歳）になり、家内からは夜明けのガス燈みたいだと言われております。実家は青垣町佐治で「センバヤ」という屋号で父が薬局をしておりましたが、父母、長男も亡くなり、一人娘の姪もアリゾナに住んでいるため、今は空家になっています。丹波には二年に一度墓参りに帰るぐらいです。

活気のあった佐治商店街もシャッター通りになっていて、高齢者の一人暮らしの家が多く寂しい限りです。静かな花鳥風月の魅力ある丹波柏原町の母坪には高齢な義父母が住んでおりますので、近々帰ろうと思っております。

私の人生、特にサラリーマン生活に大きな影響を与えたのが氷上郡中学校駅伝大会でありました。その頃のスポーツ競技はなにをしても柏原、氷上（成松）、明徳中学が大変強かったと覚えています。私は勉強が全く出来ず、体育の長距離走だけが少し得意で青垣中学三年生の時に、第八回氷上郡中学駅伝大会に出場しました。大会の三ヵ月前にあった陸上競技大会では、青垣中学の誰一人入賞する者がいなかったのですが、駅伝大会だけは妙に強く、昭和二十九年から三十三年の五年間で優勝三回、準優勝二回という、まさに駅伝黄金時代でありました。

出場しました昭和三十一年の大会の様子を丹波新聞は「十一月二十一日快晴に恵まれて、十四校二十チームの選手が市島町竹山中学校を出発、合図員市島荒樋町長の号砲でスタート。晩秋の山東路を六区間二万三千五百メーターのコースを力走。駅伝一色で埋めた沿道の声援を浴び、柏原崇広小前に東中（石生）がゴールインし初の栄冠を獲得した。三年連続制覇をねらった青垣は準優勝に終わった」と書いております。

今思えば考えられませんが、他校はスポーツシューズを履いていましたが、我校は全員地下足袋で走りましたが、六区間中三区間で区間賞を獲りました。それでも優勝出来なかったのは、東中に里勝安選手がおりまして、全国に通用する驚異的な走りをし、里選手一人に負けてしまいました。里選手は後に早稲田大学で箱根駅伝のキャプテンになられたと記憶しております。私は三区で区間賞を獲りましたが、順位はそのまま四位で、第四区の足立敏晤君（茅ヶ崎市在住）にバトンタッチし、四位からトップになり、彼も堂々の区間賞を獲ってくれました。

星霜五十数年を越える駅伝の取りもつお陰で、お互い退職後は横浜で杯を交わし、駅伝の思い出話で旧交を温めています。彼は大変頑張り、東京高等検察庁を上級管理職で退社しました。教育系の大学を卒業しました私は筋違いな製薬会社の病院向け営業（プロパー）を四十年間勤務し、青天の霹靂で東証一部上場の製薬会社の常務取締役までなり、彼同様にサラリーマンでの区間賞も獲れましたのも、駅伝のご指導を頂いた社会科担当の岡本丈夫先生は「歯をくいしばって練習した、この苦しさは将来必ず役に立つ」と常々言われていました。今は亡き岡本先生に感謝してもし切れないものがあると、区間賞を獲った彼と杯を交わした時に言っております。駅伝の経験が長い人生でどれだけ支えになったか計り知れないものがあります。二人が酒を飲むと、いつしか酒の競争もしており、気がつけば毎回二升の酒豪となっております。

私の人生、駅伝での苦しい練習と、丹波人独特の気質がプラスになったと思っております。高校受験に失敗し、希望校を落ちたこともエネルギーになったと思います。人生はまさに、故事にありますように「人間万事塞翁が馬」であります。

少年時代には、直接の恩師ではありませんが、実家近くの称念寺の橋本清子先生（生花等）に、毎日のように出来の悪い私を我が子のように励まして頂き、心の知能指数の大切さを教えてもらい、大きな心の支えになっておりました。

友が気を遣いすぎてか、この五月に橋本先生が亡くなられましたことを連絡くれず、告別式にも参列出来ず心残りがしております。

この紙面をおかりして、ご冥福をお祈り申し上げます。

岡本先生、橋本先生、二つずつの区間賞を獲りました無二の友、足立敏晤君との出会いは何物にも代えがたい私の心の中の宝物であります。彼とはいつか青垣紅葉マラソンに出て、人生のゴールテープを切りたいと想っております。

柏原エンターテイメント

徳田　八郎衛（柏原町）

◆映画ばかりではなかった

私の小学生時代、といえば一九四〇年代後半であるが、柏原劇場に新しい出し物が登場すると、自転車に乗った小柄なオジサンがドンツクドンツク太鼓を叩きながら宣伝に回る。氷上郡中を回る訳ではない。黒井、成松、佐治などには立派な映画館があるから、恐らく当時の中央区、つまり柏原町、生郷村、そして我が新井村ぐらいだったと思う。

下校時に出くわすことが多かったが、悪童たちは「柏原劇場ボロ太鼓」と悪態をついていた。消息通の友人によれば、通常は劇場で幕の開け閉めに従事していたそうだ。

柏原劇場、すなわち映画館と思いこんでおられる方には、幕の開け閉めが異様に聞こえるかもしれないが、ボロ太鼓オジサンの述べ口上の多くが田舎芝居であった。やはり劇場なのだ。しかも履物を脱いで手に持って入場し、畳張りの桟敷へ着席するのである。

田舎芝居上演の主力は、旧和田村のセミプロ劇団「ニコニコ」だったと思われる。というのは、我が母坪部落で秋祭の夜に提供されるエンタテイメントは、一九五〇年代の間は映画ではなく芝居や浪花節、漫才であり、その供給元の殆どが「ニコニコ」であった。戦前の神嘗祭の延長で郡内の全部落、全神社が一〇月一七日に一斉に祝っている。そこへ多数の演劇分遣隊を同時に送り込む「ニコニコ」だから、平時に柏原劇場へ交代で派遣するのは容易（たやす）かったに違いない。また柏原の坂本劇団も大活躍であった。

◆でも本命は映画だった

今となっては文化財として保存しておきたかった田舎芝居であるが、当時は映画の方が高級で芸術的だと思われていた。娯楽性も高かった。我が母坪でも、私が中一となる一九五一年には秋祭のエンタテイメントは映画に進化？していた。従って柏原劇場でも映画の比重がどんどん増えて行ったことは、各部落ごとに貼りだされるポスターからも推察できた。だが小学生が六キロも離れた柏原劇場まで個人で見に行くことはなかったが、五年生になると新井小学校から隊列を組んで名画の見学に行くようになった。

といっても二件だけである。五年生の時はレニ・リーフェンシュタール監督の「民族の祭典・美の祭典」。一九三六年のベルリン五輪記録映画だが、児童にも芸術性高い映画であることは理解できた。私に一番印象的だったのは夜まで続けられた棒高跳びの死闘である。帰り道では何名かが枯れたコスモスを捧げている。優勝カップや優勝旗を授けられる光景はなかったが、どうやらそのつもりらしい。

六年生になって見たのはグレゴリー・ペック主演の「子鹿物語」。終戦直後の作品だが、総天然色カラーの美しさが眼に焼き付いた。

中学生になると、学校からゾロゾロ……という機会はなくなった。逆に「残酷なシーンが多いから見るな」というお達しが出たりする。イタリア内戦が舞台の「無防備都市」である。本誌三四号にも記した「ストリップがやってきた」は一九五三年の事件であり、まだまだ映画専門館ではないことを示している。

高校生になると「柏高映画委員会」が推薦する名画は三〇円の格安料金で見ることができた。現在の四五〇円であるが、部活や生徒会で多忙だと殆ど見られない。「七人の侍」「シェーン」等の推薦映画は高校卒業後に見ることになった。それも三〇円で……珍しく推薦映画を観たのは、「修善寺物語」。二年生の秋であったが、珍事が起こった。面作りの師匠の長女が念願叶って頼家の側女となるや舞い上がり、かつての婿予定者であった父の弟子に「跪け」と命じる場面で、高一の女生徒が群がった席から突然、「あの人嫌いやわー」という叫び声が上がったのだ。それを「シー」という良識派の声と満場の失笑が追いかける。「あん

な純情な娘さんがいてくれて嬉しい」と後日クラスで語ると、女生徒からは「その娘も現実の世界ではどうなるか判りませんよ」「お宮さんみたいな人は大勢居るよ」と水をかけられた。

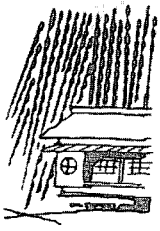
◆劇場が政見講演会場に

一九五四年暮、永年続いた吉田茂内閣は総辞職した。吉田首相は解散したかったのに緒方竹虎副総理が政道に合致する総辞職を勧め、では副総理を解任するという吉田首相を池田勇人自由党幹事長が泣いて諌めるという劇的な光景も報道された。

翌年二月、鳩山一郎新首相の下で行われた総選挙で、草深い丹波まで緒方自由党新総裁が日帰り遊説に来ることを知って、高一の私は無性に緒方さんに会いたくなった。柏原駅頭で図々しくサインを所望した私に「時間が無いよ」と言いながらも、きちんと署名を下さった緒方さんは、突然「この街の名物は何かね」と質問に転じた。八幡さん、厄除さん、長屋門と様々な名物が浮かんでくる。即断で「樹齢千年の欅と、その根が小川を跨いで出来た木の根橋であります」と大声で答えたが、「こんなゴミのような奴に相手にならないで」と言わんばかりのお付きに囲まれて緒方さんは車の方へ進まれた。

「あの車、木の根橋から回ってくれたらいいのになあ」という願いも虚しく、車は石田本通りを経て柏原劇場へ直進する。本来なら郡公会堂で演説してもいいはずの前副総理であるが、選挙戦の最中なので公共建造物が使用できず、柏原劇場を借用するのだ。私も後を追い、例によって履物をぶら下げて二階へ上がったが、こんな偉い人に、こんな場所で講演させるなど申し訳ないという気持で一杯だった。

今は柏原劇場も郡公会堂もない。安倍元総理が丹波市へ遊説に来ても会場は大型スーパーの夢タウンである。プラザ、広場のない柏原になってしまった。振り返ってみると、柏原劇場は文字通り市民プラザの役目を果たしていたのだ。



柏中34回生の思い出

荻野巨舟（和歌山県在住）

昭和五年（一九三〇）三月末、私は新井小学校を卒業し、四月、柏原中学に入学しました。二月の入試では新井小の先生が試験場まで私達に付き添って下さいました。当時の受験生はごく少なく、新井小から男三名、女二名が進学しましたが、試験は形式的で学科と面接だけ、推薦入学に近いものでした。その柏中を卒業してから今年で七十二年目となり、卒寿を迎えました。

校庭の西側の隅に立派な藤棚があり、よい憩いの場所でしたが、放課後ともなると憩いの場所どころか、上級生の下級生に対する説教制裁弾圧の場所と変わりました。私は気の小さい、付き合いの狭い生徒でしたので、あまりそのような体験を持ちませんでしたが、人から聞くと中々盛大だったそうです。上級生の権威は大変なもので校区（中央・校南・校西・校北）対抗の体育大会前になると、夫々指定の場所で、物凄い応援練習が展開されました。

その頃は軍国主義教育の最盛期で、学校には立派な将校が配属され、助教には下士官が赴任しました。軍隊だったら兵隊から神様のように崇められた階級の方だったのに、生徒達からは別に偉いとも受け取られず「○○教官」とか、髭が立派だから「髭ちゃん」とか、万次という名だったから「万ちゃん」と呼び、教科の先生より一段下位に見ていたのです。そんな私達が一たび軍隊に入るや、古兵にいじめられ、しごかれたあげく下士官や将校は遥か彼方の神様の位の人だったのを知ったものでした

校門を入った正面の校舎は、左側から教官室、それから校長室、職員室と続いていました。校門を入って左側に奉安殿と称する御晨影と勅語を奉納した小さな建物があり、校門を入った生徒は、まず左を向いて直立不動の姿勢をとり、挙手の敬礼をしなくてはなりま

せん。下校時も同様です。これらの様子を逐一監視しているのは直ぐ前の教官室に居る教官達です。変な敬礼でもしようものなら「やり直し」と大声で、どなられるのでした。

今にして、つくづく良かったなと思うのは、級友の出身地が多岐に亘り、言わば全国的だったことです。つまり生徒募集の区域を限定しなかったのです。ですから台湾からは黄滄浪君が、朝鮮からも章有光君が留学して来ました。全国的だったのは生徒募集のみに留まりません。教諭陣も全国的でした。戦後の新制高校時代になって、先生は氷上郡内出身者ばかりになりましたが、私達の頃は郡内より他府県出身の先生の方が多かったのです。森下先生のご出身地は確か青森県でした。

入学時の学級編成はA組・B組・C組の三クラスで、私はC組でした。当時は播州方面（多可郡）からも多くの生徒が汽車通学をしていましたが、中に質実剛健の見本のような人がいて、遠く西脇から毎日欠かさず奥野野坂を越えて通い続けていたのには驚嘆したものでした。雨の日も雪の日も……。その忍耐力だけでも優等生にふさわしいものです。

中学生になると、皆軍服めいたカーキ色（国防色）の詰襟服を着ました。二学年上までは黒服でしたが、私達の頃からカーキ色の制服になったように思います。カーキ色は県下で本校と神戸一中だけだ、と自慢の種にしていました。革靴に巻脚絆(ゲートル)を巻き、何んとなく軍人臭のするスタイルでした。柏中指定の原田という洋服店では幾つかの規格を造り生徒の注文に従って頒布しました。いつの時代でもスタイリストは居るもので、上級生の中にはわざわざ買ったばかりの制服を殊更改造して、上衣を短くしズボンの裾を広くした所謂セーラー服様に作り替える者も居ました。

校門はいつもトラブルを抱えていました。放課後になると各部、クラブのリーダーが一斉に飛んで来て校門に立ちます。部員が練習をサボって帰らないか見張るためです。私は剣道部員でしたから、放課後になると帰巣反応の強い友達と共に、この強引な引き戻しにあい閉口しました。それも下級生時だけで、上級になると逆に引き戻し側に立ったのです。

少年時代はやはり、ロマンチックな夢の中に生きた

時代でした。学問と心身の鍛練は人格形成時代には大切な要素ですが、当時を振り返って楽しかったなあと思うことは、義士祭の赤穂浪士四十七士の話でした。市島に咄し家が居て、学校側が呼んで全校生徒に聴かせてくれ、続いて一、二名の先生の話しもありました。授業と違って興味津々、目を輝かせて聴いたものでした。時局演説も面白かった。歴史の古い柏中は立派な先輩が多く、東大や京大出の錚々たる人物がいましたから充実した話を聴かせてもらったものです。松井拳堂翁もその一人。学校側は誰かの講演のある時は必ず拳堂翁を最後に立てて話を聴かせました。翁の話は率直明快で寸言人を刺すもので、扇子を持って壇上に立つ翁に生徒は歓声を挙げました。翁は頼山陽の研究者で自ら山陰外史と号し儒者で幾多の著書を発表しました。今ある崇広図書館の創始者でもあります。

丹波は、当時よく雪が降りました。雪中訓練と称する行事がよく行われ、雪が降ると行軍や雪合戦という戸外の行事が頻繁に行われました。全身びしょ濡れになっても暖かいストーブが教室で湯気を立てていました。放課後、生徒が帰ったあと小使が指定量の薪と石炭を公平に配給しますが、ここで又一悶着です。こっそりと小使室隣の石炭置き場へ盗みに行くのです。それだけでなく壁の羽目板や床板まではがして燃やすなど上級生ほどひどいようでした。ストーブ脇には弁当温めの棚が置かれていて、その棚へ各自弁当を入れます。昼近くなると、中身が熟してジクジク音がし匂って来るので、生徒達は腹がぐうぐう言うのに閉口していたようです。

級及に「中村のチビ」こと中村寿郎と言う学友がいて、剽軽者で皆に愛されていました。窓側に席を取り、小さな鏡を巧みに操り黒板に光を投影させます。岡原尭鉄という遠坂出身の老先生で見事に頭の禿げた先生が居ました。このチャメチビの中村は鏡で盛んに光芒(光のすじ)を黒板にちらつかせ、時々禿げ頭に接触させようとするのです。勿論、先生はそんな生徒の意図に気付いてはいるのですが、先生は叱ったり怒ったりしません。無視するのです。ところが、生徒のいたずらを無視しない先生がいました。名前は忘れましたが、この先生、小さいチョークを用意していて投げつけるのです。ピューッとチョークが生徒の頭の上を飛

んで来る、男子の教室風景とはこんなものでした。佐治から来ていた源さんは飯泉先生と大格闘の末、逃げようとする処をドアーの所で押さえられ捕まってしまいました。いたずらの見せしめに水の入ったバケツを持って廊下に立たされるのはよくあることでした。授業が終わっても許されないでそのまま立たされている。級友がニヤッと笑って通り過ぎる。余程厳しく懲らしめないと効き目のない図太い生徒達でした。

生徒集会所（別名、雨天体操場）と称する全校生徒を一ヶ所に集める建物がありました。雨の日などの朝礼はこの集会所で行われました。床はレンガ造りで雨天のじめじめした日、教練の動作の「おりしけ」「伏せ」「射撃姿勢」など苦手でした。生徒への伝達板もこの雨天体操場にありました。この掲示板に嫌な先生や苦手の先生の名が張り出され「本日○○先生出張（病気）のため欠講」などの張り紙の出た時はワアーッと言う歓声が揚がりました。自由学習とか自習時間の意味を勝手に解釈し、自由に遊べる時間としてしまっていたのです。

私達の頃は男女別学の時代でしたから、男子は柏原中学、女子は柏原高等女学校へ通いました。高女は大手通りの正面に在り、織田藩政の遺構そのままの立派な門構えでした。高女の運動会の日にはこっそり授業をさぼって見に行く熱心な生徒も居ました。

昭和二十三年四月から新しく学校教育法が制定され、柏原中学と柏原高女は合併し、県立柏原高等学校に昇格しました。女学生がやって来るというので、なんとなく気分が高揚したもので、こういう歴史的変動期に居合せた私達は幸運だったと言うべきでしょうか。更に占領軍総司令部（ＧＨＱ）軍政部の指示で含併が共学にまで発展実施されることになりました。

入学当時九十二名だった仲間も六十六名が他界し、今では二十七名となりました。これも過ぐる平成二年九月（一九九〇）柏原町の「三友楼」でやった同窓会出席者の人数です。今の時点ではどうなっているでしょうか。その前の同窓会は昭和三十一年十月十三日、柏原町本町瑞光寺で行われた創立60周年記念合同慰霊祭の場でした。34回生代表数名が瑞光寺に集まったと記憶しています。

平成二年の同窓会は、三友楼での宴会終了後、母校

まで散策し、校門西側の楠の下で記念写真を撮り、倉庫脇の建物横の記念樹の存在を確かめました。そこには確かに記念樹「大王松」と第34回卒業生記念樹と刻した碑がありました。皆しみじみとした表情で暫しの感慨に耽っていました。

次は中学の授業で習った中国の古典です。

抑　一期の月影かたぶき
余算　山の端に近し

方丈記

（さて私も、月が傾いて山の端近くになったように、一生もいよいよ終わりに近づいて余命が少なくなっている）

柏中時代の古典授業が今、我が身に現実の響となって身を揺るがすなど考えてもいませんでした。級友諸氏のご多幸を祈るのみです。

（2007（平成19）年3月記）

（いけばな・三觜柏洋）

丹波へーターンが増えている

昨年5月に丹波県民局が開設し、兵庫丹波の森協会とNPO「たんばぐみ」が運営する「田舎暮らし相談」の発表によると、多くは、阪神間からの移住希望者で、農地つき空き家を求めて定住する定年退職前後の人や、ITを生かした自営業者で子育て世代の若者が相談にやってくるそうだ。開設後半年で、6件の移住があった（篠山市に4件、丹波市に2件）。実際にIターンした人たちが相談に乗っているそうだ。（平22・1・14）

若手の新規就農者が、共同で野菜栽培

市島地域に移住し、新規に農業を始めた4人が、学校給食に納入する野菜の共同栽培する「あいたん倶楽部」を結成した。「丹波、農業を〝愛する〟Iターン者の集い」という意味のネーミングだ。4人は滋賀県から一人、大阪から二人、神戸から一人、でいずれも20代～40代の男性。有機栽培をめざして、懸命に勉強と実践をしている。（平22・1・31）

冬季オリンピックのユニフォームは氷上産

2月にバンクーバーで開催された冬季オリンピックでは、8種目でミズノインダストリー氷上が製造したユニフォームが使われた。データを取るために国内の各競技場へ赴き、選手と調整を重ねる。オリンピック時にはバンクーバーへの現地入りも。同社で40年間も競技用ウェアの開発に携わってきて、黒字に金のデザインを企画した富田桂一さん（青垣町大名草）は言う。「1から10まで氷上の工場で作った。モノづくりの技術を世界の人に見てもらいたい」。（平22・1・31）

大手外食グループのワタミが市島に工場

大手の居酒屋チェーンで知られる「ワタミ」の100パーセント子会社「ワタミ手づくりマーチャンダイジング」が、市島町南地区に宅配弁当を製造する工場を設立する。11月に稼働を目指し、スタート当初は1日あたり1万食、2年後には3万食を目指し、その時、従業員数は200人になると期待されている。市島が選ばれた理由は、ワタミの直営農場（京丹後市）から交通アクセスがよいので営業や雇用の面で利便性があること、地下水が良質であることなど。（平22・2・28）

垣根を越えて地下資源を共有し連携

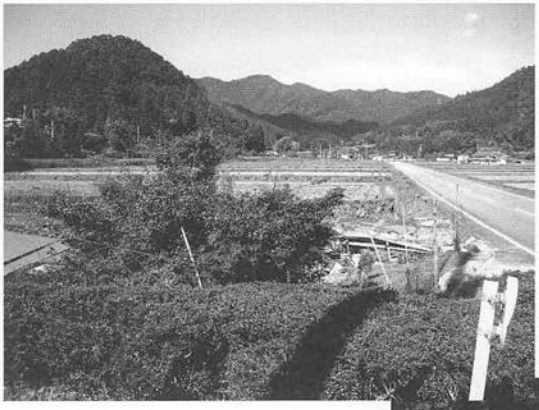
丹波市、篠山市、兵庫県は垣根を越えて、篠山層群の化石について広く連携協力を進めようと、県立人と自然の博物館、県民局、両市、丹波の森協会、丹波恐竜・哺乳類化石等を活かしたまちづくり推進協議会の6者が基本協定書を締結した。化石の発掘調査や研究、保護学習や交流などの活用に関して連携協力することがきめられた。各団体は独立して事業を行うが、連携ができるものは協働する。「恐竜たちの近文化資源を共有することで垣根を越えた新しい関係が必要になってきた」と河合雅夫さんが挨拶した。

丹波を撮る

撮影：徳田八郎衛

市島町旧前山村を往く―1

旧前山村の中心だった谷上から見た余田（よでん）谷。春日町大路地区の谷ほどではないが、市島町美和地区、山南町和田地区などの谷と同程度の幅がある。ここは余田姓が多い。



友政城（中竹田）と並んで氷上郡山東北部の重要な城塞であった誉田（よでん）城址手前の分岐点。右へ進めば徳尾、左へ進めば鴨坂・上鴨坂に至る。厳密な意味での余田谷は、ここで終る。

新春の粥占いで有名な折杉神社（徳尾）。日本でも珍しい行事なのに市指定の記念物というのは口惜しい。社殿自体が文化財指定に至らないからだろうか。

丹波を撮る

市島町旧前山村を往く―2

徳尾は戸数100以上もある大集落で、神社も公民館も3つある。その左奥に大原神社があるが、本殿は鳥居からさらに標高差200メートルほど上にある。鹿除けのゲートを開けて登る。

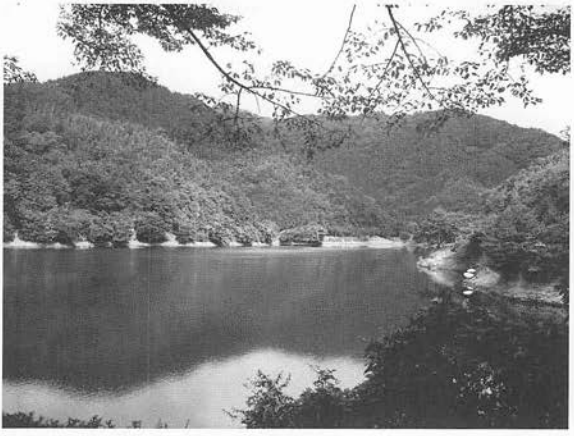
本尊の木造聖観音菩薩像は近世の作品であるが、右脇にある木造観音菩薩像は、かなり痛んでいるものの藤原時代の作と推定されている。いずれも市指定の文化財である。

鴨坂の奥には兵庫50山に選ばれた五台山および、その右肩に当る鴨内峠への登山口がある。昔は氷上町幸世地区を目指して婚礼の行列もこの峠を越えたという。登山口には、水不足に悩む鴨坂の住民を救うため弘法大師が掘り当てたといわれる泉がある。

市島町旧前山村を往く—3

徳尾集落から右へ向かうと、可愛い遊園地を経て丹波で一番大きな治水ダムといわれる大杉ダムへ着く。昭和40年代以前に郷里を離れていると、前山出身者でも、この名所をよく知らない人が多い。

水の事故を避けるためであろうが、相模湖や津久井湖のような、水に親しむ設備は何一つないのが惜しまれる。来場者は、専ら「森林浴等の保健文化的利用」を楽しむことになる。

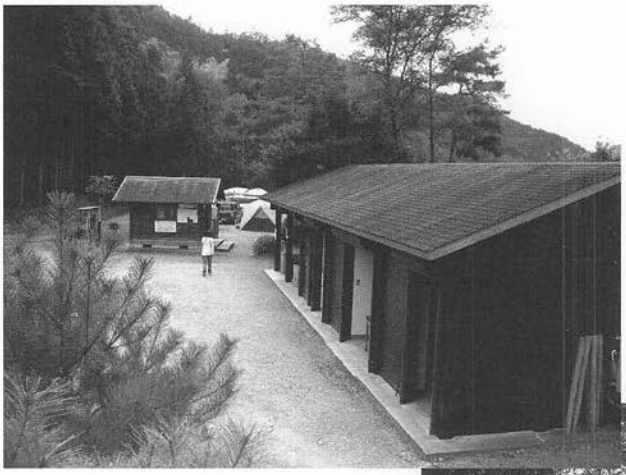


旧前山村だけでなく旧竹田村の中竹田、下竹田、北岡本の水田にまで恩恵を与える多目的ダムであるが、皮肉なことに工事開始と共に減反政策が始められた。

丹波を撮る

市島町旧前山村を往く―4

ボートは楽しめないが、岸からの魚釣りは大歓迎とされている。ここから湖水を愛でながら五台山を目指す登山道があれば、さらに素晴らしいのだが。



炊事場、トイレ、洗面所とキャンプ施設は整っている。駅前商店街にも谷奥の集落にも人気がなくなった丹波であるが、週末には若い親子連れが溢れるミニ行楽地？が山奥に誕生したのは嬉しい（この撮影は初秋の月曜日）。

キャンパーの車は、兵庫県だけでなく京都や大阪からのものも多い。この２台は、どちらも滋賀ナンバーである。琵琶湖よりも大杉ダムがよかった？

変わる丹波・変わらぬ丹波―1　稲刈り体験

生産者、消費者、農協、流通業者等が協力して企画・実施する稲刈り体験は、今や農村行事として定着しました。懐かしい稲木も再現されています。だが体験者が見詰める先は？

動き回るコンバインでした。運転席へ乗せてもらった子どももいます。
（柏原町母坪にて）

体験の手刈りではなく、やむを得ずの手刈りもあります。強風で稲が倒れたためです。ご苦労様
（氷上町本郷にて）

変わる丹波・変わらぬ丹波ー2　宿場町、青垣町佐治

「丹波八宿青垣の秋」と銘打ったイベントが始まりました。好天に恵まれ、柏原駅前から無料バスの送迎サービスもありましたが人出はイマイチ。

本誌34号「丹波を撮る」に登場した旧青垣町役場は取り壊され、コミュニティセンター佐治来楽（きらく）館が建設されました。丹波布などの伝統的名産や自然学習資料を展示しています。当日はイベントの本部でした。

生物研究グループによる「加古川上流域の研究発表」が始まるも、器材の不具合でプレゼンテーションは中断し、観客は離散。だが関係者の懸命の努力で不具合は修復され、観客も戻ってきました。

ありがとう！東京支部同窓会

赤井　俊子（氷上町在住）

青春の一年は老年の十年に相当すると聞く。時の流れ方は変わらないのだから、これは青春の一刻一刻がいかに濃いものであるかを言っているのだろう。還暦も過ぎると、数年が経つのはあっという間で、その間に起った出来事はよほど印象的なことでない限り記憶に残るものは少ない。たとえ若い頃と同じような体験をしても、その味は比較にならないほど薄いものだ。高校時代の一つ一つの出来事が今なお鮮明であるのは、青春という多感な時期における初めての経験であり、身震いするほどの感動は心に深く刻まれ、色あせることのない思い出として大きな位置を占めているからだろう。

同窓会とは、このような記憶をよりあざやかに塗り替える作業のようだ。平成二十一年六月二十八日、その記憶塗り替えの日は柏陵同窓会東京支部総会として

やってきた。

同窓会が頻繁に開催される時期であるが、今回の東京支部総会は高校15回生が当番幹事であり、15回生の間では昨年よりその参加については話題になっていた。それゆえ六月二十八日に開催決定との知らせが入ってからは、私たち、松江、川西、丹波、東京に住む仲間四人もメールで頻繁に連絡しあった。開催地東京に在住する上　高子さんのマンションのゲストルームに泊めてもらうことになり、その日が来るのを、あれこれ相談しながら心待ちした。

開催前日の六月二十七日に東京着。四人で国立劇場にて奄美大島民族芸能を鑑賞して後、上さん宅に到着。その夜は勿論なが〜いおしゃべりが続いた。

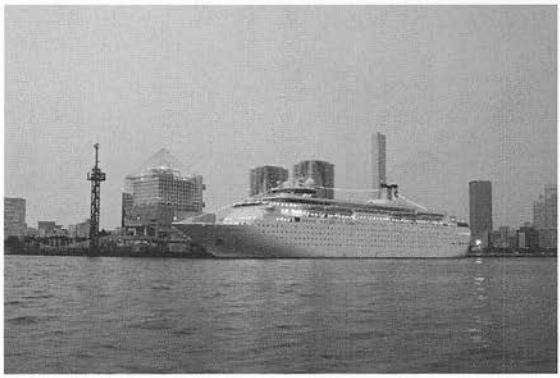
翌朝、役員である上さんと共に早めに九段会館に向かう。開会までの時間を近くの靖国神社参拝に行く。「私は右より」「私は少し左かな」「右ではないけど皇室は賛成」などと言いながら、右翼の黒い車が並ぶ中を神社へと向う。ここでしか味わえない光景だ。

参拝を終えて九段会館へ戻ると、会場内はにぎやかになっていた。大阪支部15回生が一団となって入館。見覚えのある顔をめがけてそれぞれが駆け寄っていく。記憶塗り替えの瞬間だ。ひと時の再開劇が終わった頃、いよいよ開会となる。

第一部の総会行事に続き、「恐竜が丹波にもたらしたもの」と題して15回生の村上茂さんの話を聞く。恐竜発見で村上さんは一躍有名人となったが、このことがきっかけで小さな発見があった。顔写真が新聞紙上に掲載されるようになって、どこかで見た顔だ、と卒業アルバムを見る。なんと同じ三年六組のクラス写真に村上さんが写っているではないか。同じ組だったことに驚いた次第である。静かな、こつこつタイプの人だったと改めて思い起こす。

会場が静かなのは開会行事のときだけ。次第に私語も多くなり、司会者や演者には気の毒なほどうるさい。高校時代ならさしずめチョークが飛んでくる状況だが、かつての先生も現職の校長先生もにこにこ顔だ。誰一人注意しようとする人はいない。勉強好きな優等生はどこへいったのか。みんなが思う存分しゃべっている。だからこそ同窓会は面白い。だからこそ青春色の塗り替えに心から興じることができるのだ。

塗り替えに乗じて、うわさのカップルの話題にも事欠かない。当時同級生にデートを運悪く目撃されたというカップル。改めて、やはりそうだったのかと納得する。そうと分かると、知らん振りをしながらカップルだったという二人の行動チェックが始まる。みなさんお気をつけあそばせ！　とは言うものの、これもすべて時効。『不良老年の薦め』という本もあったが、いつの間にか制御マシーンがしっかり備え付けられて、突進しようにもブレーキがききすぎる。周りの理解も十分という時期に皮肉ななものだ（と、周囲が思っているだけか？）。



一次会が終わり、15回生は同じ会場に集まり輪になって近況報告をする。続いて今回初めての企画といわれる「隅田川クルージング」に出発だ。九段会館を出る時、土砂降りだった雨は、乗船する頃には雨上がりのさわやかな空になっていた。

東京ビッグサイト、レインボーブリッジ、お台場、船の科学館など、これまで地上で見ていたものを角度を変えて水辺から見る。夜のとばりも落ち、周りの建物の明かりが水辺に輝きロマンチックだ。船の中では食事とおしゃべり、笑い声で隣の人の声もかき消されるほどだ。

船の中と外の光景の違いを楽しみながら身も心も水辺の風に泳がせる素敵なクルージングだった。船から下りればいよいよお別れだ。惜別の念で握手する人、来年の再会を約束する人、思い思いの形で今日一日の出来事を噛み締めている。

水、船、夜、別れと、憎いまでに味わい深い舞台を演出して下さった柏陵同窓会東京支部幹事役員さんに乾杯！　ありがとうございました。　（高校15回生）

〈編集部から〉本稿は前号に掲載すべく寄稿されましたが、編集部の手違いにより掲載が一年遅れましたことをお詫び致します。

「幸世行進曲」と「佐治川」

ある権太くされの想い出

臼井　くにあき（氷上町在住）

ふるさとを語る上で校歌を措いては語れない。それほどに母校の校歌は懐かしいものなのだ。その校歌を生んだ幸世小学校の沿革は「幸世村史」に詳述されている。

もともと「幸世村」の前身は「油良村」と称していて、明治二十二年の新町村制のもと、賀茂、井中、御油、沼、小谷、鴨内、日比宇、伊佐口、香良、桟敷、絹山、氷上、北油良、南油良の十四ヶ村を合併した前述の「由良村」は、明治二十四年一月に「幸世村」と名乗った。明治二十四年五月「幸世村立集英尋常小学校」として一村一校の体制となる。

それより少し前に、絹山村字柳町の現在地に新校舎建築がなされていて、その総経費は、四百五十三円三十四銭と記録されている。

さて、その幸世村は、氷上郡でも屈指の雄村であったようで、次に掲げる「幸世行進曲」の歌詞にもそれがよく顕れている。

幸世行進曲

一、仰げば高し五台山
　流れ豊かな佐治の川
　野にも山にも恵まれて
　名も幸世なる我が郷土

二、国の基の農業を
　生業として栄へ行く
　戸数一千一百余
　人口六千有余人

三、年々稔る米麦は
　二万石にも近くして
　春夏秋に取る繭も
　一万余貫に達すらん

（五台山）

昭和二年二月に落成した、大講堂は氷上郡でも超モダンな建築物で、なにかの式典には、全校生徒千余人

が天井にも響けとばかりの大合唱だったのである。

それより時代がちょっと下って、よく口遊(くちずさ)んだのが次の歌だった。

幸世小学校校歌

一、天つ空よりたぎりつつ
千代にもひびく滝つせの
清き流れを心にて
弛まず倦まず体を練り
知徳をみがく幸いある我ら

以下二番、三番とつづく。この歌でまず思い出すのは懐かしい同級生の幼な顔である。

昭和二十五年三月に当時の「幸世中学校」を門出してから、六十年の歳月が過ぎたということで今夏「還暦同窓会」と銘うって集いをすすめている。その日が楽しみだ。

なにしろ、あの頃（太平洋戦争をはさんで前後十年ほど）は、無い無い尽くしの世の中で、みんな歯を食い縛って窮乏に耐えていた時代だった。

昭和十六年学制改革により「幸世村立幸世尋常高等小学校」が「幸世村立幸世国民学校」に名称も変わっていた頃である。

さしも、広い運動場も食糧自給自足のため一面の農園に変貌。「カボチャ」に「さつまいも」など腹持ちのよいものばかり。芋の茎も捨てなかった。

その頃、「農業の時間」があって、学校のトイレの糞尿を肥桶に入れたのを友達と担ぎ野菜に散布するのである。この作業は二人の呼吸が合わないと、とんでもない事態が発生したことも再三。

給食には級友と育てたカボチャの薄切りが味噌汁の具になって浮いていた。

戦局はいよいよ風雲急を告げる時となり、出征軍人や遺族の家への勤労奉仕、飛行機の燃料にするとかで松の根を掘り起こす労働、上級生の焼いた炭俵を山から担ぎ出すつらい作業、なかでもいまだに合点がいかないのは薄(すすき)を刈り集めたことで、なんでも落下傘の資材になるという……。

その頃、御油の円通寺に都会からの疎開児童が大勢寄宿していて、その中の一人のお兄ちゃんが父母と親しくなり、そのうち勉強を見てくれるようになったこ

とも記憶に残っている。雪の中、巻脚絆と戦闘帽のお兄ちゃんが寺へ帰っていく後姿が目に浮かぶ。

夏空高くB29が、白い飛行機雲を引いて飛んで行く。洗濯板のように肋骨を浮かせ、小便くさい匂いを発散させながら、N君もT君もみんな空きっ腹を抱え無邪気に走りまわっていた。

その頃の駄賃といえば、まず「空豆の炒ったもの」「はったい粉」これは「おちらし」とも言った。「さつま芋」は蒸したり焼いたりして駄賃の定番。腹持ちのよい「焼き餅」「ボッチン」など、そのほか数種あったが全て「自家製」だった。

さて、腹を空かせて家に帰ると、上がり框に、じいさんの骨太の字で「○○の田圃に来い」とメモが置いてあるのが常で、凡そ親の口から「勉強せえ」など聞いたことはなかった。

大切な労働力を、猫の手も借りたい農繁期に遊ばせておく訳にはいかなかったろうし、苛酷な労働に明け暮れる親の姿を見ていては遊ぶ気にもなれなかった。

昭和十九年、月は忘れたが、沼の田圃に戦闘機が不時着した。勿論、何もかもおっ放り出して見に行った。愛機の横で軍刀を振りかざしていた若い飛行士は今、健在だろうか。

昭和二十年の八月、油照りのする或る日、いつものように読み止しの本を読んでいると、頭のさきでヒソヒソと大人の話し声がする。

耳を澄ますと、「広島になにやしらんごっつい爆弾が落ちたらしいでー。日本は敗けるかも知れんいうとっでー」。

昭和二十年（西暦一九四五年）八月十五日終戦。幸世国民学校四年生の「夏休み」の出来事だった。

「幸世行進曲」の歌詞にある、〈流れ豊かな佐治の川……は、まさしく少年少女を育んでくれた「母なる川」で「佐治川」（現・加古川）抜きにその頃の想い出を語ることはできない。

話は前後するが、昭和二十年九月、残暑の厳しかった午後、突然、紅毛碧眼の兵士が銃を携えて廊下を闊歩してくるではないか。一瞬おどろいたが、そこは好奇心旺盛な子供のこと、窓からは鈴なりの顔、顔、顔であった。

それから数年後の昭和二十四年一月、今度は柳町橋

下流二百米の河川敷に米軍戦闘機が不時着した。当時、橋の近くでT君と遊んでいたから、その印象は強烈で目の前を過ぎった黄土色の巨体と轟音は生涯忘れない。

当時、佐治川で「川の恵み」によって暮らしを立てている人も多く、こもごもこの瞬間の印象を後年ながく話していた。

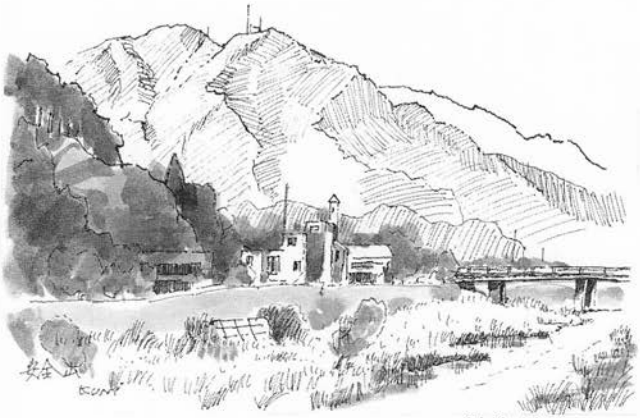
さて、話は佐治川の想い出に戻して、桜の古木が数本あって春には見事な花を咲かせていたのを曾婆さんの手の温もりとともに朧げな記憶である。三味線の音色とともに大人達が酒盛りをしていて、これは何故かはっきり覚えている。

夏の想い出は、やはり水浴びと、雑魚とりに尽きる。泳ぎは二つ三つ年上の子が教えてくれたが、それがすこぶる荒っぽく下級生を橋の欄干から突き落とすのである。年上の権威はこの頃、絶大であった。

河川改修で今は姿を消した灌漑用の井堰は権太くされ達にとって格好の遊び場だった。水の色が桜色に変わる頃、投網の妙技で子供達の度肝を抜いたSおいさんが姿を消すと、もうわれわれの天下であった。

大石を抱えて、あぶくを立てながら水底を歩く競争。真夏の太陽で焦げたゴラ石に寝そべって甲羅ぼし。野苺をしごいては口に放り込みながら、水から上っては甲羅干し、干してはまた泳ぐ。

われわれは通称「井堰」のことを「ゆね」と呼んでいた。そこでの最高の冒険は岸辺に舫っている舟の艫綱を解き、それに先を争って乗る。水面は深い緑を湛えて不気味だった。心配そうに危険な遊びの様子を



（安全山）

窺っていた、つちゑばあさんの顔が目に浮かぶ。

雑魚とりの話は限りがない。仲間で「エダタ」と呼んでいた石の隙間から、そーっと両手を入れると、奥の方でパチャパチャと魚の跳ねる音……。一尾は口に咥え、両の手にも二、三尾。別の方法に一メートル余りの太い竹筒に柳の小枝と一緒に叩いた「たにし」を餌として押しこむ。夏の陽が西の空に沈む頃、それを川原に放りこんでおく。権太くされ達は「○△○浸け」と呼んでいた。

翌朝、朝露に草履を濡らしながら竹筒をひき上げにいく時の、何んとも言えない気持ちの高ぶり。新鮮な朝の空気と、川原の匂い……。

教科の「学校水泳」の時間は雑魚とりの時間でもあった。生徒の前で準備体操を指導する先生の涼しげな「甲股」の色を今でもはっきり覚えている。

次は「夜振り」。これは一寸した冒険心をそそるもので忘れられない。カーバイトの鈍い明かりとその匂い。辺りは暗闇。カーバイトに映しだされた己の影にドキドキしながら……。

夏の昼下がり、柳町橋で寝そべり欄干の間から首を突き出して釣糸を垂れる。よく釣れたのは「オサカキ」。たまに「ヌスンパチ」も。これは引きが強かった。それにしても呑気な時代であった。公道に寝転がるなど、今なら交通安全上、厳重注意ものだろう。

「つけ針」には鰻がよく食い付いた。二メートルほどの木綿糸の先端に太めの針をくくりつけ、それに、よく太った茶褐色の「みみず」をさし込む。水中のこれと思う場所につけて置く。一方の糸を手繰り込む方は、棒で固定し堤防にさし込む。翌朝、それをワクワクしながら引き上げに行くと、近くにつけた子の糸と絡み合って、ひと悶着あることもしばしばだった。

「どやぁ、邦ちゃん、前掻き行こか」

炬燵にもぐり漫画を描いていると、いつも誘って下さったのは、不得意な算数を見てもらっていたYさん。

霜柱の立った川岸から、徐に青竹の先にとりつけた鋤簾をザブッと放り出して、今度は力の限り水底を引摺る。岸辺に近くなると一挙に草ごと引き上げるのだ。草陰に潜んでいた小魚は砂利と草の間でとび跳ねていた。大変な重労働だったが、汗びっしょりの爽快感は格別だった。

幼い頃の想い出は、際限もなく甦ってくる。冒頭の「幸世行進曲」を写している時、ふと「佐治川」に纏わる遠い記憶を中心に書いてみようと思い立ち、ここまで拙文を綴ってきた。

里山でのことも、川遊びに劣らない。懐かしい想い出は尽きることがない……。悠久の佐治川（加古川）の流れ。高速道路の新設で東西に二分された姿になったが、「幸世」の沃野にそよぐ青田の爽やかなこと……。やがて三月もすれば黄金波うつ豊穣の秋を迎えるのだ。

「幸世」の郷を抱くが如く聳える峰々の里の営みに注ぐ優しい眼差しは千古不変。

数年前から「丹波市立北小学校」の校名変更の声が折々聞かれるようになった。いずれも「幸世」の名に対する並々ならぬ愛着と諸々の想いが込められているように思う。

時代がいかように変わろうとも、燦然と輝く「幸世」の名こそ、この郷を愛する多くの権太くされの終生の誇りなのである。

（柳町橋付近）

「日本語教室」十二年

時里孝子（柏原町在住）

私は氷上町の出身だが、結婚して二人の子どもに恵まれ、長男の小学校入学を機に柏原に家を建てた。播州人間の主人は兵庫県職員で、丹波に転勤して来て柏原に住むことになった。地元にある姓ではないので、しばらくはよそ者の顔をして暮らした。この辺りはほとんどがよそ者だった。そんなしがらみのなさが快適に思えた。しかし所詮氷上郡の人間、しかも柏原高校の卒業生である。いつまでもよそ者で居られる訳がなかった。子どもの成長とともに、小学校、中学校、高等学校とPTA活動に引っ張り出された。

柏原に住んで二〇年が経ったころ一つの転機があった。実家の母亡き後、柏原で同居していた父が他界した。父は戦前は神戸や龍野の実業学校に勤務していたが、戦時中に幼い子どもたちの食べる物に困って実家に引き揚げて来た。柏原中学校、柏原高等女学校、そして新制の柏原高校で教鞭を執った。（父は谷垣俊男といい旧制中学二七回生で、生存していれば丁度一〇〇歳になる。）柏原は父が長い教員生活を送った場所である。同僚だった先生方もたくさん住まわれていた。散歩がてらによくお尋ねしていたし、訪ねて来てもくださった。女学校の教え子たちも帰郷する度に訪ねてくださるのにいい場所だった。病弱だった父が九〇歳近くまで長生きできたのは、この人たちに囲まれた生活があったからだと、今でもありがたかったと感謝している。その父が他界し、子どもたちも巣立っていた。一〇年続けた中学生の学習塾を辞め、一二年前に柏原日本語教室を開設した。そのきっかけとなったのが一九九五年の阪神淡路大震災だった。

兵庫県、特に神戸市では多くの外国人が被災した。ことばが十分でない彼らがパニックに陥ったことは十分に想像できる。兵庫日本語ボランティアネットワークの代表を務める長嶋昭親先生はその混乱のテントの中で日本語を教え始めた。その後、県下のあちこちでボランティアの日本語教室が立ちあがった。

兵庫県国際交流協会が篠山で「日本語教育ボラ

ンティア養成講座」を開催したのは震災の三年後一九九八年一月のことだった。日本語教育ボランティアという聞きなれない言葉に興味をもって参加した。一日六時間、七回という厳しい講座だった。会議用の長テーブルに三人掛けで教科書、指導書、ノートを開いたら隙間もなかった。

こうして緊張感のある講座が終ってほっとしたのもつかの間、県国際交流協会は講座生を集めてボランティアの日本語教室立ち上げを要請してきた。このタイミングは実に見事で、物事にはタイミングが大事だということをしっかり学ばせていただいた。一二年を過ぎた今でも教室を何とか続けられているのは、このときの厳しさと指導者栗林先生の数々の教えのお陰である。その時の教えで、未だに脳裏に焼きついている言葉がある。

「外国人の目線で日本語を日本語で教えなさい」

「けっして外国人を利用しないこと。日本語を教えるから英語を教えて、というような交換条件を出さない」

「教える者、教えられる者という垣根を作らない」

このことは今でも教室の有り方の基本にしている。

一九九八年四月、日本語教室「こんにちは」を立ち上げた。講座を修了した四名で未知の世界に飛び込んだ。

当時の氷上郡にも一九九〇年の入管法改正によって来日した日系南米人、特にブラジル人の就労が目立ち始めていた。しかし、私たちは教室を始めるまで、この事実を全く知らなかった。始めるに当たって四人で学習会を重ねながら、町内の外国人事情を調べ始めた。行政や商工会、社会福祉協議会、外国人が働いているらしい企業を訪問したりもした。調べてみると、外国の人たちは以外にも身近に居た。中学生の学習塾を辞めた一三畳ほどの狭い教室でスタートした。

初めにやって来たのが、近所に住むインドネシアの研修生とブラジル人たち二〇名ほどだった。その後ＡＬＴと呼ばれる氷上郡内の中学校で英語を教える欧米系の人たちも参加した。慣れない学習支援、日本語という外国語を教える新米先生を楽しいムードにしてくれたのはインドネシアの人たちだった。彼らはとにかく歌と踊りが好きで、土曜日の夜の学習が終わると、さっと長テーブルを片付け、椅子を壁際に寄せ広場を作った。陽気な彼らは歌いながら踊りを披露してくれ

た。私たちが踊りの輪に入ったことは言うまでもない。その後、日本の歌も覚え、ギターやキーボードを弾く人たちも現われ、和太鼓をドラム代わりにインドネシアンバンドができあがった。イベントや夏祭りに招かれることが多くなり、教室のテーマソングになっていた、「上を向いて歩こう」「北国の春」「四季の歌」やインドネシアの歌や踊りを披露した。北国の春は中国の人たちが持ち込んだ。中国語で歌ってくれた歌は母国を離れた皆の寂しさを紛らわせてくれた。二〇〇五年に七年間教室の主役を務めたインドネシアの人たちはすべて帰国した。この間、もう一方の主役は日系ブラジル人とその配偶者、そして子どもたちだった。派遣で働く彼らは常に景気、不景気に左右され、学習を始めたかと思うと、直ぐに居なくなった。日本人を祖父母や父母に持ち、その祖国に帰ってきた彼らがいちばん冷たい風にさらされていた。仕事に行ったその日に首を言い渡され、翌日には堺市にある派遣会社の寮に入り、次の仕事を待つといった具合だった。独身者はまだよかったが、家庭持ちの人はそうはいかない。現在居るブラジルの人たちの多くは、この時期を乗り越えた家庭持ちの人たちである。人数は少なくなったが、丹波に永住しようという人たちも増えてきた。子どもを持つ人たちは永住を余儀なくされるであろう。子どもたちは日本の学校で教育を受け、日本の文化の中で育つ、いわば日本人なのだ。子どもたちにとって日本はふるさとなのだ。

昨年のアメリカに端を発した不況の煽りで、外国人の数が減った。現在は丹波市の外国人は約七〇〇名、教室には九か国六〇名の外国人たちが学習している。外国人の数が多いということは丹波の企業が元気であ

ることの証であり、ひいては丹波が元気だということだ。

五年ほど前から企業で働く研修生が増え、今や教室の中心は彼らになった。また、そのころから日本人と結婚した外国人女性も多くなり、その女性たちの出産、育児に関わる支援、学校に行く子どもたちの支援も多くなった。「子ども教室」も立ち上げた。果てしなく続く支援に、今一番の課題は支援するボランティアの不足だ。

丹波も今や多民族が暮らす地域になった。少子高齢化と若い労働力の不足する丹波にとって、外国人は必要で欠かせない存在だ。また外国の文化を学ぶ機会を与えてくれる貴重な存在でもある。丹波に住む外国の人たちが普通に生きていける社会が理想である。ことばが不十分な彼らが普通に生きていくには、私たち住民の優しさと理解が必要だ。

＊

六月に浦安市国際交流協会の会長をなさっている徳田八郎衛氏の講演を聞いた。思いがけない機会をいただき、とても嬉しかった。その際、東大大学院で教鞭を執っておられる八木信行氏の見知らぬ世界の興味深いお話も聞かせていただいた。もう三年ほど前になるが、ＮＨＫにおられた上野重喜氏が在任中に赴任されたインドネシアのことをお話しくださり、とても興味深かった。昨年は二度目の機会を得た。

郷友のみなさんが、丹波に都会の風を運んでくださる。郷里には「丹波の文化を語る会」を主宰し、このような出会いを作ってくださる岡本吉正さんのような方もある。縁あって丹波に来てくれた多くの外国人との出会いもある。

豊かな出会いは豊かな人と心を育む。

これからもいい出会いを運んでください。

気象観測三十五年

荻野　正裕（氷上町在住）

◆気象観測を始めるに至った動機

一九七五年、大阪豊中市の婦人方がプレパラートの面に卵白を塗布して夜間垣根に設置、翌朝回収し、表面に球状の物質（流れ星の燃え滓）が付着していたら大阪大学の研究室へ提供し、宇宙の物質研究のお手伝いとしているという記事が新聞で報じられた。

また中国で地下水位の観測による水位の微小変化から地震発生予知の成果が取り上げられ、神奈川県温泉地学研究所が「なまずの会」を発足させて全国に呼びかけていることを知り、それが切っ掛けとなって、私にも何か役立つようなことが出来ればと思っていた。そこで早速「なまずの会」に入会。「地下水位計」「気圧計」「雨量計」は貸与して頂けたが、値段の高い百葉箱は知り合いの学校用教具業者に新品交換で不要になった物を貰い、自分で屋根板、足折れなど修理して使用出来るようにした。露場は自宅の前庭の一部に芝を張り完成した。

◆気象観測の開始、観測時間

気象の観測時間は国際化に合わせ午前九時だが、地下水位の観測は最低一日二回は必要なため、勤務の都合もあって朝六時と夕六時の観測となった。

午前六時は一日のうちで最低気温となる時で、冬の朝は寒く辛い観測であったが、立春を迎える頃になると裏山でフクロウが鳴き出し、春近しと何となく心和むひと時であった。

戦後、日本の復興は農業に在りと、神戸海洋気象台

の指導を受けて、旧町村ごとに観測所を設けて観測し、結果を氷上郡（現丹波市）気象月報に収録していた。学校では気象班等を指導観測をしていた時期もあり、自宅での観測値やその纏めにも役だった。

◆社会への貢献

その観測は、毎月の気象観測原簿の町への提出や異常気象時間の問い合わせ、建設、農業、災害にと各種データを提出。時間雨量、総雨量等々、依頼者により異なる要求にも応えていった。民間の会社から警察まで、増水による橋の陥没による交通事故、犯罪時の気象、消防署より火災発生時の気温と湿度の問い合わせ等々枚挙に暇はない。

一九七九年から町委託観測所となり観測機器等も貸与を受け、自記観測機器の記録用紙等の消耗品費も出して貰えて有難いことであったが、市の発足と共に打ち切られたのは残念であった。

◆観測の心構え

森羅萬象　悉是吾師
禽獣草木　皆我友也

右の漢詩は大学卒業時に富田雅次先生より戴き、私の座右の銘として担任する理科の授業の最初の時間に取り上げてきた。

気象観測は常に心を傾けて自然現象を見ようとし、自然現象から学ぼうという心を持たねばならない。植物の花の開花、鳥の初鳴きによって生物季節を知り、毎年の記録から四季の移り変わりの速い遅いを察知するのである。

（注）富田雅次先生は戦後、市島町前山地区の診療所が開設された時、名医として知られ、鴨内坂を越えて幸世地区まで夜間提灯の灯をたよりに往診されたこともあり、サンデー毎日が「こんな名医が」と記事にしたために給料等のことで居れなくなったと話されていた。

◆三十五年間の観測から

その土地の平均気温という数字は、毎日の最高気温と最低気温を測定し、その平均がその日の平均気温となる。一年では七三〇回の観測値が必要であり、観測期間三十年が必要だから、延べ二万一千九百回の観測値が必要になる。

気象庁の発表、理科年表に表される平均気温は一九八一年から二〇一〇年の観測値が必要となり、本年の十二月三十一日までは何としてでも観測を継続し

て、それを明春丹波氷上の平均値として確立したいと思っている。

『氷上郡気象月報』（氷上郡気象観測協会・昭和二十七年発行）の冠頭の辞に「綴られたものは単なる数字の羅列に過ぎない。然しこれらは氷上郡二十五ヶ町村における昭和二十六年十二月中の気象の正直な姿である。物言わぬこれらの数字、記号はこれらを読む人それぞれの考えにより無言のうちに多くのことを物語り訴えるであろう。』と記されているが、まさに素晴らしい言葉である。

今まで私が観測し書き綴ってきた「気象観測原簿月表」二〇一〇年十二月までの観測で得た数字と記号がびっしりと並ぶようになる。

◆クリモグラフ

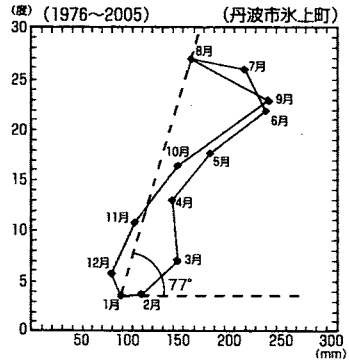
観測した結果から、その土地の気候をとらえる一つの方法として気温と降水量の関係を表すのに「クリモグラフ」というのがある。図1のような型となり神戸等の瀬戸内側の観測地のグラフ型となり、図2の日本海側の豊岡とは全く異なるグラフ型となる。

また一月と八月の点をつなぐ直線と水平線の角度は豊岡の115度に対して丹波は77度となる。この値を日本海指数という。従って、丹波の値はこの値からも瀬戸内式気候と判断される。しかし、気温と湿度のクリモグラフでは、過去における柏原での観測値からのグラフは神戸に似ず、豊岡の型に似ている。神戸新聞社発行の『兵庫探険・自然編』によれば、このことがわかる。

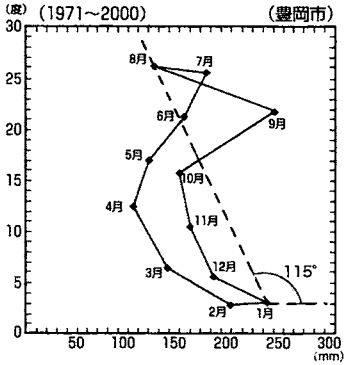
これらのグラフから丹波は二面性をそなえており準日本海式気候であるといえる。西高

クリモグラフ

図―1　気温と降水量の相関関係



図―2　気温と降水量の相関関係



東低の冬型気圧配置の場合、その土地が晴天の時は瀬戸内式気候区であり、雪もしくは雨の場合は日本海式気候区であると定義されている。

丹波は低い中央分水界の山を卓越してくる気流によって上記のことが実証される。

◆暖かさの指数、寒さの指数

『世界の生態気候区分図』に使われている「暖かさの指数」は吉良竜夫氏・川喜多二郎両氏の考案による。

植物群落の分布は、単純な「平均気温」では推し測れない複雑さを持つ。むしろ平均の「積算温度」（温量）が決め手となる。そのことに着目してつくられた指数だ。植物の分布を見るうえで、大変貴重な物さしとなる。とくに乾湿度をあまり問題にしなくてもよい日本で重宝だ。

次のように計算される。

暖かさの指数・寒さの指数　　観測期間　1976～2005

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
気温	3.3	3.5	6.8	12.7	17.5	21.8	26.0	27.0	22.7	16.3	10.8	5.5	14.5
指数	-1.7	-1.5	1.8	7.7	12.5	16.8	21.0	22.0	17.7	11.3	5.8	0.5	117.1

平均気温　14.5°c　　暖かさの指数　117.1　　寒さの指数　-3.2

一般的に植物の生活が営まれる季節は「月平均気温」5度以上の月だけである。それより寒い月は除き、残りの各月の平均気温から、それぞれ5度を差し引いた値を合計する。

例えば丹波氷上町の月平均気温を見ると、1月と2月だけが5度以下で、これを除いた残り10ヶ月の月平均気温から、それぞれ5度を引いて加えると117・1となる。これが丹波氷上の暖かさを表す「暖かさの指数」となる。同じように計算して、豊岡は108・4、神戸は126・7、姫路は117・3、洲本は120・4となる。

「寒さの指数」は、植物の生育が止まる5度以下の各月の平均気温から5度を引いた値を合計する。

その土地の冬の寒さを表すのに使われ、数値は常にマイナスであり、丹波氷上はマイナス3・2である。篠山はマイナス4・2、三田市はマイナス6・2、丹波氷上より南に位置するが、盆地状と標高が高いので値が大きい。

この指数が植物の分布に大きく影響している。丹波の植生を考える上で重要な要素である。

丹波竜の絵本を出版

丹波竜化石発見者の村上茂さんが執筆した絵本「丹波竜のおくりもの」（絵本作家・村上祐喜子さん協力）は、農水省の事業として予算がついていたが、一時事業仕分けのあおりで打ち切りになった。何とか出版するとの決意で、県の事業や自治体からの助成で費用を捻出し、ようやく出版にこぎつけた。一冊1500円。「子どもたちに丹波竜の記憶をとどめてもらいたい」と村上さん。

（平22・4・8）

丹波医療再生ネットワークが医療大学を開講

「医療問題に関心を持つ市民が、〝ざわざわ〟することが医療の再生につながる」として、同ネットワークの里代表が、7月13日から毎週火曜日に「丹波医療ざわざわカレッジ」を開く。無料で誰でも参加できる。

同ネットワークは丹波の医療崩壊が問題視された4年前に設立され、毎週火曜日に定例会を開いて勉強を重ねてきたが、これらの成果を市民に還元し、また、広く医療問題を考えてもらおうと企画したもの。大勢の参加が期待される。

（平22・7・11）

柏原赤十字は患者が増えたが赤字も増えた

2009年度の収支は3億2000万円弱の赤字と判明。前年度の赤字より、900万円ほど増えた。昨年から着任した外科医、看護士の人件費が増額したが、病床再開の時期が遅れたため規模が縮小して、患者増があったにもかかわらず人件費増は埋められなかった」と分析されている。2010年度は、増床が解決できたので、患者増も続き、新院長のもと、昨年度より赤字幅は縮まる見通し。

（平22・7・18）

NHKに柏原PRのお願いを

2011年のNHK大河ドラマ「江―姫たちの戦国―」の番組で、柏原を取り上げてほしい、とこのほど地域の有志が「織田信包（のぶかね）―初代柏原藩主を顕彰する会」を立ち上げた。ドラマの主人公「江（ごう）」は信長の妹・お市の方の三女で、徳川二代将軍秀忠の正室。江の最初の夫・佐治与九郎一成が離縁の後に、おじの、信包の家来として柏原藩で暮らした。お江のゆかりの地として柏原を紹介してほしいという。

（平22・7・22）

兵庫県立大が「山南スタジオ」を開設

県立大は、2006年に神戸商科大学、姫路工業大学、県立看護大学が統合して発足した大学。8月7日に、同大と丹波市、丹波県民局の3者が連携協定を結び、「山南スタジオ」を、丹波地域のまちづくりの調査研究拠点とすることになった。JR谷川駅の近くの民家を借り上げ、恐竜化石が発見された篠山層群などの地域資源を活用した街づくりを発信しようとするもの。丹波市内では、柏原地域で関西学院大学、青垣地域で関西大学がフィールドワークの拠点を設けている。

（平22・8・12）

「丹波の医療危機」その後

足立智和
（丹波新聞編集部記者）

急激な医師不足に見舞われ、診療機能の低下、悪化に見舞われた県立柏原病院と柏原赤十字病院。両病院とも医師数は減り止まり、わずかではあるが増加に転じている。診療機能も緩やかに回復しているが、以前の姿は望むべくもない。一筋の光明が射してきたとはいえ、まだまだ問題は山積で、住民は引き続き関心を持って見守っていかねばならないだろう。

県立柏原は、四三人（二〇〇二年度）から一八人（二〇〇八、〇九年度）にまで医師が減少。〇八年度は、一年間の赤字が一五億円を超え、一病院で県立一二病院の赤字総額の三分の一を占めた。入院可能な診療科は、内科、外科、小児科、産婦人科となった。残った医師たちも、県立柏原をもはやどうすることもできないと、集団で退職を考える所まで追い詰められていた。

病院全体が診療休止の瀬戸際にあった二〇〇九年三月に、事態は急転する。同病院に医師を派遣している神戸大が県と協定を結び、四月から大学がテコ入れを始めた。神戸大が新院長に任命したのが、加古川市で病院再建の実績がある大西祥男氏（循環器内科）だった。懸案の内科医も二人の派遣を得た。

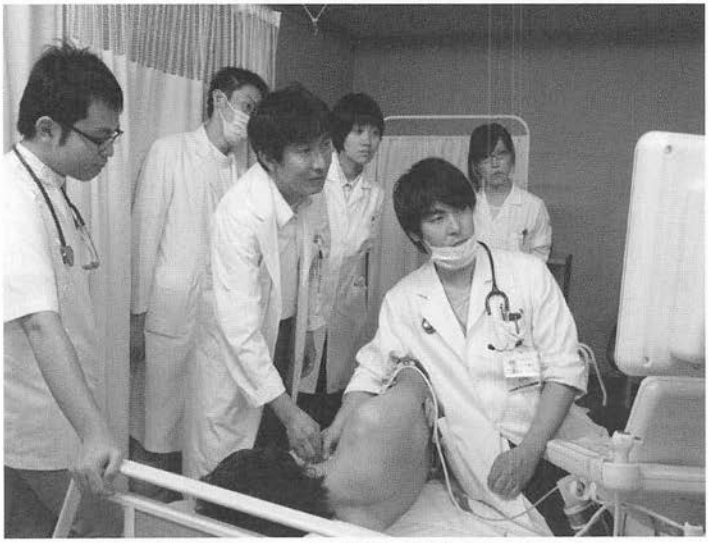
診療の柱の内科医が五人に増えたことで、患者数は急増。〇八年度と同じ一八人の医師数で、〇九年度は一気に赤字を六億円以上減らした。また、県立がんセンター（明石市）の消化器外科のナンバー1、ナンバー2がそろって同病院に移籍。胃がん、大腸がんの先端手術が、明石まで行かずとも受けられるようになった。

今年度になると、さらに回復傾向は顕著に。神戸大学から総合内科の医師が新たに着任し、柏原に親せきがある内科医師が本人の希望で赴任して来た。外科、産婦人科も大学が若手を送ってくれ、麻酔科の常勤医も戻り、医師数は五人増え二三人に。加え

て、しばらく途絶えていた初期研修医（医師免許取得後一年目）が、神戸大学と帝京大学から一人ずつやって来た。若い医師に知識・技術を教えることで中堅、ベテラン医師のモチベーションが高まり、院内は活気を取り戻した。ベッドも、三〇〇床から実質一一六床までダウンサイジングしたとはいえ、ほぼ満床近くで推移している。

大学のテコ入れで、診療機能の回復はもとより、医師が去る中で失ってしまった「教育」が戻った。大西院長は、「若手医師が学べる、魅力ある病院づくり」を掲げ、図書の購入から、研修医用の部屋の確保、インターネットを使った文献検索システムの導入、官舎の整備など、ありとあらゆる手を尽している。来年四月にも、複数の研修医を迎えられる見込みだ。これまでの院長と異なり、積極的に地域に出かけ、病院の現状を伝える講演を行っており、その数は一年で二〇回近くにもなる。

赤十字病院は、〇九年度に外科医を二人招へい。三年ぶりに手術を再開した。一時期三人（うち一人は歯科医）まで減った医師数は、内科五人、外科二人、婦人科一人、歯科一人の計九人まで回復した。ベッドも二二二床を五九床まで絞っていたが、外科医を迎え七〇床にまで増床した。



将来の就職を視野に、病院見学を兼ねた実習に訪れた医学生、医師たち＝県立柏原病院で

今年三月末に前院長が退職し、院長不在となったが、後任の片山覚氏が六月に就任した。片山氏は、前公立八鹿病院副院長で、（呼吸器内科が専門。片山氏も病院で若い医師を育てることを考えている。育てる医師像は、臓器別専門医でなく、患者の困っていることに間口を広げ対応する「総合診療」を行える医師だ。

ただ、現状は厳しく、二〇歳代の医師はゼロ、三〇歳代、四〇歳代が各一人、残る医師は五〇歳、六〇歳代と年齢層が高い。大学の支援はなく、独自で医師を集めなければならない。経営も厳しく、昨年度は約三億九〇〇〇万円の赤字（市が七〇〇〇万円の運営費助成を行ったため、約三億二〇〇〇万円の赤字）となり、さらに老朽化した病棟の寿命という問題も抱えている。

二病院の診療機能は重なる所が多く、「県立は急性期医療」「赤十字は健診と慢性期医療」といった機能分担は、依然として進んでいない。赤十字が先に始めた消化器内視鏡センターを県立が開設したり、赤十字が外科を再開したことで、赤十字から県立への外科患者の紹介数が大幅に減ったりと、役割分担どころか、両病院で患者を奪い合うかのような様相を呈してきている。

県立は、小児科（五人）と産婦人科（三人）で、地域の周産期医療の砦となっている。医師不足の象徴とも言われる小児科、産婦人科が存続できた理由は、一つには地元出身の医師が両科にいたこと、加えて、「こどもを守ろう、お医者さんを守ろう」のスローガンで、全国的に有名になった「県立柏原病院の小児科を守る会」ら、市民の支えによる。守る会に触発され、医師、歯科医師、薬剤師の有志が立ち上げた「丹波医療再生ネットワーク」は、市内二九八自治会を巡回医療講演に回っている。さらに、市民有志で作る「たんば医療支え隊」は、毎週木曜に、「差し入れ定期便」として、県立柏原病院に手作り軽食の差し入れを続けている。婦人会を主な構成員とする日赤奉仕団は、病院ボランティアをしている。

丹波市の医療事情は、依然厳しい。市内に整形外科の入院ができる病院がなく、交通事故の患者など、

半数は市外病院に搬送される。両病院が元気だった頃は丹波市内で救急搬送される患者の九〇％近くを市内で収容していたが、両病院が機能回復してきた今年上半期でも五六％にとどまっている。

毎週木曜に手作りお弁当を差し入れるたんば医療支え隊の女性たち＝春日町黒井で

また、神戸大学が以前示した「二病院統合」も棚上げにされたままだ。片山日赤院長は、「効率が悪いのは明らか。互いの良い所を尊重した上で一緒になろうという話を地域住民を中心に議論すべきだ」と丹波新聞の就任インタビューに答えている。丹波地域は県内一〇ある医療圏で、最も人口が少ない。人口の少なさは、症例の少なさに直結する。少ない症例を奪い合い、競合を続けては、経営が成り立たないばかりか、若い医師の技術習得を遅らせ、中堅医師のやり甲斐を失わすことにもつながりかねない。地域医療を守るために、地域医療の将来像を描く時が来ている。

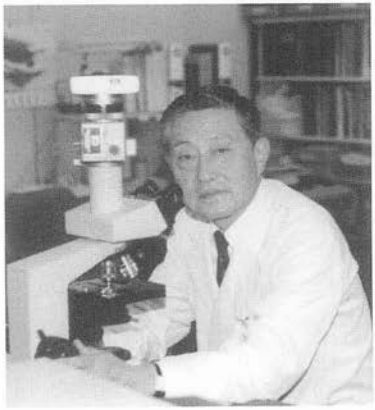
研究ひと筋の道

水谷　正寛（春日町）

終戦を迎えた八月のある日、米兵がジープに乗って柏原中学校にやって来ました。軍事教練の担当であった教官が一年生の数名を使って小銃を校舎の裏庭に埋めたことが米軍に知れ、その調査のための来校だったようです。植木校長先生が毅然とした態度で米兵と英語で話されているのを見て、自分も将来は校長先生のように外国の人とも対等の関係で話し合うことができる職業につきたいと思ったことを、ぼんやりと覚えています。

大学の卒論研究は、ショウジョウバエのメラニン性腫瘍発現に関する遺伝学的、栄養学的研究で、研究することの楽しさを教わりました。その後、クラーク博士の「少年よ大志をいだけ」に惹かれ、北大大学院に進みました。親に反対されることを恐れ、内緒で祖母に旅費を借りて受験に行ったことを覚えています。受

け入れていただいた教室の主任教授は、ヒトの染色体研究で日本学士院賞を受賞された牧野先生で、教室員のほぼ全員は細胞遺伝学、特に染色体関連の研究を行っていました。私に与えられた研究テーマは、昆虫や両生類の体液中に存在する細胞を生体観察して細胞の形態や機能を調べることでした。偶然にもイモリの腹水中に存在するお化けのようなラッセル氏体細胞が分裂することを見つけ、深夜まで細胞分裂を追う日々が続きました。



一九五八年春、私はテキサス大医学部ガルヴェストン校に交換留学生として留学することになりました。その当時はロックフェラー財団などの援助を受け、貨客船を利用して留学するケースが多かったようです。私の留学旅費と生活費は、留学先の教授が米国たばこ委員会から与えられたグラントから支出されたので、幸運にも往復航空券をいただき、テレビや中古自動車を購入する余裕もありました。出発に際し牧野教授にご挨拶に伺った時、「しっかりやってこい、青い目の女性を連れて帰ってきたら即刻勘当する」とはっぱをかけられ、また丹波新聞に、柏高卒業生が癌の研究のために米国に留学するとの記事が載って、ますますプレッシャーを感じました。当時の旅客機はプロペラ機のため、羽田からウエーク島、ホノルル、ロサンゼルス、エルパソ経由で時間がかかり、ヒューストン空港に着くまで緊張の連続でした。ガルヴェストンはヒューストンから南へ約五十マイル離れたメキシコ湾に面した小都市で、夏場は海水浴客で賑わい、街は夾竹桃の花がカラフルで美しい景観を呈するので、オレアンダーシティとも呼ばれていました。

解剖学部門組織培養研究所のボス、ポメラート教授は、我々日本人と同じように土、日も研究室に現われて仕事をしていました。彼は横山大観の絵を好む画家でもあり、日本人びいきの神経学者でした。研究室には日本の研究室と異なり、秘書、テクニシャン、フォ

トグラファー、実験の下準備をする補助員らが何人もいて研究をサポートしていました。米国たばこ委員会のグラントによる研究は、公衆衛生学教室との二年間の共同研究により紙巻たばこには発癌性があるとの結論に達しました。

大学院に復学後、北大医学部公衆衛生学教室との共同研究として大気汚染物質濃縮物の培養細胞に対する影響を調べたり、小児科や泌尿器科の依頼によるヒト先天異常児の染色体数と核型の分析を行なっていました。一九六二年に武田薬品から牧野教授への要請により武田薬品中央研究所に入所しました。丁度その頃、あの不幸なサリドマイド薬害が起こり社会的に大問題となりました。厚生省は新医薬品すべてについて胎児に対する催奇形作用の有無について検討することを義務づけました。

これに対処するために名古屋大学環境医学研究所に出向し、村上教授から胎児毒性試験法についてご指導を賜りました。社に戻って研究室を立ち上げ、実験動物を用いて医薬品の催奇形性評価試験に必死になって取り組みました。妊娠カニクイサルにサリドマイドを経口投与し、ヒトで報告されているアザラシ肢症と同じ型の異常をサル胎児に誘発させ、やったという気持になりました。

一九七五年になって㈶食品薬品安全センターに移りました。この研究所で20年以上に亘り医薬品を含む化学物質の生殖発生毒性試験を行なう他、行動奇形学的試験法の開発研究、胎児毒性発現機序の研究に従事しました。

これらの試験、研究を通して定型的な安全性評価試験にも研究的要素が必要であり、その研究をもって社会に貢献することが大切であると実感しました。定年近くになって、ようやく内外の同分野の研究者と少しは対等に会話できるようになったかな、と思うようになりました。

余談ですが、国民学校初等科の卒業に際し、関西氷上郷友会より褒状と金一封をいただきました。郷友会様のご期待に十分応えることができませんでしたが、この表彰が自分の成長に強く影響したと信じています。

（柏高第3回生）

一着のジャケット

三浦　宏（山南町）

それは今から約四十年前のゴールデン・ウイークを控えた四月末の日のことである。この日、ある国家プロジェクトに参加する企業の会合が有楽町で開かれ、これに参加していた私はこの会議が終わったあと、晴海通りを銀座に向かって歩き出した。週末で快晴だったが、午後三時頃のこの時間はまだ人通りもまばらである。会議が終わった解放感も手伝って、私の心は早ゴールデン・ウイーク気分で、これから会社に帰って一仕事をする選択肢はほとんどなかった。

ソニー・ビルを過ぎた辺りで行く手に洋服屋のショー・ウインドウが見え、中に夏のジャケットにしたら良さそうな生地が目を引いた。ためらわず、ドアーを押して中に入り、応対する店員とともに洋服生地の品定めを始めた。あれこれ生地を見ているうちに、店内は私が選んだ生地が五、六着ちかく広げられたが、そのうちの一つの値段を示すタグを見て驚いた。正確な値段は覚えていないが、現在の私の金銭感覚でいうと仮縫い付で五十万円前後の感触であったと思う。このタグに書かれている店名で分かったことだが、この店はかのEだったのだ。Eといえば、当時も今も高級仕立て紳士服の有名ブランドで、三十そこらの青二歳が出入りできる店ではない。晴海通りを有楽町から銀座へ向かうと、この店には正面ドアーとは別に店の名前も書かれていないドアーが通りに正対してあって、明日からのゴールデン・ウイークで浮かれ気分の私はこのドアーから迷い込んでしまったのだ。この店がEであることが分かってからは、五着ほども広げた生地の前からどうやって取り繕って退却するかが私の仕事になった。折からの夏のような天気も手伝って、どっと出た私の汗を見て、店員の言った言葉は今でも覚えている。

「お客様、今日はお暑うございますね」

ことわっておくが、この店員は当時三十前後の若造である私に対して終始一人前のお客として対応し、この言葉も間違って迷い込んだ場違いなお客をからかっ

てのものではない。お客によって対応を換えるのは、人を見て言葉使いを換えるようなもので、このようなことは一流の店ではやらない。

#

この場をどうやって脱出したかは明確におぼえていないが、しばしの恥ずかしさが治まると、私の中に雑多な想念が湧き出した。なるほど私がはからずもやってのけたのは資本主義的序列から見れば若干はみだした行為かもしれないが、これに汗を掻いてうろたえ恥じるこの自分も情けない人間ではないか。ひょっとして、この自分は資本主義的序列を唯一の生活規範として生きる俗物なのではないか。五十万円の正札を見てなんら動じることなく、「五十万円は出せない金額ではないが、背広にこれだけの金額を懸ける主義ではない」ぐらいのことを言って立ち去ることはできなかったのか。しかし、それにしてもあの生地は良かった、あの生地でこれからの季節に着るスーツを作って決めれば、この自分といえどもいい男に見えるに違いない……。

そして、次第に私の胸の内に、あの店で一着のスーツを作るべし、とする誘惑が頭をもたげてきて、ついにはこれが確固たる決意となってしまったのだ。この時の決意にいたる動機は、あの店でかいた恥ずかしい汗に対するリベンジというよりも、あの生地で出来た良いスーツを着たい、とする私のおしゃれ心による方が強かったと思う。リベンジを理由にして、おしゃれ心を満足させたかった、というべきか。

これは、私の早世した父の血ではなかろうかと思う。江戸時代にさかのぼれば直参武士の家系に生まれた父は、すべからく高級志向で高価なものを買ってきてよく母を困らせたらしい。

さらに背広については、私には一種の思い入れがある。私の大学時代の研究室の教授は、後の日本物理学会会長、関西の某一流商社の御曹司にして、ダンディ、その才能の故に周囲の嫉妬を買って教授になるのが遅れた、とまで噂された人であった。この教授に、意外にも私は覚えが良かったのだ。これには私があまり裕福な学生でなかったことへの思いやりがあったのかも知れないが、一つには教授の担当科目の試験で、私がかなり良い点を取ったことが関係していたのかもしれ

ない。教授が「……（私のこと）はできる」と言っている、と同級生が教えてくれたりした。大学院へ行くことを勧めてくれたし、これを経済的な理由で断って後、就職試験を受ける時も「君ならどこでも受かるよ」と励ましてくれた。私の人生にもこんな華の時代があったのだ。以後の人生で困った時に、これらのことを思い出してどれだけ励まされたか分からない。この教授が着ていたのがスコットランドで織ったと思われる、いかにも高価そうなホーム・スパン・ツイードのジャケットであった。この生地は遠目ではそれとは分からないが、近くで見ると所々に赤や黄、緑などの糸が一織り織ってあって、その塩梅が何ともいえず好ましい。

#

Eで背広を作る決心をして、すぐに私の脳裏によぎったのは、この手のホーム・スパン・ツイードでジャケットを作ることであった。それは貧乏学生である私を、時に励ましてくれた教授への感謝、そしてオマージュと憧れの具現化でなければならない。しかし、三十の男が作るジャケットであるから、いくらEといえども、五十万円のジャケットを作るのは身の程を知らぬ暴挙であって、文字通りシャレにもならない。身の丈を知るのがおしゃれの第一歩であろう。

以上のことを再びEを訪れて率直に店員に説明し、仮縫い付で二十万円以下の値段で上述のような風合いのジャケットが欲しい旨のことを伝えた。店員はいかにも好ましいものを見るように私を見て、「お客様の狙いは分かりました」と返事して、後日生地を取り寄せて私に見せることを約束した。

このようにして、スコットランドのHarris tweed生地による一着のジャケットが出来上がった。このジャケットは私の三十代、四十代（そして時には五十代前半にも）の事あるごとの勝負服として私の人生を飾ってくれた。そして五十代後半と六十代には部屋着として活躍して、つい最近、その役目を終えた。

今はこのジャケットのE製二代目を着ているが、初代ほどの生地選択に対する集中力が無かったか、あまり気にいっていない。現在、最初のジャケットとまったく同じ生地をEで探して、私の生涯最期になるジャケットを作ることを考えている。

日本有数の洞穴探検家

越智研一郎君を偲ぶ

野村節三（山南町）

昭和四四年の秋、私は興味本位に一冊の岩波新書『吉井良三著：洞穴学ことはじめ』（昭和四三年発行）を読んで、少なからず驚き、また感銘を受けた。

その最終章には同期生・越智研一郎君が洞穴探検で奮闘した様子がつぶさに記述されていたからである。今では絶版となったその新書は、京大の昆虫学者・吉井教授らによる洞穴生物の研究成果、洞穴探検の心得、日本各地の洞穴を探検した苦労話などが大変興味深く記述され、洞穴学入門の名著といわれている。

吉井教授は京都府京丹波町の「質志洞」などにいる最も原始的なトビムシ類を研究し、賤ヶ岳でヨシイムシを、「丹波（実際は丹後）の大江山」の〝鬼の窟〟ではヨシイヤスデを発見したことでも知られ、わが国洞穴生物学の開拓者でもある。

日本の洞穴探検は当時、吉井教授がリーダーの京大グループと洞穴探検の先駆者で、高知県の「竜河洞」を発見した山内浩助教授が中心の愛媛大グループによって推進された。昭和三一年に山口県の「秋吉洞」で日本最初のケービング集会が開催され、その集会に越智君も参加した。越智君の自然への旺盛な探求心は既に中学・高校時代から発揮されていたのである。

越智君の原籍は、かつて別子銅山があった現愛媛県新居浜市別子山で、越智君と私は旧制柏原中学校、新制柏原高等学校併設中学校、柏原高等学校を通じて六年間生物班の同期生で、彼の活動は松山確郎先生の自伝『私の中学校・高等学校』に詳述されている。

その生物班では松山確郎、山本義丸、井上三義三先生御指導の下に、班員が氷上郡内の野鳥観察や昆虫・植物採集で発見された生物も多く、中でも越智君の活躍は格別で、柏高生物班第一期の黄金時代であった。また、橋立、宮津、栗田への臨海実習や京都府水産試験場と京都府立水産高校の見学も懐かしい思い出である。

その後、越智君は愛媛大学理学部で生物学を修め、丹波では貴重なギフチョウを発見している。この大学

時代はアルバイトをしながら山岳部で四国の山岳を踏破したり、山内助教授に洞穴探検の手ほどきを受けて、プロ級のスキーヤー兼ダイバーとして、四国ケービング・クラブを結成し、前述の日本初のケービング集会に参加したことが、後の素晴らしい洞窟探検の契機になったという。

大学卒業後は愛媛新聞社学芸部に勤務し、記者の仕事の傍ら月刊誌『愛媛の自然』の編集や『石鎚山系の自然と人文』の発行にも尽力し、山内助教授の指導下に愛媛県内の洞窟探検調査も行なった。そして、本格的な洞穴探検を目指した彼の夢が実現する時がきた。

柏原高校生物班「臨界実習」（京都府立水産高校屋上にて、昭25・8／後列左より3人目が越智君、後列右端が筆者）

昭和三四年、岩手県の岩泉町にある「龍泉洞」の第一次調査が実施され、二年後にはやや北にある「安家洞」（全長が七・六五kmで日本最長）も探査された。

昭和三七年夏に第二次龍泉洞調査が日本ケービング協会に委嘱され、越智君は日本最初の洞穴潜水で「第一地底湖」を発見した。彼は神戸新聞社社会部へ移ってから、潜水技術者・松野正司氏と探検家・高橋孝冶氏を仲間に入れて〝ビーバー集団〟を結成し、神戸新聞社退職後も着々と地底湖探検の準備を進めていた。

こうした中、昭和四二年七月、工藤市助岩泉町長の熱意に応えて越智君は〝ビーバー集団〟を率いて、暗黒の「龍泉洞」最奥部を大変な危険に曝されながら詳しく探査し、苦心の末に「第二、第三地底湖」を発見した。

その年一〇月には山内助教授を隊長とした第三次龍泉洞総合学術調査隊が編成され、潜水調査を担当した越智君ら三人は、さらに「第四の壁」の奥にある「第四地底湖」発見という大きな成果を得て調査が終わった。

その帰路、越智君らはまだ諦め切れず、盛岡から密かに岩泉町へ引き返してD洞の再探索に挑んだのである。しかし、彼はD洞の水深五二mまで潜った時、意識朦朧となり、必死に浮上して一命をとり止めたという。

このように越智君らの決死の探索で巨大な主洞が確認され、詳細な原図が作成されたが、地底湖の謎の解明という彼本来の探究心は依然燃やし続けていた。

ところが、翌昭和四三年八月七日、越智君は徳島県阿南市の沖五km、水深五〇mの海底でのケーブル埋設工事中に不慮の事故に遭い世を去ったのである。

天真爛漫で仲間から〝オチケン〟と呼ばれて親しまれていた彼であったが、三四年の短い生涯であった。

突然の訃報に接した関係者の悲嘆は大きく、新進気鋭の有為な洞窟探検家として、さらなる活躍が期待されていただけに、その突然の夭折は惜しまれてならない。

また、偶然にもその年の一二月に越智君の同僚・高橋氏も「龍泉洞」最奥部の地底湖探査で命を落とした。

それから一三年後の昭和五六年にNHK特集番組「謎の地底湖」の取材で最深潜水七三mが記録された。

現在、この「龍泉洞」は、山口県の「秋吉洞」、高知県の「竜河洞」と並んで、〝日本三大鍾乳洞〟の一つに数えられ、国の天然記念物に指定されている。その全長は既に調査されただけでも二・五kmはあり、全体で五km以上と推定されているが、その全貌はまだ多くの謎に包まれている。

また、神秘的なエメラルド色の水を湛え、世界有数の透明度を誇る地底湖は、その後の調査で「第八地底湖」まで確認されているが、越智君らが発見した「第三地底湖」の水深は九八m、日本一といわれる未公開の「第四地底湖」の水深は一二〇m以上もあるとされている。

今では宮古の「浄土ヶ浜」と共に、岩手県内屈指の観光地となっているこの「龍泉洞」を訪れる観光客は大自然の絶妙な造形に息をのみ、幻想的な地底の世界へと誘われる。

私は昭和五一年に大船渡市三陸町へ移住して以来、何回か親戚、友人、知人をこの「龍泉洞」へ案内したが、その度に四三年前に、この大洞窟を命賭けで探索して多くの成果を挙げたあと、若くして他界した同期生・越智研一郎君の大きな足跡が偲ばれるのである。

扉の向こう側

井　徳　正　吾（氷上町）

私はそのときの電話の内容を鮮明に覚えている。それはセミナー企業からだった。スタジオ内で講演を行い、その内容をCDやカセットテープに収録し、頒布するというビジネスをしている会社だった。私は迷った。私にできるかと。私は喋りが得意ではない。しかも聞けば第一回の講演者は中曽根元総理だったし、それ以外にも養老孟司や脳科学者の茂木健一郎、経済評論家の長谷川慶太郎、ノーベル賞の小柴昌俊、作家の猪瀬直樹、小池百合子など、テレビで活躍する著名人がいっぱいだったからだ。そんな一流の人たちに混じって一介のサラリーマンに過ぎない私が講演するのにはためらいがあった。

「一度、どんな感じかテープを聞かせてもらえませんか？」。そう答えるのが精一杯だった。

送られてきた何本かの講演テープを聞くと、益々気が滅入った。そこは明らかにプロの世界で、ただのサラリーマンが立ち入るべき世界ではなかった。

「大丈夫ですよ。あとでどのようにでも編集できますから」。

その台詞とおだてるような言葉に押され、私は初めて経験する世界の扉を開けることにした。しかし、そう決めたものの、収録までの数週間、私は私ではない私を経験することになる。それは悪夢のような数週間だった。そんな重圧を身にまといながら収録当日、私はスタジオに向かったのである。

こんな依頼が来た理由を私にはわかっていた。

五十歳を目前にしたとき、私はこれからの自分の生き方を見直してみようと思った。そう考えた私は、何か社会に残ることをしたいという気になったのだ。それはこの世の中に自分が存在したという証を残したかったのかも知れない。広告の仕事は花火のように一瞬の輝きをもたらすが直ぐに消えてしまう。しかも私のように、広告を作る元となるマーケティング計画を立案するという役割は、かんがえることが仕事で商品でもある。常に裏方で、制作者のように表に出ること

がない。つまり、私はいつもカタチに残ることがないものをひたすら作り続けていたのだった。だから何かカタチに残せるものが欲しいという思いは、心の底から強く突き上げてくる、どうにも抑えきれない衝動だった。

しかし、何をやればいいのか皆目わからない。思いだけでは強いのに、何が自分にできるのかが自分でも掴み切れない。やはり、マーケティングという仕事周りでしか自分にはない、そう気付くにも私の場合、それ相応の時間がかかった。

私はマーケティングに関する知識をとりあえずビジネス書にまとめることにした。

それからの私は平日の夜や週末の時間を切り取って執筆に当てた。時には夜中に飛び起きて、そのまま朝まで執筆し続ける日もあった。同僚の飲みの誘いを断り、一目散に家に向かった頃もある。仲間から「付き合いの悪い奴」と陰口を叩かれ始めても我が道を行くしかなかった。私には残された時間が多くないという脅迫めいた意識が強くあったからだ。そして、ようやく初めての単著が世の中に出た。先述のセミナー会社からの講演依頼は、明らかにこの単著が発端になっていたのだった。

講演の収録を終えて一ヶ月ほど経ったとき、大々的に新聞に頒布の広告が出た。私も大きく写真付きで載っていた。その広告が出た直後に新聞社から講演依頼が来た。カセットテープ頒布の講演で、どんよりとした胃痛を感じながら数週間過ごした経験があるだけに、一旦は断ろうとした。しかし、仲介役の通信社の担当者は「これも地元への貢献じゃないですか」という。その言葉に押されて結局引き受けてしまった。私はまたもや新しい扉を開けたのだった。

洲本での初めての講演会を皮切りに、その後、次々と全国の新聞社から講演依頼が舞い込んだ。そして私は、帯広、八戸、秋田、横手、新潟、松本、富山、山梨、……、長崎、宮崎、日向、大分、八代、熊本……、とまさに全国を駆け回ることになる。移動は全てグリーン車かビジネスクラス。しかも空港からは黒塗りのハイヤー付き。ＶＩＰクラスの対応だった。

事件は時に絶頂期に起こる。

そのとき私はまだベッドの中にいた。朝の電話で起

こされた。電話の主は地方新聞社の講演会を仲介した通信社からだった。

「井徳さん。まだ自宅ですか！」。悲壮な声に眠気が飛んだ。その日、関西の某市で講演会が予定されていたのだった。時計は既に十時を過ぎていた。十二時開演。昼食を終えてからが私の講演となっていた。聞けば既に一五〇名ほど集まっているという。市長も同席だった。

私は一日、日取りを間違えていたのだ。

それから悪夢のような日々が続いた。激しいバッシング。容赦ない処罰。遠巻きで陰口を叩かれる日々。うわべだけの友人は私から去っていった。

長らくそんな失意にいたある日、都内の大学から講師の依頼が来た。オープンカレッジで広告講座の講師をしてほしいという。全ての活動を断り、みそぎをしていた私には、久しぶりの依頼が心の底から嬉しかった。その頃の私は社会から抹殺された気分でいたからだ。

「こんな私を必要としてくれているところがある…」。そんな思いで大学からの依頼を受けることにした。毎週というカリキュラムに不安はあったが、しかし、打ちひしがれた心を癒してくれる救いの手のようにも思え、結局引き受けることにした。私はその扉を恐る恐る開けることにしたのだった。

少しずつ周りの環境が好転し、充実した日々を送り始めていたあるとき、ある雑誌社から連載の依頼が舞い込んだ。毎月締め切りがある連載に恐怖心はあった。次々と連載のテーマが思い浮かぶとは限らない。アイデアに詰まったらどうするのか？　期限までに書き上げられないで、ウンウン唸る自分の姿が透けて見える。提出期日を一日間違えるという悪夢のトラウマが覆いかぶさって来る。そんな不安を抱えながらも、結局私は引き受けた。

そんなとき、今度は宮城大学から連絡がきた。私を特任教授として迎えたいという。会社の「社内に教授がいるというのはいい宣伝にもなる」という判断で、結局引き受けることにした。私は今、学生に囲まれながら、マーケティング・コミュニケーションやら広告論やら、ビジネスプレゼンテーションやらを教えている。こうして、またもや私は未知の扉を開けたのだっ

た。

つくづく人生は山あり谷ありだと思う。また失意にあっても必ず救いの手を差し伸べてくれる人が確実に存在すると信じる。重要なのはその存在に気付くかどうか。そしてそれを救いの手と感じ、その手を握ろうとするかどうかだ。手を握らないという選択肢もある。

同時にまた、人生には幾つかの扉があるのだと思う。その扉はどんな人にも均等に準備され、人生のときどきに突然現れる。そしてその扉を開けるかどうかは、その人次第である。目の前に現れた扉を開けると、そこにはまったく知らない世界が広がってくる。その世界で、大変ながらも、もがいていると、いつかまた目の前に別の扉が準備される。そしてその扉を開けるかどうかもまたその人次第なのだ。

扉を開けるのは勇気がいる。扉の向こう側にどのような世界が広がるのか予測できない。それは手に負えない世界かもしれない。苦労が多い世界かもしれない。何もそこまで大変な思いをしなくてもいいし、自分を追い込むことはないとも思える。何もしないで、それまで通りにしていれば平凡だが楽である。しかし、何もしないと自分の世界はそこで留まる。新しい扉を開けないで生きていくことはできる。また必要もない。

しかし、扉を開けると、知らない風景が目の前に広がっていくのを感じることができる。その扉を次々と開けながら生きていくと、いつの間にか思わぬ世界に到着する。

振り返ると、以前の自分がものすごく小さく見えてきたりする。だから私は必ず目の前に現れた扉は開けるようにしている。それが私の生き方だからだ（この原稿もまたそんな気持ちで引き受けている）。

私は今、五十八歳。そろそろ定年への最終コーナーを回ったところ。さて、私の前に、次はどのような扉が準備されるのだろうか……。

いけばな（三觜柏洋）

わが家の古きものたち

木呂子　恵美子（春日町）

私自身と丹波の関係は、父が春日部診療所の医者だったので、春日部中学、途中で新しく五ヶ町村一緒になった明徳中学から柏原高校を出たので丹波に住み、そのご縁で郷友会に入れて頂き四十年近くなる。いろんな方面にご活躍の多くの方々と親しく話をして頂いて、普通の主婦であり、平成元年に主人に先だたれてからは、ますます社会とのつながりが少なくなった私には誠に有り難い場所であった。

木呂子と丹波の係（かかわ）りといえば、四百二十年も前、先祖に木呂子丹波守元忠という人が居て、今家に残っている古文書に天正十八年の北条氏直の感状が有る。これは丹波守の弟、下野守に宛てたものだが、その忠節を賞し、この合戦に勝利を収めたなら、駿河、甲斐両国の中から望み通りの知行地を与えることを約束しているものだ。しかし、この後すぐに北条氏は敗北してしまうのだから空手形に等しいものだ。木呂子文書として、『小田原市史』『東松山市史』、更に和紙で有名な埼玉県の小川町の歴史等に記載されている。

「天正庚寅松山合戦図」によると、寄手七万余騎（前田利家等）、城方総勢五千余騎で、その中に副将丹波守、下野守、勘解由等々、木呂子の名も入っている。「妻子を三の丸に人質に取られ、その後の合戦では前田、上杉連合軍に組み込まれ、先陣をつとめた」という記述もある。その後、どんないきさつがあったか、下野守の子孫は徳川三代家光の頃から徳川家に仕え、代がかわると、時の老中に「由緒書」を提出していたらしく、その控が何冊か有る。先祖代々のこと、親類のこと、誰々が鉄砲皆打で白銀何枚頂いたとか、戦のない時代にも腕をみがいていた様子が分かる。享和二年の記述に「百六拾六ヶ年無間断　御奉公奉勤仕候」とある。それからまだ徳川の終りまで続くのだから大変だ。

石高二百参拾石位、小禄の江戸時代のサラリーマンかな？と、私は勝手に考える。

百人組与力が多いようだ。八代目に次大夫平友親（じだゆうたいらのともちか）（行年八十二歳）という人が居て、晩年は江戸城内に

杖をついて入ることを許されたとか、いかめしい裃（かみしも）姿の絵が残っている。お馬廻（うままわ）りの時に頂戴したという、あまり変哲もない器が大事そうに取ってある。徳川の殿様の身辺警固の役目も有ったのか。

そろそろ終わりを迎えてもよい代物が多い。納屋に有る葵の紋付の木箱も何十年もほったらかしなので、もう分解しているだろう。

四十何年も前、息子が床の間に有ったそれを見て、ふるえて怖がったので押入れに放り込んである「兜（かぶと）」が有る。白髪まじりの総髪、金色の角、今あのまま戦いに使ったら、敵が逃げて行くだろうなと思うしろものだ。何故、今の時代までとって有ったのかさっぱり分らない。年金生活だから、手入れにお金のかかるものはとても持ちこたえられぬ。ただ江戸時代には木呂子の地の日影村東光寺に田畑合わせて二石三斗余の作徳を寄進し、居宅も明け渡し、明治時代の初めは江戸時代の居宅は絵図だけ手元に残し、内務省の役人から静岡県庁に移り、昭和二十年、終戦前に静岡鷹匠町の家は空襲で焼け、義父は戦後、大連からの引揚げで無一物になり、何度も大変な目に遭っているので、今現存しているものは、親類筋や女の人達の苦労のお陰と思い、私の生きている間は、守って来た人に敬意を表し、古文書などは貸金庫に入れているが、息子も今仕事が忙しく、そういう事を気にかける余裕もないし、もう今後はどうなってもよしとしようと思っている。

もう木呂子は息子の代で終わりと思っていたが、昨年八月末、結婚十五年目で女の子が誕生、十八代目に継がり、私は七十一歳で初孫を授かり、もう有り難く嬉しくて、いくつもの持病も何のその、お呼びがかかると喜んで、子守に出かける。

昨年まで木呂子の菩提寺・沼袋の久成寺の総代（三人）を二十年続け、ようやくお役御免になった。お上人はじめ家族ぐるみでお寺を守って下さる気持の温かい方たちで、きっと亡くなった主人も居心地が良いだろう、などと日蓮宗のことも不勉強でよく分らない内に、もう一期と乞われるまま長くなってしまった。えらい人たちから叱られそうな、いいかげんな総代だった。

我が家では仏壇の前でお祈りする時、お水と日に一度、自分の食事を小皿に少しずつ取り分け供えている。

木呂子家は四百年も前から日蓮宗だが、私の実家は京都の建仁寺の臨済宗。母はクリスチャンだったし、父の祖父は神道、と代を遡れば先祖にはいろいろな宗教の人が居るだろうと思う。

私は「どうぞいらっしゃりたい方は皆さんいらして下さい。一緒にごはんを頂きましょう。そちらでも仲良く、暖かい時が過ごせますように」とお祈りする。結局、自分が寂しがりやなのかも知れない。

音楽に出会う旅の楽しさ

大西　修　三（青垣町）

私が柏原高等学校へ入学したのは、一九五一年（昭和二六年）四月で、もう六〇年近く昔のこととなってしまいました。

当時、校舎は地続きですが、二ヶ所に分かれていて、旧柏原中学の第一校舎の方に二、三年生、私達一年生は旧高等女学校の第二校舎に入っていました。

当時、バス通りから第一校舎に通じる緩い坂道の入口あたりに、古びた映画館があり、私達はそれを第三校舎と呼んでいました。放課後、ここを利用する人達も多く、結構課外授業の役に立っていたのではないかと思います。私達一年生には一〇クラスあり、普通科が六組、商業科が二組、家庭科が二組で、学校全体の生徒数は、兵庫県下でもトップクラスだと言われていました。

入学してみると、氷上郡（現丹波市）の中学校の陸上競技大会や球技大会等で顔を合わせた人達が大勢いて、すぐに友達になることができました。

同じクラスには、奥谷哲也君、酒井章君、安達（現・村上）克己君など、他のクラスには、上野重喜君、足立（現・杉丸）茂さんなどの姿がありました。

高校の三年間はあっという間に過ぎてしまいましたが、その間の出来事は今だに鮮明に記憶に残っています。

大学に進学してからも、会社に就職してからも、映画や音楽を楽しみましたが、音響機器メーカーの人事・総務部門に長く勤務したことから、自然と音楽に親し

む機会が多かったのではないかと思います。

音楽と出会うチャンスには二通りあって、出掛けた先でいい楽曲にめぐり会う場合と、この曲はすばらしいな、と思っていた場所を後で訪れる場合とがあります。

現在は、国内外の旅行がささやかな楽しみの一つですが、行った先で、できるだけ音楽に触れるようにしています。例えば、ニュージランドではマオリ族の音楽をCDで購入したり、インドネシアのバリ島では、バロンダンスやケチャックダンス等の舞踊音楽を鑑賞したりしました。

また、その曲の旋律で描かれた場所に立つことにより、その曲のすばらしさを深く味わうこともできます。イタリア旅行では、メンデルスゾーンの交響曲第四番「イタリア」はこんな情景を描いているのだとか、ああ、ここが「ローマの休日」のオードリー・ヘップバーンが佇んでいた場所だとか、レスピーギの交響詩「ローマの松」や「ローマの噴水」は、こんな情景を楽曲にしたのだとかが理解できます。

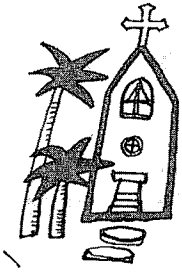
ドヴォルザークの交響曲第九番「新世界より」の中に出てくるボヘミアの郷愁をたたえたメロディーは、こんな場所をベースにして生み出されたのかが分かります。

ラスベガスから飛行機でグランドキャニオンの上空を飛んだ時には、グローフェの描く交響詩「大峡谷」は、これなんだと感動しました。

「ウィーンの森の物語」では、すぐそこにシューベルトが立っているかのように感じました。

パリを唄った数多くのシャンソンにも感動しますし、ダイアナ・ロス、ナタリー・コール、カーペンターズ、カーリー・サイモン、最近のアリシア・キーズ、ビョンセ、レディガガなどよく聴きます。

クラシックにせよ、ポピュラーにせよ、音楽は人の心を癒し、生活に潤いをあたえるものだと思います。これからも、高校時代のよき思い出とともに、音楽とは長く付き合っていこうと思っています。



定年後に始めた油絵

阿部　勉（氷上町）

茨城県東海村でアマチュア画家の小グループが集まって美術連盟を作っています。他の連盟のことは、よく存じ上げていませんが、ここでは百名足らずの小団体であるものの、村の芸術団体の認定を受けております。

設立趣旨は、メンバーの研修、親睦、市民講座の開催などであり、行事は新年会から始まり、春の日帰りスケッチ会、モデルさんを依頼したデッサン会、秋の一泊スケッチ会、住民を対象とし文化祭等々、数多くあります。

これらの行事は各支部（約二〇名）で担当しております。私達の支部は輪番が来て、昨秋は一泊スケッチ会を担当しました。

この役目は、場所の選定、参加者募集、業者との交渉などで不慣れのため気苦労がありました。

行先は長野、新潟県境の妙高高原という案が出ました。茨城から多少遠いけれど景勝地ということで、幹事特権で即決しました。

我々会員の平均年齢は七〇歳を超えており、遠距離でありトイレ問題などでどれだけの参加が見込めるか心配をしましたが、八八歳を筆頭に予定の二五名の申込みがあり、ほっとした次第でした。

晩秋一一月初旬、まだ薄暗い早朝五時に貸切バスで東海村を出発し、北関東自動車道を水戸、宇都宮、長野へと西走し、五時間かけて妙高へ着いたのは一〇時過ぎでした。

軽井沢周辺の渋滞もほとんどなく、一時間毎のトイレ休憩はきちんと守れました。

次に心配していたお天気は朝から小春日和で、がっちり着込んでいた防寒着をあわてて脱ぐ、うれしい誤算となりました。

茨城ではあまり高い山がないので、雄大な妙高を目の前にしての二日間スケッチは実に楽しいものでした。

夜は一同で懇親会を開き、その後、画評会を催しましたが、旅の疲れと多少のアルコールで、うつらうつらしている人もいました。

参加者の半数はご婦人でしたが、こういう機会でないと家をあけられない、と喜んでおられました。

さて、私が油絵を始めたきっかけは、会社の定年を控えた人事部主催の講習会での話題からです。今の内から第二の人生をいろいろ考えておくようにと、健康、趣味、年金等の講話がありました。今から思えば良き時代でした。

会社人間にとって一番苦手なことは、ご近所の人といかに接するかということと、自分の趣味を〝作る〟ことのようです。

近所付き合いは田舎であるので、さほど難しいとは思いませんでしたが、趣味のサークルに加入しようとした時は腰が引け、何度もためらいました。

まず、油絵市民講座の一年間コースに申し込みました。もう一〇年以上前のことです。

その後コースを卒業し、同好会に入れてもらいました。更に個人的に他の画塾に習いに行きました。同好会は三〇名、画塾は一〇人程度です。よく出席するのは半数程度です。

毎週一回、もう一〇年以上習っていると多少向上したような気がして、今では仲間とギャラリー展に出品したりしております。作品は、まだまだの出来映えですが、今年より来年、来年より再来年と、気長に努力しようと思っております。

趣味の会に入って感じたことは、上手、下手はさほど気にせず、要は楽しく参加すれば良いのだということです。何かに打ち込める趣味があると、苦しいことがあった時、結構逃げ場となると思います。それにいろいろな人と交流すれば気持が若々しくなり、年を忘れることがあります。

最近、時間の合い間を作り、体力維持のため市民グラウンドでの高齢者グランドゴルフへ毎週一回通うようにしました。ここでも八〇歳以上の人が元気に参加しています。七〇歳のクラスは若手です。

これらの趣味は団体に属していても、他人からさほど拘束されることはないようです。

物事を始めるのに年齢は関係ないと言われておりま

すが、現在を楽しく過ごすのが、自分にも誰にも一番良いことだと思います。

妻も別な趣味を持っており、お互いに相手の趣味に干渉しないように心掛けています。

訪れる高齢化時代は、ますます長くなると思われますので、自分から積極的に無理のない範囲で趣味を持ち、どうせやるなら、仲間と明るく楽しく接していきたいと思っております。

退職後の私の生活

和田幹夫（春日町）

(1) 退職に際して

数年前、三十六年五か月勤めた会社を、若干早く退職しました。当時、各企業とも長きに亘る不況に喘いでいる時代であり、企業存続のためと称してリストライコール人員整理が行なわれ（正当化されるような）報道がテレビ等で放映されておりました。終身雇用を信じモーレツ社員と持て囃されていた社員も幹部も人員整理の対象となり、ご多分にも漏れず小生在籍の企業も赤字決算が数期続き、一万二千人の大リストラを発表、断行することになりました。小生も本社に残るのは厳しい雰囲気であり、身の振り方を考えなくてはならない状況となりました。

ある日、上層部から地方の子会社が困っているので会社を再構築してもらいたい、との転属の内示がありました。当時もそうですが、急激な売上げ増が見込めない状況での会社の立て直しを図る方策はいろいろありますが、まず手を付けるのは固定費の圧縮イコールリストラとなり、またもや従業員の整理を一つの柱とした職務を遂行するのは心苦しく耐え切れないと判断致し、内示を辞退して退職の道を選びました。

退職を数か月に控えて人事本部開催のセミナー等に二回参加、自由人となった時からどのような生活態度で日々望めば良いのか助走期間に入りました。自由人となった時の希望の一つがスポーツジムにて汗を流し体質改善を図り、良い健康状態で人生を謳歌するのが願望でした。在職時は海外駐在を含め後進国への出張

も数多くあり、衛生状態が良くない国、水質が悪い都市では食水でお腹を壊すことがよくあったので、極力水分補給等を抑えるのが常となり、発汗作用はすこぶる悪く、それらが原因だと思いますが、常に体調不良が続いているように思えた。まずはこの点を改善したいと以前から強く感じておりました。

(2) スポーツジムへ

晴れて自由人となり、さっそく区内に三か所あるスポーツジムを見学、比較的明るい感じがする所を選び入会しました。週二回をスポーツディと自身で決め真新しいスポーツウエアにて始動。若いインストラクターに機器を使ったウェイトトレーニングの基本を教わり、気持ちよく汗を流すことが出来たことに満足。トレーニングの後は、お天道様が高い時間帯にゆっくり風呂、サウナ、水風呂でリラックス出来るのは現役時代と比較すると、まさに天国でした。希望していた生活サイクルの一つが実現したと納得しておりました……が、三か月を過ぎる頃、運動したと思う充実感が少しずつ薄らいできて、何故かと自問、機器を使った筋肉トレーニングの動作は単調、しかも自己流なのでマンネリ化し、しっかりと再度目標を持たないと続行は難しい……と感じるようになりました。

(3) 仲間との出会い

良い体調作りをするのに現状運動で効果が出るのか自問しながらトレーニングを続け、目的とする成果もなく興味を失いかけた時期に、見るからにボディビルダーと思われる筋肉隆々の体格をしたN氏との出会いでした。私が自己流のやり方で顔を真っ赤にして機器トレーニングをしているのを見かねて声をかけてくれました。正確且つ効果的な機器使用の手ほどきを数回受けている過程で一緒に筋肉トレーニングをやりましょう、と誘われて仲間入りして週二回の指導を受けることになりました。

さすがにプロの方の指導は厳しく、最初の時期は基本動作が大半でしたが、数回過ぎるとボディビルダーを目指すような（？）各自、重さの限界まで挑戦する本格的なトレーニングとなりました。N氏のガイダンス等を紹介します。

Ｎ氏は薬品会社の三代目社長ながら社長業よりボディビルに魅せられた変わり種で、ボディビル歴十五年。毎年開催されるコンテストに出場。過去優勝した実績を持っている方です。

トレーニングは週２回で、鍛える筋肉がそれぞれ異なります。例えば、今日は大胸筋を鍛える場合、まず大胸筋を支えるサブ筋肉を強めるためのベンチプレスから始まり、約五種類の機器を使用、三時間位の筋肉トレーニングを受けます。

トレーニング後は痛めた筋肉をリカバリーするための補助運動を教わります。全て完了した時の満足感、やり遂げた達成感は格別。指導を受けている仲間で異色はサッカー元全日本代表のＫ氏。テレビ番組「笑点」に出ているＹ君、ローマオリンピックに出場されたＦ氏等で、指導を受けて三年半になります。

トレーニング後、反省会と称してよく飲み会をします。年数回Ｎ氏の別荘へ出掛けバーベキュー、冬場は鍋料理にて飲み明かし、ストレスの発散をするのも楽しみの一つとなりました。利害関係がないもの同士が何故か気が合い、トレーニング上での信頼関係も出来て、お互い頑張り合える場が持てるようになったことに感謝しています。

(4) 生活のサイクル

Ｎ氏に筋肉トレーニングの指導を三年半受けた結果、当初目的としていた発汗性は非常に良くなり体調も良好、現在に至ります。目標であった体質改善は自己採点ながら達成出来たと思っております。もう一つ週一日ですが、十年続けていることがあります。それは後輩が起業したＩＴ関連会社（平成二十四年に上場予定）のサポートです。今でこそ毎年新卒者を二、三名採用出来るまでに成長しましたが、財務状態は未だ弱いので、私の立場は微力ながらボランティア精神にて事業を支援し、会社の発展を見守っているのが現況です。この不況下で少しずつ社員が増えていくのを見るのが楽しみです。単調になりがちな自由人の生活を有意義に楽しく過ごせるよう、いろいろなことに興味を持ち、課題を見つけて脳に刺激を与え良いリズムで、後ろを振り向かない人生を一歩ずつ前進出来ればと願っている日々です。

吉住自由造さん追悼

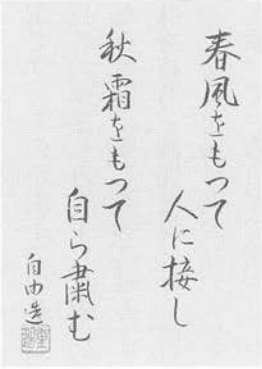
足立　さつき（春日町）

◆出会い、そして丹波で

気がつくと、いつもそばに吉住自由造さんがいらっしゃいました。

私の後援会が発足した一九九〇年一一月、名誉会長さんに就任していただきました。いつも口癖のように「私は音楽のことは全くわからないけれど、いつも応援していますよ。頑張ってくださいね」と、少しはにかみながらおっしゃっていました。同郷の吉住さんがいつも笑顔で支えてくださっている、いつも客席から温かい拍手を送ってくださることが、私にとって大きな励みでした。

足立さつき後援会発足 15 周年記念コンサートで



発足会の翌年九一年八月、故郷の春日町文化ホールでリサイタルを行った際、東京の後援会のみなさんがツアーを組んで応援に来てくださいました。もちろん、吉住さんもご一緒でした。私の祖母を客席で見つけ、「さつきさんのおばあさまは美人で品がありますねえ～」と、女性への賛辞の言葉もお忘れになりません。翌日は貸し切りバスで小浜や京都を巡る小旅行。そのバスが宮津を通った時のことです。車中のマイクで吉住さんが、「宮津音頭を歌います！」と歌い始めました。すると、途中からなぜか「デカンショ節」に変わり、「おかしいなあ……もう一度！」と、繰り返されますが、またまた「デカンショ節」になって、みんなに大うけ！　そんな楽しいハプニングも良い思い出です。

◆スイスにて

イタリア・ミラノに留学していた九二年夏、吉住さんが奥様とご一緒に、ご子息が当時滞在されていたスイス・ジュネーブにいらっしゃいました。私もスイスのお宅にお招きをいただきました。文化庁在外派遣研修生として2年間のミラノ生活を送っていた私は、当時、食生活や環境の変化に対応しきれず、少し体調を崩して心身ともに弱っていたため、吉住さんとの再会はとても嬉しく、ご子息ご夫妻にもたいへん温かく迎えていただき、とっても癒されました。

夕方、窓からモンブランの山並みが見える素晴らしいレストランに連れて行ってくださり、夕陽に輝く山々を見ながらみなさんとフランス料理をいただきました。ひと時、ご一家との楽しい時間を過ごさせていただいたおかげで、私はすっかり元気を取り戻し、ミラノでの勉強に戻ることができました。

◆最後のコンサート、そしてお別れ

この数年は体の節々が痛くてお辛い毎日を過ごされていたご様子でした。そんな中でも、都内や近郊での私のコンサートには欠かさずお見えになり、いつもの笑顔で応援してくださいました。

昨年一二月、東京の紀尾井ホールでリサイタルを行った際には、最前列で聴いてくださり、私はただただ感謝の気持ちで演奏しました。約二時間の公演中、椅子に座り続けるのもご苦労されたと思います。最初から最後まで微動だにせず、じっくりと聴いていただけたことは、とても感動的でした。アンコールで歌った「私のいとしいお父さん」(プッチーニのオペラ「ジャンニ・スキッキ」)は、わたしのなかでは吉住さんお一人に向けての演奏でした。

このリサイタルが最後のコンサートとなってしまいました。私は舞台で、吉住さんは客席最前列真ん中で……。会話の機会はありませんでしたが、吉住さんのお気持ちは私にしっかり届いていましたし、私の感謝の心もお届けできたと思います。

吉住さん、どうか私の歌声をずっと覚えておいてくださいね。そして応援していてくださいね。これからも客席のどこかに吉住さんがいらっしゃると思いながら演奏を続けてまいります。どうぞ安らかにおやすみくださいませ。

木村つた江さん追悼

池田　忍（山南町）

この夏の七月二〇日、木村つた江さんの訃報が、ご家族から伝えられました。九十四歳でした。「葬儀は家族葬で行いますので」ということでしたが、生前、創作集の出版を通してご縁が深かった方なので、調布市の斎場で行われた通夜に参列させていただきました。花いっぱいに飾られた祭壇に木村さんは人なつっこい笑顔を浮かべて「とうとう、ここまで来ましたよ」と、いつもの調子で話し掛けられているようでした。会場には「村祭り」「茶摘み」「浜辺の歌」などの童謡が児童合唱団の歌声で流れ、いかにも木村さんらしい郷愁の雰囲気を醸し出していました。

＃

木村つた江さんは、大正五年八月、丹波市市島町（旧鴨庄村）岩戸に二男五女の三番目に生まれました。尋常高等小学校を卒業した年の秋、恩師の妹さんの嫁ぎ先である東京・本郷の酒店に奉公を勧められ、父の強い反対を押し切って、憧れの上京を果たされました。時に昭和六年、不況の風が吹き荒ぶ東京でしたが、持ち前の旺盛な好奇心と仕事好きな十六歳の少女は、田舎娘へのいじめにもめげず、困難を乗り越えていきます。

昭和十一年の雪の朝、日本中を震撼させた二・二六事件に、勤め先の銀座のすぐ側で目撃して、「こわい時代になってきた」と予感します。

昭和十六年、二十五歳で結婚し、翌年長女を出産されましたが、太平洋戦争開戦の年でもあり、戦局は年ごとに険悪になっていきました。強制疎開による立退き、ご主人の召集、大空襲と続き、遂には丹波の実家へ二人の幼女を連れて疎開を余儀なくされました。

戦後、ご主人は無事に復員され、建築製材業を皮切りに次々に事業を興されましたが、経済の混乱時ゆえに成果を得られず、失意と貧窮に苛まれました。その間にあっても、下駄店や縫製の下請けで家計を支え、東京オリンピック開催の年にご主人が始めた清掃会社

を軌道に乗せて、最後を成功裡に飾ることになりました。このあたりの夫婦苦難の生活史は、木村さんの諸作品に繰り返し描かれるところです。

＃

昭和五十八年にご主人を亡くされたあと、それまでに積り積っていた体験と才能を爆発されるように、執筆活動に励まれます。そして、最初の著作集『青竹のように』（平成3年10月刊）を皮切りに『竹の秋』（平成8年8月刊）、『竹の花の咲くまで』（平成15年7月）、『続・竹の花の咲くまで』（平成20年8月）と竹シリーズの著作を発表されました。

「竹」は、まさに木村さんの性格と生き方そのままを表わしています。俗に「竹を割ったような性格」と言われるようにスカッとして飾らないお人柄でした。親元やご自分の家庭や生き様を赤裸々に描き、世間体を構うことなく小説に仕上げてしまう作家魂を持ち合わせた人でした。

題名にある「竹の花」は、百年に一度しか咲かない珍しい花と言われ、花を咲かせて枯れる運命にあります。その「竹」の生涯に共感を寄せつつ同じ題名の続編までを出版し、その次はずばり『竹の花の咲く頃』になると、最後まで創作意欲を燃やしておられました。

＃

木村さんは、一男二女のお子さんを持たれ、二人の娘さんから四人のお孫さんが生まれ、そのお孫さんから十人のお曾孫さんを得られました。お正月に娘さんの家で開く新年会に、その曾孫さんたちにお年玉を手渡す時の名前が覚えられないと笑っておられました。

この四代続く大家族が、木村さんの人生の最高の成果でありました。四冊の著作も置かれた祭壇で、十人の曾孫さんがご焼香の手を合わせている光景は、にこやかな遺影と共に長寿の人生の満足感を漂わすものでした。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

さらば、環境記者会

足立　静雄（青垣町在住）

環境省が発足してから今年で三五年になるが、現役記者会も同様に三五年になる。私は環境記者会発足当初からのメンバーであった。環境省は、この間大きく変わってきたが、私はその環境省の移り変わりをきめ細かく取材してきた。

環境問題も、当初は四日市公害問題などを取り上げてきたが、現在は二〇二〇年には二台に一台が電気自動車になり、ガソリン自動車は撤退することになる。

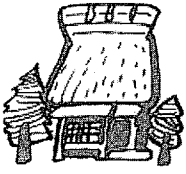
先日、私は環境記者会を引退すると発表したところ、私を天まで持ち上げるような寄せ書きを環境省幹部からたくさん頂いた。その一例を上げると、

「存在感、人柄など追随を許さないところがあり、記者会見での実りある発言、水向けのうまい質問、明るい記者クラブづくりなど、それを伝統にしてきた環境記者会発足当初からのメンバーとして活躍、全体のムードメーカーとして、まさに余人をもって替えがたい存在であった」という。

三五年の長きにわたり、車も変わり、行政の位置付けも変わった。暑気払いや忘年会、寒い中で飲んだ花見酒など、仕事と直接関係のない話もした。

「環境記者会がある二六階に上がる楽しみが減った。環境庁に入庁した時から覚えている。いつも穏やかでやさしく付き合ってくれ、新人でも昔からの付き合いのように話してくれた。大江山モナカをいつも持って環境記者会にいた」という。

モジャーとした頭、「シーちゃん」と声をかけられると、花見に宴会、仕事などの話、いつも楽しく明るい存在だった。二六階の専門紙記者会にいつもいた。あいさつも何もないクシャクシャの笑顔、一度見たら忘れられない顔。環境省の組織や人事をじっくりとみてきた。



老人のたわごと

大野善三（柏原町）

私が上京したのは、昭和二八（一九五三）年の夏でした。五七年前のことです。二二歳でした。友達の小田富士夫君を頼り、就職の宛があって東京へ向かいました。

大阪駅の周りは戦後処理の最中で薄汚れており、今のように洗練された明るさはありませんでした。未だ新幹線は眼に見えるような工事が始まっておらず、上京するには夜行列車が普通で、大阪駅を夜中の一一時頃に出発したように思います。プラットフォームで汽車待ちの行列の中にいると、列車が入ってくるや行列はあっという間に崩れ、われ先にと乗車口に雪崩れ込む風景に圧倒されました。そのエネルギーと無軌道ぶりに驚いたものです。「何のために並んだのだろうか？」と息を切らしながら疑問に思いましたが、大阪駅ではその後も同じような経験をしました。随分後になりますが、高速道路の支流で本流に入ろうと待っていても、本流の車は一向に入れようと開けてくれません。いらいらしていたタクシーの運転手さんが、「大阪はこれでんねん。一歩も譲る気がおまへんねん」と言ったのを思い出します。世の中には社会道徳が大切だと聞いていますが、実態は「道徳」半分、「競争」半分といったところでしょう。田舎では知りえなかった都会の一面を体験する第一歩でした。

すでに昭和二三（一九四八）年に、第二次大戦を開戦させた軍人などを裁く東京裁判（極東国際軍事裁判）は結審していました。あの裁判は、戦勝国は総て正しくて、戦敗国が総て正しくないと断定したようで、喧嘩両成敗の立場からすると、果たして「裁判」といえるのだろうかと、後々まで疑問に思っています。米軍が原爆を投下したのを弁護人が持ち出すと、「それは却下します」と言われました。「勝てば官軍、負くれば賊軍」の諺言が今も生きているようで、割り切れない思いがします。裁判を指令したダグラス・マッカーサー元帥は、後刻、米国上院で、「あの戦争は、日本の自衛のためにやったものです」と証言したのを、後

で知りました。戦後六〇年間の倫理観は、あの東京裁判が裏付けになっていたのではないかと思うことがあります。つまり、戦後の倫理観には自虐史観が底辺にあるように感じるのです。

講和条約のあり方も激しく議論されました。ソ連など社会主義の国々を入れる全面講和か、米国中心の単独講和かの議論が華やかでしたが、結局、米国中心の講和条約を結びました。当時は全面講和が当然だと思ったのですが、ドイツのように、半分をソ連社会主義共和国、半分を自由主義陣営に分けるより、単独講和の方が自由な日々が送れて良かったのではないかと、今は思っています。終戦直後直ぐに起こった朝鮮戦争も終結していました。冷戦が始まって、国内のイデオロギー論争が華やかに進行しており、様々に変わる歴史の渦の中にいるようで、過激な時代を過ごしたと言ってよいでしょう。

大阪を発った私は、寝台車に乗るお金もなく、三等車の板の背凭れでうたた寝をして夜を過ごしました。なぜか列車は満員で、狭い通りのアイルにも人が数珠繋ぎで、新聞紙を敷いて寝ていました。大阪・東京間を走る上下の行き違いの都合で、深夜にあちこちの駅で止まっていました。それでも名古屋も浜松も静岡も知らなかったのは、ぐっすり眠っていたせいでしょう。

朝の光に起こされて眠い眼を擦りながら見たのは、「新橋」という看板でした。先ず吃驚したのは人の多さでした。真夏の朝日に輝く開襟シャツのつながりは、まるでプラットフォームから零れ落ちそうでした。「人が多いとは聞いていたが、これほどだとは思わなかった。これが東京か！」というのが第一印象でした。私が就職した「鉄道授産会」という名前は立派に聞こえますが、実態は御徒町のガード下にある暗い事務所でした。東京、上野、新橋などの各駅で新聞や週刊誌などを売る店の元締めでした。

その頃は、大都会に憧れ、東京に行けば何とかなるだろうという無計画そのものでした。まるで、森田公一作曲、阿久　悠作詞の「青春時代」の後半そっくりの状態でした。

「……青春時代が夢なんて後からほのぼの思うもの
青春時代の真ん中は道に迷うているばかり」

柏原高校では、各大学に合格すると、校舎の一角に

名前が張り出されます。特に難しいとされている一流の国立大学に受かると、その名は燦然と輝いていました。私は一度もその栄誉に浴せずに卒業しました。と言って、海外を放浪する勇気も財源もなく、東京にもぐりこむという始末でした。

その後、アルバイトをしながら早稲田大学を卒業しました。四年間の学生生活で、一年間くらいしか出席しない超劣等生でした。柏原高校を出て一〇年経っていました。昭和三五（一九六〇）年四月一日にＮＨＫの入局式で名前を呼ばれたのは、番組制作希望者のトップでした。「もしかしたら、トップ合格か？」と一瞬勘ぐったのですが、全員の名前を読み終わった後、「みぎ総代〇〇君」と別の人の名前が呼ばれました。同期の中で、一番歳を取っていたということです。

戦前、私が小学生の頃、講談社の絵本に「大東京」という版がありました。トップが二重橋を絵にした皇居の情景でしたが、東京駅の赤レンガ、丸ビルの八階建てビルなどがページを埋めていました。一度は行って見たい憧れの的でした。その夢を頭に描いて十数年後に上京したのです。上野駅の地下にはまだ、戦災で親を失った浮浪児たちがたむろしていました。電車には、白い着物を着た「傷痍軍人」がアコーディオンを鳴らして軍歌を歌い、乗客に志のお金をせびるように客席を回っていました。未だ戦後の荒地の風景が残っていたのです。

ときどき想いだすのは、終戦直後、柏原劇場で観たアメリカの喜劇映画です。アボット・コステロの喜劇コンビが社会風刺のコメディーを演じていました。そのうちの一人が、おもちゃを柱にぶつけ、すぐ壊れるのを観て、「これは日本製か？」と言っていたのを想いだします。当時日本製は「安かろう悪かろう」の代表だったらしく、全く信用されていませんでした。それが今では、日本製は世界的に高級品を代表しています。六〇年も経つと、努力さえしていれば価値は逆転するようです。

社会主義運動が盛んになり、労働組合が経済問題だけではなく政治批判に力を入れていました。「60年安保」の活動が世の中を騒然とさせ、ブントを中心の学生運動がピークに達していました。その後、世間はアメリカ文化の影響が大きく、大量生産大量消費を基本

にした消費生活が生活の基本でした。日本人のパン好きの原因は、終戦後のアメリカ軍の占領政策にあったように思います。戦後復興の食糧難の時期に、アメリカから大量の小麦が輸入され、それを原料にしたコッペパンを給食に出していました。私は給食というものを知りませんが、生活格差を学校に持ち込まないことをモットーに、小学校に給食制度が敷かれました。

丁度その頃、アメリカ国内では小麦が余っていて、処理に困っていたのだと、後刻聞きました。ある人がアメリカに一年間留学しました。その彼が講演をするよう、ある主婦の団体に呼ばれ、その席で、「日本ではお米を食べると太ると言うので、パン食がはやっています」と言うと、それを聞いていた主婦たちは一斉にげらげら笑いだし、「私たちはパンは太るから、お米を食べるように努力しています」と言いました。洋の東西で丸反対の思考が行われた例の一つです。いずれにしても、人の好みまで政策が決めることがあるのです。

戦後六〇年以上経ると、社会全体の価値観も、人々の考え方も少しずつ変化してきます。

私は戦前の小学生でした。その頃の教科書に、「大阪は煙の都」という表現がありました。大阪は工業化が進み、生産力が高く賛美すべき大都会という位置づけでした。しかし、「煙の都」は戦後「公害の都」に変わりました。工業の中心が軽量短小に変化しました。平成二〇年発行の国民健康保険のグラフをみると、農林水産業、自営業の第一次産業に携わる保健加入者が、昭和四〇（一九六五）年には六七・五％でしたが、平成一八（二〇〇六）年には二一・七％と三分の一に減り、無職の人が一九六五年には六・六％でしたが、二〇〇六年には五四・八％に激増しています。わずか四〇年余りの間に、無職者が九倍に増えているのです。非正規社員の失業も影響していますが、高齢社会が現実のものとなっていることを表しています。それが現在です。

最近は、大都会より地方重視が叫ばれています。中央集権より地方分権の方が大事だと、政策の基本方針が方向転換されようとしています。日本の基本はやはり田舎です。食生活が一時西欧化して動物蛋白の取りすぎと言われました。もともと農耕文化で育ってい

るのに、肉食をありがたがり、太ってもいないのに糖尿病になるという、風土に合わない生活を積み重ねた結果が、反省されています。都会に多かった糖尿病患者が今は田舎の方が多いくらいです。東京では駐車が難しいので車は気軽に使えませんが、田舎は歩いても五分で行ける場所まで車を使っています。今から六〇年前は結核が国民病でした。現在は糖尿病が国民病になっています。和辻哲郎著の『風土』に、「西洋には雑草がない」という文章がありますが、日本は雑草が旺盛です。ヨーロッパでは冬に雨が多く、洪水は雪解け時期に盛んに起こります。日本では梅雨があり、夏に雨が沛然と降ります。西欧文化を参考にするのは結構ですが、あまり真似するのは賢明ではなさそうです。

私は旧制柏原中学校に入学し、学制改革で途中、柏原高校生になりました。八月一五日の終戦日をもって、学校の雰囲気が急変した経験があります。戦争に負けて世の中の価値が逆転したのですから当然の行為だったのです。戦争中の中学校の先生は、生徒の魂を鍛え直すと言って横っ面を張り飛ばしていたのですが、終戦と同時に借りてきた猫のようにおとなしい先生に豹変しました。その後は、「民主主義」を金科玉条に唱える毎日でした。生徒が学期末試験をボイコットして、全校ストライキをすることもありました。以後、民主主義推進のもとに、「人権擁護」「人権向上」が価値の基本になりました。戦時中の全体主義思想の反動で、個人主義が主流になりました。今は、「権利の主張」が優先されて、「義務の履行」が伴っていなかったことを反省する毎日です。民主主義の殻を被った利己主義が横行しているように思います。互助精神を説くと、反動扱いされるほど、連帯感が無視されました。その結果、個人、個人が孤立して不幸な結果になっているように思います。田舎は隣近所の口がうるさいからと、田舎を去り、都会は「隣は何をする人ぞ」と繋がりの薄いのに憧れ、都会生活に入る人が、私も含めて多かったように思います。しかし、向こう三軒両隣のない生活は、「やっぱり、寂しい」と感じるこのごろです。

ワシントンのホスピス活動を取材したとき、ホスピス長に「市民の一部が必要だと思ったときには、行政機関に陳情に行くことが多いと思いますが、如何ですか？」と質問したところ、即座に、「それは無責任で

す」と答えました。「市民がやってみて、それを行政機関が見ていて、これなら市民全体の問題にしようと決めるのが常識です」と、民主主義の基本を解説してくれました。そんな経験から、日本の民主主義には個人の責任感覚が薄いことを感じることがしばしばあります。

傘寿を迎えるようになると歳のせいですか、将来を心配して過去を想いだします。自分の責任で自分の国を守るのが基本ではないでしょうか。「安全保障条約」を頼りにし、経費を支払って日本の安全をアメリカに任して置いていいものでしょうか。アメリカ軍が背景にあるからこそ、アジアの抑止力は保たれていることは確かのようです。しかし、安全のための出費は、何時まで続けることができるのでしょうか。孫が被害にあうことにならなければ良いのですが。勿論、安保条約の改定を行った「60年安保」の頃とは、世界の環境がかなり変わってきています。戦前は、柏原から京都まで遠距離電話を申し込むと、繋がるのに半日待たなければなりませんでした。いまは、フランスの田舎でお世話になったお礼を、携帯電話でパリに向けて話すのが常識です。英会話の苦手な私も、時々アメリカの友達にパソコンで筆談をしますが、そんなことは日常茶飯事になっています。

しかし、日本国を守る基本的な姿勢はこのままでは済まないのではないかと思っています。先ほどのパリの青年も、「今年の冬は徴兵義務で、10ヶ月間軍隊に行かねばなりません」と言っていました。サバティカルでドイツに帰国をしていた上智大学名誉教授のアルフォンス・デーケン先生は、ドイツ滞在中の体験を話してくれました。「兄と姉の子供たちが、集まってわいわい話しているのを聞いていると、徴兵予備軍生活をどう過ごすか、ドイツの防衛はどうあるべきか、喧々諤々の議論をしていました」と、報告していました。ドイツでは、ボランティア活動をしていると、予備軍生活は免除されるようです。日本で、安全保障の議論で若者が激しく渡り合う情景はあるのでしょうか。あるかも知れませんが、余り目立たないようです。

「この国をどうするか？」という最も大切なことに眼を逸らしていて済むのでしょうか。社会の中心から遠のいた、八〇歳を迎える老人のたわごとです。

折々の記(7)

井本義一（柏原町）

○旧職場の一年先輩からいただいた今年の年賀状に「百年に一度の大不況とやら小生にとっては、二人の息子（サラリーマン）の行く末が一番心配の種です」とあった。長年数多く賀状のやりとりをしているが、このような添え書きに接したのは初めてで、あらためて昨秋から今日に至るスピード面も含む未曾有の経済・労働面の大崩壊の過酷さを思った。また同じ親として、同様に月給取りの息子と娘の前途の平安を祈った。

今月3日、同期入社の友人からの近況報告「世の中底なしの不況報道の毎日です、……」のハガキを受けた。これだけ連日、これでもか、これでもかと世上に落ち込み感と閉塞感が充満すると、選挙は一体いつ行われるのであろうか？　選挙で太郎氏と一郎氏のいずれが担当するにせよ、我が国の民主主義はどこまで進化するであろうか？　わが国の政治と、国民の生活も向上方向にチェンジ出来るのであろうか？（先月10日、ボランティア初日作業後の放談茶話会で、わたしはどうしても気になることを口に出して、「正月そうそう縁起でもない」と、みなさんから総スカン食ったこと。）それは税収の激減と資金運用至難の両面からわれわれの年金が減らされるのではないか？　と言ったのだ。よく見極めて早く投票したい！　とイライラ感も募ってくるのはわたし一人だけだろうか？

今日、初夏を思わせるバレンタインデー。ボランティアで元テニスコート跡地の硬い地べたの開墾（里芋とさつま芋の畑地つくり）作業で、さらに曲がった腰をいたわりながら、汗みどろで帰宅。妻からチョコレートをもらった。毎年くりかえしの行事だが、普通にかつ平安の中で働けることのありがたさと、併せて彼女に感謝した。（21・2・14日）

○新年に入って三件の出会い。故郷の友関連。2月8日付丹波新聞に、下小倉俳句同好会会員で、幼稚園からの同窓生和田勲君の「年賀状手書きに籠る生気かな」が掲出されていた。長年、彼とは年賀状を交換し、帰

柏すれば旧交を温め語り合う親友の一人だ。彼のように手書き絵による素晴らしい年賀状に及ぶべくもないが、わたしはありきたりの印刷年賀文言下の空欄に、手書きの添え書きを必記している。本誌40号「折々の記(6)」21年1月10日付拙記「一ねばり強く攻めの姿勢を保ちます。……」も、彼が年頭に読んでくれて、上掲の一句をものしたのではないかと想像し、我田引水でなく、生き方を共有する友と故郷との嬉しい出会いだった。

町内会の偉人関連。作2月28日、待っていたNHKドラマスペシャル「白洲次郎」第1回（2回は3月7日、3回目は9月）が始まった。このような人こそ今の我が国政界が求めている人だと—本場の英語に強いのも含めて—強く思った。本誌39号の拙記「折々の記(5)」19年11月3日付記述との出会いであった。敗戦後、占領軍から「従順ならざる唯一の日本人」言われた人。来る2回、3回の同氏のプリンシプル＝生き様を見て、自分なりに少しでも学びたいと思う。

本誌と②上高子氏の『丹波人と私』（丹波新聞社刊行）関連。雑誌「ラジオ深夜便」3月号をマルエツの雑誌売り場で求めた。読者が選ぶ19年4月～20年3月まで年間「私の好きな一句」ベスト10の第1位に芭蕉の「さまざまの事おもひ出す桜かな」が掲げられていた。これも39号・拙記「折々の記(5)」19年4月2日付の引用句。上記②の172ページに引用句は一茶の「雪とけて村一ぱいの子ども—わたしがラジオで聞いたのは童—哉」で第8位に。加えて第7位には郷里の俳人細見綾子氏の「ふだん着でふだんの心桃の花」がランクされていて、重ねての心地よい出会いに思わずニンマリした日であった。

（21・3・1日）

○「黄疸がでています。糖尿病です」愛猫ケイスケへのかかりつけの先生からの診断で、連れて行ったわれわれは大ショックを受けた。昨朝いつもの排尿砂が黄色になっているのを見てびっくりした。その後も従前の白色にもどっていない。振り返ると、2日くらい前まで元気に飲んでいた水とえさの食べる量が減っていた。やさしいグリーンの目とやわらかいぬいぐるみのような毛の彼との絆と、かかわりに盲愛、溺愛でえさをやりすぎたのと猛省しきり。抱きしめてやると気持ちよさそうにしている（時もあり）のか、だるさ、痛

みをこらえているのかわからない。挙句のはてに「言ってくれないのでわからない」と思う自分自身に嫌悪した。

われわれでインシュリン注射を毎日打ってやれないし、打っても猫は効きめがむずかしいとのことで飲ませ薬を2種類。名医と言われている先生の総括は、「猫の糖尿病は死の宣告と同じです」。帰宅後、妻は彼を抱きしめて泣き出すし、突如やってきた将来起こるであろう我が家の絆の断絶の時を思い描いて更に落ち込んだ。

癒しつづけてくれて、暑さ、寒さをわれわれとともに健気に生き抜いてくれたね！　一日も長く元気でいてくれよ！　とことん面倒みるよ、ありがとう！

（21・4・4日）

○痛恨。10日19時32分、ケイスケ永眠。11年10カ月、彼の生涯、わが家に来て8年4カ月の絆であった。大好きな作家城山三郎氏が亡夫人を偲ばれた作品に『そうかもう君はいないのか』があるが、君をおまえ＝ケイスケに読み替えが許されるなら、「そうかもう綺麗好きで甘えん坊のおまえはいないのか」だ。くり返しいつのまにか思い出すわたし。ポッカリ心に穴が空いたような、ガクッと心が折れそうになるこの脱力感がつらい。終末期の痛みと苦しさを判ってやれなかったことが、悲しく切なく深い悔みと淋しさで胸がつまる思いで充満。

妻とわたしに共通のもうひとつの大切な存在がいた事実を、嫌と言うほど思い知らされた。おまえを中心とした動きとかかわりで、時には二人のいがみあった心を幾度も溶かし癒してくれたね。ベランダへ出ると駆け上がってきてダッコしてやり、前足を手すりにかけて庭の花木、やってくる鳥たち、道を行く人や犬たちを毎日のように眺めたね。排便器内の砂を足裏にくっつけて、各室内床上にポロポロとまき散らしていたおまえ、そのあとを日がな一日掃除してまわることもなくなったよ。

いつも15時過ぎに掃除機をかけ出すと、昼寝をしていたおまえは、五月蠅（うるさ）そうにのそのそと2階へ上がっていた姿も見られなくなったよ。いつのまにか音をたてずに足もとにすり寄ってくれているのに、迂闊で馬鹿な飼い主に蹴っ飛ばされたり、尻尾や足を踏まれて

ギャオーと考えられないような鳴き声をあげさせたうえ、「ゴメン、ゴメン」の大声でまたまた吃驚させたね。今年も花吹雪も終われば毎年恒例の公道の隅で、4脚椅子におまえをダッコして好きな自動車を見ようね、との約束も叶えることが出来なかったね。ほんとにごめん！

いまもいつもどこかからわたしが毎日繰り返す生活行動を見つめてくれているような気がする。あのつぶらなグリーンカラーのまんまるい目で。それにしてもわたしのシンプルな健康生活キーワード項目の削除第一号が、愛猫ケイスケであったことの残念無念さと悲しさ寂しさは深い。ともすれば落ち込む妻に、元気に前向きに生き抜くことがケイスケの命を受け継ぐこと、また彼が最も喜んでくれることだと話したが自分自身にも言い聞かせたのだ。今後思い出すたびに。

（21・4・12日）

○わたしの慢性的ストレスは、読みたい本がなかなか読み進んでいないことと、6年位前からだろうか、外来語の大量氾濫についていけないことだ。たとえば、ここ2～3年前からだろうか？　よく見るNHKテレビに「NHKオンデマンド」―①、「NHKアーカイブ」―②（①は注文対応、受注対応、②は保存記録、記録保存館）など、テレビ、新聞紙上など視聴界における外来語がごくあたりまえのように日本語に代わって使われており、日本語さえ満足に使いきれないわたしには、外来語の意味が解らないことは取り残されたように不安―ストレスになるのだ。

昨年4月来、単語カード2リングに179（96と83）語を書き写して、走行中の電車の中や車、スーパー内の椅子で妻の買い物の待ち時間に、リュックサックに入れた単語カードをくって和訳を覚えてストレス解消に努めている。国立国語研究所の「外来語の言い換え」に依っているが、前掲2語の他わたしの理解範囲内でのその他メデイア関連語は、インタラクテイブ（双方向の・双方向的）、オピニオンリーダー（世論先導者）、コンテンツ（情報内容・番組）、コラボレーション（共同制作）、ログイン（接続開始）、コミュニケ（共同声明）、ハイブリット（複合型）、リリース（発表）、コンセプト（基本概念）、マルチメディア（複合媒体）、フィルタリング（選別、情報選別）、プレゼンテーション（企

画提示・提案説明）、デジタルデバイド（情報格差）、アセスメント（査定、影響評価）など。また頭脳中の、海馬刺激と記憶遊びとして、五つの外来語を組み合わせている。「動機付け（モチベーション）高く、積極的（ポジティブ）で、独自性（アイデンティティ）を持ち、潜在能力（ポテンシャル）に富み、存在感（プレゼンス）あり」など。

カードをほぼ毎日くりだして1年3か月、全語をなんとか覚えたが、逆の和語英訳がスラッと出てこず困っている。特に2つ意味がある①所有権②主体性（オーナーシップ）、①公開市場操作②作戦行動（オペレーション）、①臓器提供者②資金提供国（ドナー）、①育児放棄②無視（ネグレクト）、①生涯過程②循環（ライフサイクル）、①支援②控え（バックアップ）、①接続②交通の便（アクセス）、①市場占有率②分かち合い・共有（シエア）、①債務支払い猶予②一時停止（モラトリアム）、①債務不履行②初期設定（デフォルト）、①資産構成②作品集（ポートフォリオ）などだ。最近の小さな喜びは、このカードをくりだしてから人の名前忘れが少なくなったように思うことだ。

（21・7・27日）

○世上数多の「ながら族」がおられるようだが、わたしも狭い生活行動範囲のなかで、貧欲に「○○しながら××する」ことを目指している。残され与えられた時間がわからないなかで、五感と身体を使い動かすことは日々の生活を活性化することにつながり、このことがまだ出来るのだという緊張感、充実感、達成感を味わっており、精神衛生上もよい。特にかむ力、のみこむ力＝口腔内運動は、これからの老いの旅路に軽視できないので、参考指導記述等を自分に取り入れて実践している。

就寝前、トランジスタラジオでＮＨＫ「ラジオ深夜便」を耳元で小音量につけっぱなしにして、アンカー諸氏の言葉どおり、ほとんど寝ながら気づいた時に聞いている現状だ。

ただ4時からのニュース、心の時代の終了（終わり次第ウォーキングに出発）までは、聞きながら寝床の上で起き抜けの準備体操以下をこなしている。同時並行でしている口腔内運動は口を大きく上下にあけて、できるだけ早く「たた……」（5秒間に24回以上言え

ること)「かかか……」(5秒間に22回以上言えること)を声をかすかに出して、両顎と舌の運動ができるのと唾液が出てきて口中の渇きを止めてくれる。もうひとつは上下の歯をしっかり噛みしめ、口もしっかり閉めて、鼻で息をしながら、左右の頬を片方ずつ膨らませるのから口内中歯茎の上下も全て万遍なく膨らませ続ける。最低１００回は連続して。近時、歯茎の一部所が痛むことも何かの拍子にあるものだが、これをすると、いつのまにか治まってくれるのが嬉しい。またよくわからないが、舌の運動もできているようだ。眠る前にも必ず実行しているが、すぐに墜ちるように眠りに入れるのが嬉しい。

朝イチのウォーキング時、トイレ時、乗車駅への歩行時、乗車時間中、クラブでのベルトバイブレーターの使用中、同サウナ室内時、テレビを見たり、活字を追っている時など、その気があれば口周辺、内外の筋肉等は休んでいるのだから、動かしてあげればいいと思っている。別の選択肢で今、最も重視しているのは両手に分厚い手袋をはめて抵抗を強めて、両手指先をグーパー、グーパー（パーで伸ばした時に力を入れる）を繰り返して末梢神経の活性化を図っている。これも歩行時など両手が空いていれば、その気があればできる。例として基本動作（以下腰、臀部にベルトバイブレーターをあて、左右に大きく腹をひねる運動・10分間）をしながら、前記口腔内運動を、３番目に頭の方で数を数えるか、友人に出状する手紙の組み立てを考える。不器用なわたしには4項目以上のことは出来ないが、なんとか増やしたいとの思いを切らさないでおきたい。今日信奉するイチローが、９年連続２００安打の大リーグ新記録を１０８年ぶりに達成した嬉しい日（現地で13日）。

（21・9・14日）

○馬齢を重ねる毎日で、これまで気に留めなかったことが何かのきっかけで「ああ、そういうことだったのか」と気づいて、それが絶えず心中にこびりついていて、ストレスになるので生活行動に実践（身近な、ささやかなことでも勇気を出して声をかけることからスタート、他人がなんと考えようとかまわない）することにした。

それは「黙過」（知らないふりをして見のがすこと）という言葉を聞いたのがきっかけだ。最初「目下――もっ

か」しか浮かばなかったが、辞書を引いて理解した。わたしにとって諸先達の人生＝考え方の生きた教科書としている「ラジオ深夜便こころの時代」で、先月31日4時05分ごろから放送された。ロシア文学者であり東京外国語大学学長の亀山郁夫氏「棺（ひつぎ）から蘇る～ドストエフスキーと現代」で、すべての人間の心中に暗くひそむ残忍悪性の話から転化して、前記の「黙過」が現代社会に満ち溢れていることが問題だと指摘されたと、わたしは聴取理解した。（例のごとく寝起きの頭で聞いたので１００％正確でないかもしれない。）

いじめに象徴される冷たく思いやりと連帯性を欠く厳しい現代社会は、弱者に対するあまりにも多い「黙過」にも起因していると考えるが間違いだろうか。今月に入って、スポーツクラブの12歳下の知人（5年前に入会してこられ挨拶と日常会話をしているが、今現在名前も知らない）で、片手杖で足が弱い身障者の方がおられるが、大浴場の中では杖は使えず、みんなで入るサウナ（その方には入口に段差あるので、出入りにもひと苦労）から出て、すべりやすいタイル上を歩いて、かけ湯場までつかまる壁もなく、年々筋力が低下しているのか極めて危険な状態だ。わたしは彼と同時にサウナ室を出て、左の2の腕につかまるように言って、彼の歩調に合わせて、かけ湯場までサポートすることにした。正直、わたしは先月まで何年も彼の横を黙過してスーと歩いていたのだ。行動を起こした上は責任が伴うことを念頭に慎重に行動したい。今日、行政刷新会議の「事業仕分け」最終日。（21・11・27日）○今年も元旦から毎日、曲がろうとする腰との闘いの中で、4月、わが家を襲ったつらく悲しい出来事、愛猫ケイスケとの別れが、わたしには時折トラウマ＝心の傷がうずく。日一日、みるみるやせ細り命が切れる前に前足2本で床板を掻きながら、われわれ二人を呼んだ最後の鳴き声が耳にこびりついて離れないのだ。その声は自分に都合よく、可愛がり面倒見てくれてありがとうとの挨拶ととるか、いやもっと長く生きたかったのにとの恨みの意思表示ととるか、わたしは後者だ。テレビ画面などに猫が出てくると、わがケイスケが真夏日の早朝、2階ベランダの戸袋に飛んできた蝉狩りをして、それをくわえて1階のわれわれに

得意げ見せてくれた雄姿を思い出してつらいので、画面を変えている。

たまたま2月に読み返し終えた「吾輩は猫である」の終末は、主人公の猫が水をはった瓶の中に落ち込みもがき苦しんだ末、瓶の中から出られないことを悟り、自然の力に任せて、抵抗しないでありがたい、ありがたいと言って死を迎える描写だ。漱石の人生の終末観というか死生観は今も新鮮だ。新しい年を前にして、われわれの老いの旅路は、苦しいのが当たり前で楽な道ではないのだ。いたわりあいとたすけあいと。19年3月、当会の吉住自由造さんからいただいた所感文の最後に好きな言葉だとして「男はタフでなければ生きていけない。優しさがなければ生きる資格がない」（レイモンド・チャンドラー、米国の作家の言葉）を引用されていた。この言葉の真の意味をわたしなりにかみしめた年でもあった。

今日「コンクリートから人へ」命を守る来年度予算案92・3兆円閣議決定の日。（21・12・25日）

○健康生活目標をわたしなりにシステム化した実践キーワードの大きな穴となった「愛猫ケイスケ」に代えて「読書」を掲げた。若い時から読書が少ない生活を送ってきたので、加齢とともに身近な友人たちとの会話時などで恥ずかしい思いをしてきた。愛しのケイスケが命に代えて贈り物してくれたと感謝している。

昨夏から11月にかけて北方健三『水滸伝』（19巻）、12月から今日まで重松清『十字架』、北方健三『三国志』（13巻）、東野圭吾『新参者』、いま村上春樹『1Q84』の②を読んでいる。③は、この4月に刊行予定とか。これからの予定は奥田英朗『オリンピックの身代金』ほか11冊を積んどく中で集中できることが嬉しい。

いま、わたしの読書事情で嬉しいことは、通勤インフラが進んで、日曜日を除く毎日利用している乗降駅のプラットフォームに設置されたガラス張りの待合室内での10分～25分の読書だ。寒い今は暖房が利いており、夏季は冷房下でありがたいこと。

今日、勤務時代の友人I君（横浜在住）と23年ぶりに藤沢で再会した日。（22・1・20日）

枯庭の紅椿と万両の紅実華やぐ送稿日（22・1・24日）

文芸欄へのお誘い

原谷洋美（山南町）

日経新聞土曜日の夕刊社会面に「耳を澄ましてあの歌この句」の連載コラムがある。

平成二十一年十一月二十八日は、俳人・横澤放川氏によって細見綾子「峠見ゆ十一月のむなしさに」が取り上げられていた。「……昭和二十一年の作品なのである。その故郷の丹波から但馬への国境の峠道を見遣った綾子のひそかな吐息だ。……綾子は〈ふだん着でふだんの心桃の花〉と境涯を淡々とよむことの出来る、天性といえる感性をもったひとだった。……」と本文に書き、「第二の人生の心の境目」と題があった。郷里の偉大な俳人を改めて誇らしく思い、切り抜き帖に挟み込んだものだった。

○たなびける雲にも似たる霧の海丹波の里に島の生れ（あ）ゆく

○山火事と見まごうばかり山の辺に幾筋も立つひのきの花粉　足立美都子（柏原）

○麻酔より覚醒遅き母の目に手術耐えたる涙の跡が

○携帯に遺されし亡き母の声再生ボタン押す勇気なく

○霜降りてあるじなき部屋森閑と母の温もり日日薄れゆく　井出恭子（市島）

○草いつぱい太陽いつぱい少年は蝉の抜け殻両手に集む

○手のひらにあふるる蝉の抜け殻を帽子に入れて夏を駆けゆく　原谷洋美（山南）

田捨女、野村泊月、西山白雲、上田三四二等々、多士済々の文化人を育んできた故郷丹波。その丹波を底力に、40号を数えて伝統を編みつつある『山ざる』にも、文芸欄を設けたいと思います。俳句・短歌・川柳・五行詩・詩など皆さまの投稿によって、丹波の香りの漲るページを作りましょう。

会費の振り込み用紙の通信欄でも、総会返信葉書の余白にでも、勿論、編集部宛でも大歓迎です。見本にほんの数首、会員の短歌を載せてみました。奮ってのご参加をよろしくお願い致します。

合唱指導を通してこころを培養する

指揮者

笹倉　強さん

♪

●インタビュアー
上　高子
岡田昌子

《プロフィール》1932年西脇市生まれ。柏原高校、武蔵野音大声学科卒業。城北高（東京・埼玉）教諭、武蔵野音大、東京学芸大非常勤講師を歴任。「ブルク・バッハ室内合唱団」主宰。新座市文化協会会長

上　五月に「新座第九」合唱団【メサイア演奏会】を開催されたばかりです。丹波出身の団員も多いとか。青垣町出身の足立志穂さんもアルト歌手として出場されたのですね。ところで、来る九月二三日には、原爆投下六五周年記念の【碑】の演奏会をされるそうですが。

笹倉　男声合唱のためのレクイエム【碑】は、今までに四〇代～六〇代の男性たちで二回演奏会を開催してきました。勤めていた二つの高校の卒業生たちです。六〇周年記念には未だ気持ちが熟していなかったのだけど、広島テレビ放送編、広島二中一年生の全滅の記録である「いしぶみ」を読んでね、私と同じ世代の人が亡くなっているわけですよ。【碑】はこの「いしぶみ」を読んで作詞作曲されたのではないかと思っているのだけれど、五年前に又やってみたいと思い立ちました。

八月に二回練習します。合唱をやってきて自然に行き着いた広島です。原水協から「協働を」と電話がかかってくるけど、私は私を貫いています。

岡田　大学で声楽を専攻されたそうですが、大昔の子どもの頃の丹波はラジオしかなかったなあと思うのですが、ご家庭の環境なんかが影響しておられるわけですか？

笹倉　いやいや、何もないですよ。中学と高校の音楽の授業ですよ。私はね、柏原中学の音楽教師の今中隆之先生と柏原高校の橋本喬雄先生に多大な影響を受けました。音楽が好きという趣味があっただけですが、すばらしい先生達に出会ったことで声楽の世界へ導かれました。

岡田　西脇のご出身でしたね？

笹倉　そう、比延です。加古川線に乗り、谷川駅で福知山線に乗り換え通いました。私の一学年下まで西脇からでも通えた。比延駅朝五時五六分の汽車で六年間通いました。西脇は商業の町で「儲かりまっか？」の世界だけど、柏原は城下町。西脇では育たないものが柏原にはあったように思います。小学校から西脇工業学校へ行けたのだけど、落とされたこともあり、柏原が好きだったので、尋常高等科から柏原中学（現柏原中・高校）へ行きましたね。

四〇年前頃、研修でモーツァルトの生誕地でもあるザルツブルグに一ヶ月間居たことがありますが、柏原のようなしっくりするムードがありました。勉強どころか川っ淵で昼寝して帰ってきたけれど、懐かしい柏原が出てきて、はからずも心の洗濯になったことを思い出します。柏原での六年間は友人やクラスメートとの良き思い出があり、橋本先生がおられて今の私があるように思えるのですよ。

上　そして音大へ進学されましたね。

笹倉　音大では学長から専門の声楽をよく学び、音楽の普及のために四年間勉強しろと言われました。男子校に二六年間勤め、合唱部をつくり一〇年目に全国大会で3位になりました。演奏家になるよりは「音楽は素晴らしい」ことを伝えていくことが使命だと思ってやってきました。声楽曲を中心にいつも指導しましたが、生活指導が上手いと言われたものでした。生徒が我が家に集まり練習し、終わったら、みんなで女房

「新座第九」合唱団（ノインテ・コーア）第18回演奏会（新座市民会館、2010年5月30日）

が焼いてくれたお好み焼きをつついてね。

上　楽しそうですね！　奥様も丹波の方でしたね？

笹倉　女房（郁子氏）も黒田庄の出身で柏原の女学校へ行きました。その後、神戸に移りましたが、郷友会にも参加していますよ。

岡田　それは存じませんでした。今年はお二人でいらしていただきたいですね。今までは主にどのような曲を教えてこられたのですか？

笹倉　中学・高校と習ってきたクラシックが教材です。子ども時代から大人の世界へ拡げて行けるような

大泉学園の喫茶店にて
（2010年7月28日）

曲を教えましたね。時代が目まぐるしく変わり、人の命を尊ばない風潮やＴＶ等で笑うことばかりで物事を大事にしない、お金をくれればそれでいいと思っているような世相に、家庭教育の基盤の大事さを痛感しました。そのためには母親がいかに大事かと考え、現役を退いてからお母さん達の指導を始めました。高校の卒業生たちにも継続して教えています。

岡田　集団をリードするのは大変なご苦労があると思うのですが……。

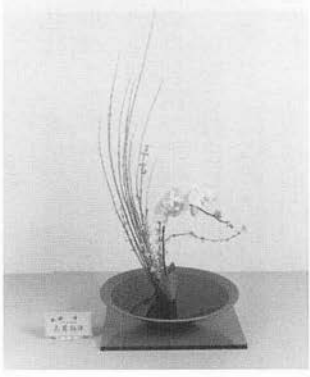
笹倉　「レベルが高い」と言われたり、指導を否定的に受け取り、去っていく人もいますね。一方、卒業生のなかには、社会的に立派な肩書きだった人もおられますが、引退後はおくびにも出さず、見識を持って参加して、合唱団をリードしてくれる人もいてありがたいです。そんな人に「笹倉先生は私達を培養しますね」といわれたことがあるのですよ。私は「人生に芸術を」と考えコーラスをやってきました。人には心のエネルギーの放出が必要で、そのためのコーラスであり、こころの種まきのためのコーラスだと考えているんですよ。

岡田　最後に、合唱は共に調和しながら一つの完成へと創造して行く楽しさがあると思うのですが、郷友会でも指導していただくことは可能ですか？

笹倉　場所さえあれば大丈夫ですよ。

上　我々世代がそうなのですが、そろそろ現役を退き、いかにソフトランディングしていくのかという難しい課題を抱えています。丹波育ちの皆で合唱するのは、こころのよりどころを強化することにも繋がり素晴らしいことではありませんか。ぜひ、よろしくお願いします。

上・岡田　長時間ありがとう御座いました。



いけばな（三痔柏洋）

私の職場

世間離れの夢の世界で

宇宙開発へのチャレンジ

足立忠司（春日町）

関東に就職して出てくる時、定年後は、丹波に戻ってのんびり何かやろうと思っていました。ただ、当時は、定年は遠い先のこととして、漠然とこのように田舎に帰りたいとイメージを描いていたように思われます。既に還暦を迎えて早一年がすぎておりますが、まだ、関東に留まっています。

今では、会社の代表取締役、元の会社の部長、宇宙分野の研究組合理事等々、肩書きが増えてしまい、忙しさも会社勤めの時より倍増しました。

仕事も、定年後は今までと違った分野をやりたいと考えていたのですが、これも相変わらず宇宙開発に留まっています。今、係わっております主なテーマは、小惑星探査ロボット、月面探査ロボット、超小型人工衛星です。

時々、こちらにいる明徳中学校の同級生と飲むのですが、還暦過ぎても未だにお前だけは現実離れした夢の世界にいる幸せな奴だと笑われています。

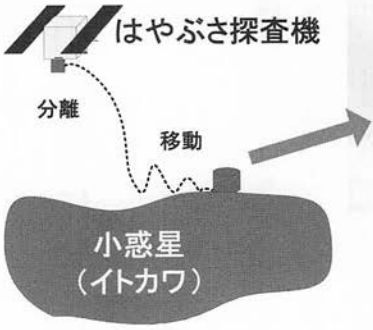
とは言いましても、宇宙開発が、私にとりましては現実の世界であり、私の仕事として、少し裏話を含めて主なものを紹介したいと思います。

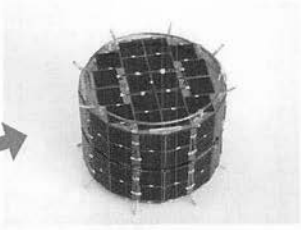
＃

私は、小惑星探査ロボット（ミネルバ）を手がけました。このロボットは、今年の六月、七年ぶりに満身創痍で地球に帰ってきて大きく報道されました小惑星探査機「はやぶさ」に搭載され、小惑星「いとかわ」探査に向かいました。このミネルバは、二〇〇五年に「いとかわ」に降り立ち、「いとかわ」表面の撮影や温度を測定し、地球にデータを送ってくる予定でした。しかし、実際は、予想外の出来ごとのためにミネルバは、「いとかわ」には降りられず、今も太陽の周りを回っています。

「はやぶさ」は日本独自の技術が使われていましたが、ミネルバでも小型、軽量、低価格を実現するため、宇宙ではまだ使用されたことがない新しい試みを多く取り

入れました。ミネルバが「はやぶさ」から放出される時、「はやぶさ」の一部を撮影し、正常に動作していることを証明してくれました。もし、世界で初めて小惑星に着陸できていれば、宇宙史に残る快挙になり、今頃は、テレビ、新聞をにぎわしていかかもしれません。ひょっとして私の名前も？





小惑星探査ロボット
ミネルバ

現在、事業仕分けで削られた「はやぶさ2」の予算が復活されましたので、ミネルバ2でリベンジするチャンスが出てきました。

月面探査ロボットに関しましては、内閣府で月面探査計画がまとめられている最中ですが、月面探査の方向が出されるものと期待しています。現在、月面での夜（約マイナス一七〇℃の極低温になる）を生き残れる月面探査ロボットを研究しております。日本は被爆国のため、アメリカ、ロシア、中国が使用する原子力で発電する方式ではなく、より難しい技術開発になりますが、原子力を使わない日本独自の越夜方式が実現できる目処が付きつつあります。

超小型人工衛星開発ですが、今まで宇宙開発は、大きな費用と、特殊技術が必要となるため、国家事業の世界との考えを打破するため、低価格で高性能な人工衛星を提供できる技術開発を大学と共同で実施しています。これにより、会社、学校、個人が自由に利用できる衛星が実現でき、世界レベルで作物の生育状況、災害予測、教育、通信等々、色々な分野で宇宙技術を活用が出来るようにすることを狙っております。

このように書いていると、私でも世間離れしているのを実感してきました。ここまでくれば、多少居直りを持って出来るだけ長く宇宙分野で、第二の人生を生きようかと思っている今日この頃です。田舎に帰るのは、その後で考えることにします。

（㈱セシアテクノ代表取締役）

山行記

山と温泉に魅せられて・Ⅳ

山本喜則（市島町）

前回の寄稿後、日本百名山には、十月の第一週と二週にそれぞれ北アルプスの常念岳と鹿島槍ヶ岳に登り、常念では快晴に恵まれ、眼前に穂高連峰と槍ヶ岳を仰ぎ、今でも瞼に残る絶景を満喫、続く鹿島槍では予想外の雪に見舞われるも、天候回復後の絶景に再度感嘆。年が変わってからは、足裏に原因不明の湿疹を患い、登山を止めていたが、ほぼ完治してから、七月に八が岳（赤岳）、八月初めに飯豊山に登り、下旬に本稿でレポートする北海道への登山行となった次第である。

#

今回は夏期休暇を利用して北海道の三山を一挙に制覇しようと計画したのだが、天気予報がはかばかしくないので、途中での予定変更を覚悟してのスタートとなった。初日は帯広空港よりレンタカーにて、最初の目標である大雪山系の中央に位置するトムラウシ山に向かう。登山のベース地として選んだトムラウシ温泉の国民宿舎「東大雪荘」に二泊の予定で、途中、幕別温泉、十勝川温泉、しみず温泉の三ヵ所に立ち寄り入浴し、昼食には地元の手打ちそばを賞味する。

#

同宿の一六名からなるツアーグループが早朝三時半に宿を発って登山口に向かうと聞いたので、当方は混雑を避けるため、その前に出発するつもりだったが、外はあいにくの雨で最初から気勢を殺がれる。結局グループを先にやって、四時頃に登山口を目指す。八㎞、二〇分の林道は、既に昨日の内に下見走行済みだったので、暗闇の雨の中を難なく到着。昨夜から待機していたと思われる車は広い駐車場にわずか3台のみで寂しい限り。雨天のため回避した人が多かったのだろう。後から来た一台もすぐにUターンして帰って行った。

#

トムラウシ山は標高二、一四一mながら、頂上へのアプローチが長いため、以前は山中一泊しながらの縦

斜里岳頂上にて筆者

走で登る人が多かったが、現在は今回辿る短縮登山口よりの日帰りが可能となっている。昨年の七月に多数の遭難死亡者が出て、いまだに事故の検証が行われているが、天候次第で危険と隣り合わせのタフな山系である。

#

車の中で朝食のおにぎりを頬張りながら様子を見ていると、幸いにも激しかった雨も止んだので、五時丁度に意を決して出発する。ヒグマ除けに携帯ラジオの音量を上げ、鈴を鳴らしながら、ぬかるんだ道をひたすら進むも、やはり一人では心細い限りだ。約三時間後に縦走して下って来た学生のグループに初めて出会い、更に一時間後に先発のツアーグループを追い越し、十一時前に頂上に達する。

#

頂上はあいにくのガスで視界は不良。頂上直前で追い抜かれた男一、女二の三人組と会話しながら昼食を摂る。道内の北見から来て、駐車場で一晩を過ごしたとのことだったが、男性は当方と同年、女性の一人は七十三歳とのこと。長年の夢だったこのハードなコー

スを克服出来たと、大感激のようだったが、当方もそのパワーにただただ感心する。そのうちガスも晴れ、下山中は素晴らしい景観も楽しめ、登山口に戻った時は、十一時間半の長い行程にも拘わらず、難関のコースを無事に踏破出来た満足感で疲れはなかった。その夜、地元で獲れたオショロコマの塩焼きを肴に飲んだ地酒の味は格別だった。

#

翌日は次の目標であり、ヒグマの生息する山として有名な羅臼岳（一、六六一m）のある知床に向かって、ひたすら車を走らす。知床五湖を散策した後、岩尾別温泉「ホテル地の涯」にチェックイン。周辺には野生の鹿が無数に居り、他では味わえない自然の趣である。夕方、カンビールを手に、混浴露天風呂で至福の時を過ごす。翌日の天気予報は微妙だが、早々と床に就く。

#

ホテルで得た熊情報によると、二日前に登山コースでヒグマが鹿を食べていて、一時通行止めになったとのことで、スタート前から萎縮する。天気予報も午後から雨だったが、その前に頂上に到達しておけばOKだろうと思い、四時半にホテル裏にある木下小屋登山口に向かう。登山届のリストを見ると、自分が当日の一番手で、後続の人が来ないため出発を躊躇する。小屋にて熊撃退用のスプレーをレンタルするとの表示があったが、早朝に小屋の人を起こして文句を言われてもと思い、結局借りずに四時四十五分に思い切って出発する。

#

熊のことが頭から離れず、後続の誰かが早く追いついてくれないかという思いがあるので、薄暗い中での歩きもスローペースになりがちだったが、丁度一時間経過したころに女性二人組が追いついてくれたので、彼女達を先にやる。しかし、三十分後には休憩中の彼女達を抜き返すこととなり、後は腹をくくって、鈴音を高くしながらひたすら歩を進める。前方に黒い物体が見えると何でも熊に見え、単に気のせいに過ぎないのだが、後ろで音がしたと思って振り返ることもしばしばで緊張の連続であった。

#

二日前にヒグマがいたという地点も無事通過し、予

報よりも早く降り出した雨も幸い止んでくれたので、最後数百メートルの岩稜部を手足を使って慎重に登り頂上に達する。しかし強風と視界不良のため、満足感に浸る余裕もなく、すぐに下山する。当日の登山者は一〇人にも満たず、やはり不安定な天候のせいだったのだろうか？　それとも、熊を恐れたためだったのか？　いずれにしても五体無事に帰還出来て、ほっとした山行だった。下山後はホテルの温泉で汗を流し、次の宿である清里温泉「緑清荘」へと急ぐ。

#

翌朝五時過ぎに宿を出て、三番目の目標である斜里岳（一、五四七ｍ）の登山口に向かう。不順だった天候も一転して快晴となる。昨年六月に天候不良と残雪の多さのために、スタート早々に退却を強いられたコースだけに、リベンジするには絶好の天気である。五時四〇分にスタートして、沢沿いの道を岩伝いに何度も渡渉を繰り返し、次々に現れる滝を眺めながら、ロープや鎖をたよりに高まいて登るのは、涼しくて快適でさえある。後半の急な瓦礫の道を一挙に登り、一〇時前に頂上に至ると絶景が待っていた。オホーツク海と知床連山を一望し、居合わせた誰もが感嘆を口にして、会話が広がる。

#

道内の他の地域では大雨注意報が出たり、そう遠くない天人峡温泉が土砂崩れで孤立する騒ぎがあった中、当初の計画とおり三山に登れたことは非常に幸運だった。これで百名山の登頂も九一座となり、北海道では利尻山だけが残っている。来年の花の盛りの頃に礼文島行きも交えて計画したい。

#

今回の旅行で新しく入浴した温泉は一四ヵ所で、これで北海道では九二ヵ所となり、長野県の一二一ヵ所に次ぐ。全国では一、〇九九ヵ所となった。一週間の間に後一〇ヵ所位は入ろうと思ってリストアップしていたが、移動に時間が掛り、期待外れの数に終った。北海道は余りにも広い、しかし温泉の宝庫であることを改めて認識した次第で、将来十分な時間を取って改めて廻ることにしよう……。

（平成22年9月8日・記）

会・員・だ・よ・り

◆青木三郎さん
会報を拝読させて頂き、ふるさとを懐かしく想い出しています。ふるさとの会が盛会になりますことを祈念いたします。

◆赤井紀男さん
残念ですが関西で仕事があり出席できません。ご盛会を祈念しております。

◆浅野智哉さん
このたび初めて参加させていただきます、よろしくお願いいたします。

◆足立かをるさん
「光陰矢の如し」もう十月になりました。いつもお世話様です。私も何も変わらず健やかに日々を明るく楽しく充実した時を過ごしています。最高に幸せと感謝しております。

◆足立さつきさん
12月のコンサートの案内を載せて頂きありがとうございます。今後とも宜しくお願いいたします。

◆足立正美さん
幹事の皆様御苦労様です。当日所用があり欠席いたします。悪しからず皆様のご健勝を祈ります。

◆足立明子さん
日頃は大変お世話になっております。今年も皆様にお会い出来ますのを楽しみにしております。

◆足立和巳さん
人ごとと思っていた80歳が人ごとでなく自分ごとになってしまい、小学校の同窓生も遠阪小学校の同部落の者はたった2人になってしまいました。但し男ですが……。でも女の子でも、私の部落から下の佐治町に近い所の杉谷で山中和子さん1人になってしまいました。

◆生田正輝さん
やむを得ぬ先約があり欠席いたします。ご盛会をお祈りいたします。

◆石倉良介さん
体調不良につき折角ですが欠席させて頂きます。

◆今津幸子さん
いつもお世話になります

◆植木十和子さん
毎年「山ざる」誌とふるさとの会のご案内を頂きますことを感謝しておりますとともに、出席して思いがけない方にお会いできますのを楽しみにしております。講演会にも出席致します。

◆植田茂樹さん
9月に父(憲雄)が倒れ今も意識不明のままです。週末は帰省しており今年は欠席させて頂きます。

会・員・だ・よ・り

◆上野重喜さん
山ざる40号おめでとうございます。歴代の編集委員各位のご苦労を偲んでいます。郷友会のますますのご発展を祈り上げます。

◆上村愛子さん
参加しているコーラス、水墨画、太極拳の発表会が相次ぎ忙しくしています。今年から老人会に入ったもので展覧会への出品、バス旅行、ゲーム事、スポーツ等楽しんでいます。

◆臼井小五郎さん
楽しみにしています。

◆内田泰代さん
公立少中学校にて初任者指導をしています。都合が付かず残念です。会に行くことでふるさとを身近にさせていただけ楽しみだったのですが……、お世話して下さる皆さんに感謝しております。ありがとうございます。

◆梅田節二さん
体調に気をつけて益々ご活躍の程を！

◆大垣忠男さん
お招きありがとうございます。当日大阪行きが決まっておりますので欠席させて頂きます。

◆大城戸しず代さん
「山ざる」いつも送って下さりありがとうございます。関東に住んで38年経ちますが丹波人であることを実感させられます。皆様お体を大切になさって下さい。

◆大塚秀弌さん
毎回ご案内頂き恐縮しております。S31柏原高校1年の3学期に豊中高校に転校し、その後早大から民間企業に2年半、そして埼玉県で教員に、S45年から現地に移りました。今年も9月に氷上の墓参に、国領温泉に宿をとりました。郷里も昔の面影を見つけるのに苦労するようになりました。

◆大西恒夫さん
体調わるく失礼いたします。ご盛会をお祈り致します。

◆大野善三さん
他用があり失礼します。皆様の健康をお祈りいたします。

◆荻野公三さん
「山ざる」懐かしく読んでおります。会の発展を祈っております。

◆小田富士夫さん
夫婦揃って検査入院の為「つくば」までまいります、とても残念でございますが欠席いたします。皆様によろしくお伝えください。

会・員・だ・よ・り

◆桂　照子さん
ご案内ありがとうございました。本年も楽しい集いでありますように

◆門脇宣孝さん
わざわざ「山ざる」送って頂きありがとうございました。都合が付かず欠席いたします。

◆神井あつみさん
皆様のご健勝と当日のご盛会をお祈りしております。

◆河本幸子さん
急に寒くなって参りました。いつもご案内頂きありがとうございます。11月は関西を行ったり来たりしまして、この日もギリギリまで考えておりましたが、結局予定が入り欠席いたしますが、よろしくお願いします。皆様どうぞお大事に！

◆菊池洋子さん
いつもご連絡ありがとうございます。

◆岸田　勇さん
仕事の都合で参加できないかも分かりません。

◆岸本　勲さん
「山ざる」誌、同窓会で配りたいので残部ありましたらご送付下さい。

◆木村つた江さん
最近体調がよくありませんので不本意ながら欠席させて頂きます。

◆木呂子惠美子さん
庭の姫リンゴが赤く色づいてきました。いつもお世話になりありがとうございます。

◆久下　誠さん
病気療養中のため欠席させていただきます。

◆古倉徹夫さん
当日は所用のため家内と共に柏原へ帰郷する予定です。申し訳ありませんが欠席させて頂きます。

◆小谷　崇さん
今春義兄の葬式で、久しぶりに柏原へ帰ったら西の方に新しい斎場が出来ていたり、柏原川の岸で桜が満開だったり、鐘が坂の昔のトンネルはもう使われなくなっていたり、色々変わったことばかりでした。駅前には太鼓櫓が引っ越してきていますよ。たまには様子を見に行くのも良いかもしれませんなあ。

◆児玉安正さん
年相応に元気にやっております。「山ざる」40号ありがとうございます。記念号として読み応えがあります。

◆小林和子さん
江上さんの講演はぜひ聞きたかったのですが抜けられない行事のため残念ですが欠席させて頂きます。

◆近藤　仁司さん
いつもお世話様です。別の予定があり欠席させて頂きます。

◆坂上五朗さん
本年もお誘いありがとうございました。ふるさとの会事務局の皆様にはいつもお心配り頂き深く感謝いたします。この度は会長以下役員の方々も新しく代わられ、又新しい会の始まりと思います。今後一層の楽しい集まりとなりますよう祈っております。

◆坂上　豊さん
余生を囲碁三昧で過ごす日々です。積ん読の本を無聊にまかせて読みあさる日々でもあります。郷友会が益々盛会で発展されますよう心からご祈念申し上げます。

◆笹倉　強さん
当日厭きの行事と重なり残念ながら欠席とさせて頂きます。

◆笹倉良正さん
毎度欠席で申し訳ありません。ご盛会をお祈りいたします。

◆笹倉鉄平さん
大変残念ですが、当日以前より仕事の予定が決まっており出席がかないません。次の機会には是非参加したいと思いますが、秋の頃が忙しいものですみません。ご盛会を祈っております。

◆里　收さん
当日所用があり欠席させていただきます。ご盛会をお祈り申し上げます。

◆篠原よね子さん
いつもお誘いありがとうございます。残念ですが家族の旅行と重なりましたので今回は欠席といたします。どうぞ皆様によろしくお伝えください。

◆渋谷要之助さん
「ふるさとの会」へのお誘いありがとうございました。楽しみにしていましたが、たまたま住民協議会（役員をしています）の会合が以前より決まっておりまして、当日「ふるさとの会」への出席はできません。ご参加の皆様によろしくお伝えください。

◆正呂地悟さん
ご盛会をお祈り致します。

◆杉岡明美さん
何十年かぶりに手にいたしました「山ざる」でした。それは私が目黒区の文化に針穴用に関わってきた年月でもあります。懐かしいお名前を拝し、これからは私もできるだけ参加させて頂きたく思っておりますのでよろしく

お願いします。また「山ざる」＝同窓会に通じるということが今回初めて気付きました。ご盛会をお祈りいたします。

◆鈴木和栄さん
「ふるさとの会」へのお誘いありがとうございます。今年は出席を楽しみにしておりましたのに、87歳の夫が腕を骨折、残念ながら欠席です。終の住家として移りました山梨の山里も晩秋の色濃く、丹波の山里への思いを遠く馳せている今日この頃です。

◆高尾久子さん
主人の体調次第で欠席になるかも、その時は悪しからずご容赦下さい。

◆高田美佐子さん
他用と重なりました。

◆高橋世志子さん
住所が違っているので修正（岡）

◆高見秀史さん
お世話様です。宜しくお願いいたします

◆竹内恵美子さん
柏陵総会に久しぶりに出席して遠い昔懐かしい故郷を思い出し皆様のひとと、爽快感一杯でした。昨年は米寿のお祝い、重ねて今年も長寿のお祝いを頂戴して感無量です。誠にありがとうございました。残りの人生を大切に前向きに焦らず無理せず一年の無事を願い敬虔な祈りをささげています。

◆竹下正敏さん
都合が付かず今回は申し訳ありませんが欠席いたします。

◆田中憲雄さん
身体が不自由な為欠席させて頂きます。

◆谷垣邦夫さん
参加させて頂きたいのですが、なかなか余裕がとれず申し訳ありません。

◆谷川登子さん
いつもお世話様でございます。おかげ様で元気に毎日過ごしています。今年もこの日は都合がつかず悪しからず欠席させて頂きます。会の益々のご発展をお祈りいたします

◆千葉淳子さん
菊花香る好季節になりました。いつもご案内ありがとうございます。皆様にお逢い出来ることを致して居りましたが、只今医者に通院しておりますのでご無礼いたします、都合がつきましたら出席させて頂きたく思っております。皆々様にくれぐれもよろしくお伝えください。

◆常岡幹彦さん
ご案内ありがとうございました。夜

明けに起きて散歩、日暮れてアトリエを出る日々です。作品一点一点に時間がかかるようになりました。残念乍ら多忙の為欠席いたします。ご盛会を祈っています。

◆鶴田ゆき子さん
「山ざる」誌40号のあゆみの座談会を読んで「山ざる」誌の芯（郷友会の芯）は確実に力強く次の世代に伝えられたと感じます。益々の発展を祈念します。

◆出町京子さん
あいにく出張中なので出席できません「山ざる」の写真を見ると、皆様よいお年を召されて時の流れの速さに戸惑います。

◆堂本　修さん
今年もご案内「山ざる」誌ありがとうございました。2人とも元気に過ごしています

◆徳田八郎衛さん
遠坂村の知人に招かれ、奇祭「はだか祭」に参加し、又広告に応じて下さった堀公二さんと懇談してきました。

◆仲矢美惠さん
いつもお世話になっています。「ふるさとの会」と私事の日が重なってしまい申し訳ございませんが会を欠席させて頂きます。皆様いろいろお世話になりながら、又年に一度の会で楽しみでもありますから残念でございます。ご盛会をお祈り申し上げます。

◆西川宣孝さん
「山ざる」楽しく拝読いたしました。丹波の良さを見直す絶好の機会となりました。ありがとうございました。

◆西本　實さん
いつもお世話様です。今回は欠席させて頂きます。

◆樋口順子さん
何時もお世話になりありがとうございます。なかなか出席できず申し訳なく思っております。

◆平田岳史さん
本年4月より京都大学へ移動となりました。来年4月に家族全員が京都に引越す予定です。住所が決まり次第連絡いたします。今後共宜しくお願いいたします。

◆廣瀬安伸さん
当日を楽しみにしています。お世話頂く皆さま本当に御苦労様、ありがとうございます。

◆藤田千治さん
お世話頂きありがとうございます「山ざる誌」楽しく読ませて頂きます。

◆藤原ひさ子さん
当日楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

◆細川倫夫さん
ご盛会を祈ります。

◆細野京子さん
体調不良の為欠席させて頂きます。

◆前田武彦さん
親の介護のことがあってほとんど関西に行っております。宜しくお伝えください。

◆前田和秀さん
相変わらず家内の運転手としてぼけ防止をしています。

◆前田和市さん
この度は傘寿の中に入る年輪を重ね、ご招待頂けるそうで厚顔の限りですが出席させて頂きます。

◆松本栄二さん
先約会議の為出席できません。よろしくお伝えください。

◆的場裕典さん
一年中休みのない仕事なので、2ヶ月前に開催日を知らないとヘルパーを取って行くことが出来ません。いつか行くことが出来れば嬉しいことだと思います。皆様に宜しくお伝え下さい。

◆宮川昌龍さん
幹事様にはお世話になりありがとうございます、残念ながら都合により欠席させて頂きます。

◆三宅良夫さん
いつも大変お世話様です。当日所用があり欠席いたします。

◆山岸幸子さん
残念ですが不参加、盛会を祈っています。

◆山田良一さん
仕事の都合で参加できません、申し訳ありません皆様によろしく。

◆山中秀雄さん
今年こそと思っていましたが都合がつかず残念です。坂上会長様、今後共会の為宜しくお願いいたします。

◆山本一志さん
今年も都合が悪く出席できませんよろしくお願いいたします。

◆山本明男さん
来年で10年になる「りんごの絆」という店、丹波に恩返ししたいと思い、丹波の食材を多用してきました。逆に丹波の力に助けられ絶大なるファンや、信じられない縁という絆に感謝感謝です。まだまだ未熟な私ですが、丹波の食材や歴史と共に更に成熟できる

よう精進したいと思っています。

◆山森直美さん
講演会楽しみにしています

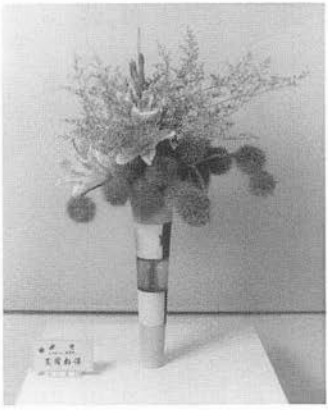
◆吉竹　覚さん
ウオーキング協会の会議の為欠席します申し訳ありません。

◆吉竹茂徳さん
住所変わりました。

◆依藤廣次さん
徒歩が困難な状況の為、残念ながら欠席いたします。ご盛会をお祈り申し上げます。

◆若森敏郎さん
山ざる40号記念号を手にして、その充実ぶりに驚いています。これも歴代編集委員の方々の絶えざるご努力のおかげと感謝しています。毎号楽しく読ませて頂いている中に、小生も80歳のお祝いを受けてから早くも3年、来年は寅年の年男、この分だと米寿まで大丈夫だと思うので、その歳になったら何か投稿したく思っております。それまで怪我をしないように頑張ります。

◆渡辺昌彦さん
いつもありがとうございます。「山ざる」楽しみにしています。今後とも宜しくお願い申し上げます。


いけばな（三觜柏洋）

◆訃報
平成21年10月から22年8月までに事務局にご連絡いただいたものです。掲載して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

船越　昭紀殿　平成21年8月
大内　弓子殿　平成21年9月
秋山　康男殿　平成21年9月
増田　憲夫殿　平成21年9月
石谷　茂殿　平成21年11月
岸本　昌子殿　平成21年12月28日
坂部　隆子殿　平成21年
松下　文雄殿　平成22年1月
高橋　通也殿　平成22年3月
小森　康宏殿　平成22年4月
廣澤　克江殿　平成22年5月
木村つた江殿　平成22年7月20日
大木　千里殿　平成22年8月
吉住　重造殿　平成22年8月

◎寄附者芳名

兵庫県東京事務所殿　一〇、〇〇〇円
氷上ゴルフ会殿　八、三〇〇円
丹波の文化を語る会殿　二、〇〇〇円
千種　倫幸殿　一三、〇〇〇円
竹内恵美子殿　一〇、〇〇〇円
村上　末吉殿　一〇、〇〇〇円
前田　和市殿　八、〇〇〇円
久保　春雄殿　七、〇〇〇円
足立知佳子殿　五、〇〇〇円
梅田　重二殿　五、〇〇〇円
岡林　逸男殿　五、〇〇〇円
荻野　武殿　五、〇〇〇円
谷口　捷殿　五、〇〇〇円
中居　篤子殿　五、〇〇〇円
堀井　隆川殿　五、〇〇〇円
芦田　拓雄殿　三、〇〇〇円
足立　和孝殿　三、〇〇〇円
足立　吉雄殿　三、〇〇〇円
生田　清弘殿　三、〇〇〇円
上野　重喜殿　三、〇〇〇円

大西　恒夫殿　三、〇〇〇円
大野　義昭殿　三、〇〇〇円
荻野晴一郎殿　三、〇〇〇円
岸田　勇殿　三、〇〇〇円
近藤　仁司殿　三、〇〇〇円
齋藤　陽子殿　三、〇〇〇円
高見　嘉都司殿　三、〇〇〇円
田中　登喜子殿　三、〇〇〇円
谷口　浩章殿　三、〇〇〇円
鶴田　宏・ゆき子殿　三、〇〇〇円
南部　光殿　三、〇〇〇円
藤田　純殿　三、〇〇〇円
山口　和久殿　三、〇〇〇円
吉竹　覚殿　三、〇〇〇円
渡辺　昌彦殿　三、〇〇〇円
岡本　吉正殿　二、〇〇〇円
久下　誠殿　二、〇〇〇円
澤田みさを殿　二、〇〇〇円
時里　孝子殿　二、〇〇〇円
山口　泰男殿　二、〇〇〇円
吉井　和弘殿　二、〇〇〇円
足立　徳子殿　一、〇〇〇円

足立東一郎殿　一、〇〇〇円
荒木　輝雄殿　一、〇〇〇円
稲岡　俊一殿　一、〇〇〇円
大地富美子殿　一、〇〇〇円
岡田　充利殿　一、〇〇〇円
小田　明子殿　一、〇〇〇円
岸本　勲殿　一、〇〇〇円
小林　和子殿　一、〇〇〇円
坂上　勝朗殿　一、〇〇〇円
坂上　豊殿　一、〇〇〇円
島津　和子殿　一、〇〇〇円
鈴木　和栄殿　一、〇〇〇円
瀬川　武彦殿　一、〇〇〇円
富田　貞子殿　一、〇〇〇円
本城　英明殿　一、〇〇〇円
村上　髙廣殿　一、〇〇〇円
大石佐代子殿　五〇〇円
小糸　イキ殿　五〇〇円
塩見みつゑ殿　五〇〇円
千葉　淳子殿　五〇〇円
安原三智子殿　五〇〇円

■会員が書いた本

村上信夫著
『ことばのビタミン』
近代文藝社／定価1900円

「今は今しかないで。エネルギー二百%を使いきる。人間のパワーは出てくるもんや。使いなはれ！」と気風のよい大阪弁。綾戸智恵さんは、一七歳で単身渡米、自活しながらジャズを学び、アメリカ人と結婚、出産、そして離婚。子連れで帰国。悪戦苦闘のすえ、デビューしたのが四〇歳。「今」を全力で乗り切る。

ピアニスト舘野泉さんは、四〇周年記念のステージで倒れ、気がついたら病院のベッドの上で半身不随。「自分からピアノをとったら何も残らない！」と悩みぬきついに左手だけの演奏家となって再起。「二通りのピアニス人生が生きられる」とまさに禍を転じて福となす。今年九九歳になる医師の日野原重明さんは「やることが多すぎて死ぬ暇がない」と今も超多忙、元気で長生きの模範。

この本には、各界を網羅して七四名の珠玉の「ことばのビタミン」が詰まっている。読めば必ず元気が出る人生の栄養剤である。

著者の村上信夫さんは、NHKのラジオの看板番組「ラジオビタミン」（月～金午前八～一二時）の司会でおなじみ、あの名物医師鎌田實さんと組んでの特別公開放送「いのちの対話」も毎回話題を呼んでいる。

村上信夫さんの父上久夫さんは、旧制柏原中学の卒業生、氷上郷友会員だったが、二年前八四歳で逝かれた。信夫さんは丹波育ちではないが、父祖の地春日町に「終の棲家」を新築し、今は東京に単身赴任中。祐喜子夫人は絵本作家として活躍中、丹波新聞社の講座も好評である。

村上信夫さんは、アナウンサー歴すでに三〇余年。今やNHKの朝の看板エグゼクティブ・アナである。

『ことばのビタミン』の文章は、その語りのように歯切れよく明快に展開する。登場者は、例えば小企業から京セラ、KDDIを創立し、日航の再建を担う稲盛和夫さん、その経営理念は「利他」。六五歳で第一線を退き、坐禅托鉢の修行をして得度もした異色の経営者である。

冒険家堀江謙一、アグネス・チャン、山田洋次、坂東英二……と多士済々。丹波人では河合雅雄、隼雄のご兄弟、そして、わが丹波恐竜の発見者、足立洌、村上茂両氏も登場する。締めくくりは父上久夫さん。それは昨年の「山ざる」に信夫さんが書いている。父はある年、息子に一年三六五日、一日も欠かさず葉書を書き送った。それが直筆のまま、『春夏秋冬の心～父村上久夫からの三六五葉』として丹波新聞社から出版。『ことばのビタミン』とともにぜひ読みたい本である。（上野重喜）

■郷土について書かれた本――

草山万兎文・足立隆明・写真
「オオムラサキ舞う森
―昆虫少年の夢―
月刊「たくさんのふしぎ」
2010年5月号（302号）
福音館書店発行　定価700円

「日本の国花は何ですか？」「桜です」「よく出来ました。では国蝶は？」「ナヌ？国を代表する蝶なんているの？」と応える人も少なくないが、丹波出身の方ならご存知であろう。丹波の森公苑が、営々として国蝶オオムラサキの孵化に励んでいることを。ご存じない方は小誌39号の「丹波を撮る」をご一読下さい。ここで紹介する写真集は、その苦労と意義と楽しさを伝えるために編集されたものである。

前述の「週刊新潮」と同じく、これも単行本ではなくて雑誌であるが、手にとって見ると単行本のような感覚である。執筆者は、「子どもの頃から昆虫、特に蝶と甲虫が大好きで、珍しい蝶をとった時は、学校で百点をとった時より嬉しかった」という丹波の森公苑名誉公苑長、河合雅雄さんだ。篠山市出身で京都大学理学部動物学科を卒業。以前はニホンザルやゴリラの生態研究に没頭しておられたから、ペンネームにも「サル」が出てくるのではないかと期待したが、「草山万兎」という、やさしいペンネームであった。

写真撮影は、神戸で生まれ丹波で育った足立隆昭さん。柏原高校を経て兵庫県立農大（現在の神戸大学農学部）へ進学し、昆虫学を専攻した。武田薬品工業(株)ではアグロ(農薬)事業に従事し、退職後は丹波の森公苑でボランティアとして環境保全に尽くしていたところ、このオオムラサキの人工飼育事業が始まり、昆虫に詳しい適任者として事業の責任者に選ばれたと聞く。

さなぎから蝶になる成長を追う写真も、流石は昆虫の専門家ならでは、と感心する。評者は天文や気象には関心を持っても動植物にはトンと興味の無い生徒だったが、母校の大先輩が執筆し、同級生が写真撮影した、写実に徹するこのカラー写真集を手にすると、共著者の感動や熱意が伝わってきた。伝統ある柏原高校の生物クラブも今は無い。この本が、少しでも多くの青少年に自然への畏敬と興味を抱いてもらうきっかけとなれば幸いである。

（徳田八郎衛）

同窓会

◉平成22年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

平成22年6月13日（日）例年と同じく「九段会館」にて開催されました。昨年から「他支部との交流」をテーマにしており、今年も幹事学年の16回生を中心に他支部から16名の参加を得て合計116名の懐かしい顔が集まりました。

今年の担当幹事は昭和39年卒・16回の18名。当日配布資料の袋詰めを前日に行うなど、皆さんのご努力で当日の進行は大変スムーズで、大いに懇親の実があがりました。

河野正美氏

高見支部長

谷口新支部長

総会では今年が2年に一度の役員改選期で、2期4年支部長をお務め頂きこの間東京支部の発展に大いに貢献された高見支部長と8年に亘ってお務め頂いた上副支部長が退任され、新たに若輩ながら谷口が支部長、新たな副支部長として原谷、谷両氏を含め副支部長4名、常任理事13名、監事2名、理事43名が選任されました。尚、高見前支部長には「顧問」に就任いただくことになりました。（支部長・副支部長・監事は後記参照）

恒例の柏陵セミナーは幹事学年16回生で長年製薬会社にお勤めで、現在、東京薬事協会事務局長の河野正美さんから「そうだったのか！薬の疑問　学べる薬の知識」と題してお話しいただきました。「薬は200ccの水で飲むのが原則」「納豆を食べると血液をサラサラにする薬の効果が悪くなる」等初めて聞く、目から鱗の話がいくつもあり、皆さん大変為になった講演でした。

当日のご来賓には、母校の深田校長、同窓会本部芦田会長・谷水副会長、阪神稲継・京滋酒井・東海畑の各支部長、県東京事務所竹岡次長のほか西山酒造の裕三会長には今年も沢山のお酒をご恵贈賜り、故郷の銘酒による乾杯となりました。

懇親会の途中に恐竜発見者村上茂作の絵本「恐竜のおくりもの」の販売（25冊完売）、ジャンケン合戦による薬のプレゼントなども織り交ぜて、時を忘れた4時間の最後は校歌・応援歌・万歳三唱、思いでの1ページとなるテーブル毎記念写真を手に、来年の再

会を約しての解散となりました。

来年度の総会・懇親会は6月25日土曜日の開催です。より多くの同窓の皆様のご参加をお待ちしています。近年関東に来られたご友人・お知り合いがおられましたら事務局までお知らせください。

なお、柏陵同窓会東京支部のホームページも、是非ご覧ください。

校歌斉唱

「支部長・副支部長・監事一覧」

支部長＝谷口浩章（新、15回、氷上）、副支部長＝岡吉明（再、13回、柏原）、上田道代（再、14回、氷上）、原谷洋美（新、20回、山南）、谷敬三（新、21回、柏原）

監事＝久保良雄（再、13回、山南）、塚口智（再、17回、氷上）

（支部長・谷口記）

◉柏原高校32年卒業 3年4組クラス会

卒業直後から郷里や大阪で半生記続けてきた柏原高校32年卒（第9回）3年4組のクラス会を初めて東京へ誘致しました。まず前日は防衛省見学ツアーに臼井小五郎君の案内で参加。当日は昼から練馬区の墓地で一流の建築技術者・歌人・俳人だった故余田功君を偲んだ後、四谷駅から上智大学や史跡の紀尾井坂を経てホテルニューオータニへ。早朝6時に丹波を出たのに永田町探訪に向う元気者も。

宴を終え校歌を斉唱し日帰り組を見送った宿泊組と地元組は郷友の山本明弦君が営む「りんごの絆」へ二次会ならぬ四次会に。遠来組の感想は「東京を見直した。便利な街や。また来よかい」。郷里の葬儀でドタキャンも出ましたが14名が参加しました。

日帰りで往くや炎天紀尾井坂

（徳田八郎衛）

紀尾井坂

同好会

◉氷上ゴルフ同好会、昭和46年に始まる歴史を回顧して

昭和47年刊行された「山ざる」第3号に発足時のゴルフの会報告が掲載されておりました。以下はその抜粋です。

〈ゴルフの会報告―伴仲信次〉

関東氷上郷友会の主旨である会員相互の親睦と友情をよりいっそう深めるために、趣味の同好会をつくっては……との意見が出て、趣味のアンケートをとったところゴルフ・囲碁・書画・謡曲・その他民謡等々の回答を得た。

そこで、とりあえず同好の士の多いゴルフ、囲碁の同好会を発足することになり、氷上ゴルフ同好会が発足した。故石橋会長も大変乗り気で立派な会長トロフィーを、また西川顧問からもカップを寄贈いただき、現在29名のメンバーで活発に活動している。以下に会の記録を掲げ、さらに同好の方々のご参加をお待ちしている。

コンペは成績次のとおり。

○第1回（昭和46年）4月／藤沢ＰＧＣ
　優勝　伴仲信次
○第2回（昭和46年）6月／読売ＰＧＣ
　優勝　小谷正己
○第3回（昭和46年）9月／八王子ＣＣ
　優勝　長富千代一
○第4回（昭和46年）11月／鷹の台ＣＣ
　優勝　長富千代一

◇

昭和46年（1971年）4月に第1回の例会を開催し、現在39年の歴史ある会（次回例会が120回）として同郷・同好の皆さんが集まり、当初よりの目的である「会員相互の親睦と友情をよりいっそう深める」に沿って毎回楽しい例会を続けています。未だ参加されていない方も、どしどしご参加下さいますようお待ちしています。

今年の成績は下記のとおりです。大会内容はホームページに毎回報告しておりますのでご覧下さい。

第116回大会参加者

○第116回（取手国際ゴルフ倶楽部　平成21年9月11日）
優勝　古倉　徹夫
2位　上田　雄彦
3位　塚口　恭一

第117回（江戸崎カントリー倶楽部　平成21年12月11日）
優勝　藤田　徹
2位　直田　正
3位　岡　吉明

○第118回（紫カントリー倶楽部　平成22年3月12日）
優勝　野村　修己
2位　上野　忠明
3位　堀　博之

○第119回（桜ヶ丘CC　平成22年6月11日）
優勝　松岡　昭宏
2位　上野　忠明
3位　古倉　徹夫

◇

氷上ゴルフ同好会　事務係　岡　吉明
http://pcc-taiyo.co.jp/hikami/

展覧会

◉常岡幹彦さんの個展

◎日時＝平成23年9月12日(月)～28日(金)
◎会場＝ギャルリ・コパンダール企画
東京都中央区京橋2-7-5　京二小林ビル1階03-3538-1611／青垣の高源寺―雪の石段50号以下6

お知らせ

◉本誌を柏原・谷書店で販売

今年の夏は記録破りの暑さが続きました。郷友のみなさまがたには、いかがお過ごしでしたか。

さて、本誌。今号は試験的に五百円の有料といたしました。理由の一つには、毎年多くの会員外のかたがたから、「読みたい」というご希望があり、そのつど代金はいくらかとのおたずねに、「お気持ちで」などとあいまいなお答えして、お気遣いをしていただいていたのをあらためること。ひとつには、いくらかでも発行費の足しになればというかすかな期待。とりあえずは、柏原の谷書店さんのご好意で、店頭に並べていただくことになりました。郷里のかたがたから閲読希望の引き合いがありましたら、よろしくご鳳声のほど。

もちろん会員とご寄稿者、および広告協賛を頂戴した向きには、従来どおり無料で配布することは言うをまちません。

（坂上）

❖ 本誌にご協力有難うございました

猿友会

井田悦子
笹倉郁子
塩見みつえ
大石佐代子
篠原よね子
渡邊貴美子
小田明子
千葉淳子
可部美智子
長尾貴美代
小糸イキ
安原三智子

本誌にご協力有難うございました ❖

丹波なた豆茶

なた豆のお茶で健康づくり

丹波産なた豆 100%のなたまめ茶

腎臓機能回復やアレルギー症状を和らげるお茶

こやま園

丹波市春日町黒井 1972　　TEL 0795-74-2152

http://natamame.jp/

パークイン

Park inn KAIBARA

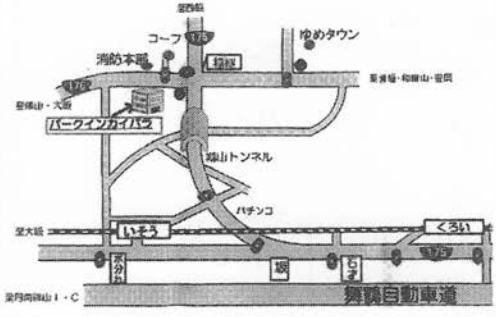
(株)柏原ビジネスホテル

TEL. 0795-72-3525

FAX. 0795-72-3495

〒669-3311 兵庫県氷上郡柏原町母坪380

ご宴会・帰省の際のご宿泊に



・会議室、宴会場完備

・駐車場（50台、大型バス駐車可）

ＪＲ福知山線柏原駅よりタクシー5分
近畿自動車舞鶴道春日インター7分

●お食事は

蔵出し料理 あじくら

TEL. 0795-72-3715

❖ 本誌にご協力有難うございました

① 丹波新聞　嘱託記者「丹波人ＮＯＷ」のコラムニスト
http://tanba.jp
② 認定ＮＰＯ法人アジアの新しい風・理事・事務局長
http//www.npo-asia.org

上　　高　子（氷上町出身）

〒 154-0016　東京都世田谷区弦巻２－18－22－414
TEL ／ FAX 03－5426－6714
e-mail　takako-ue@t05.itscom.net

①在京の丹波人をインタビュー取材しています。取材対象についてお心当たりの方はお知らせ下さい。
②アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援する NPO です。
昨年 12 月から、国税庁によって認定 NPO に認定されました。
全国におよそ 4 万ある NPO のうち、わずか約 150 が認定 NPO です。
「新しい公共」という概念のもと、理念に共感する NPO への寄附が奨励され、寄付金額の所得控除があります。**会員ならびに寄附金募集中！**

エクステリア専門商社

株式会社 トコナメエプコス

代表取締役　広 瀬　寿 和（山南町和田）

〒160-0003　東京都新宿区本塩町23 第２田中ビル
TEL 03－3354－0211　FAX 03－3354－7767

本誌にご協力有難うございました ❖

柏13回・はくとみかい

柏高 昭和36年卒　氷上ゴルフ同好会会員

安達　巧
上野　忠明
大賀　勝恵
大野　冨士夫
岡　吉明
荻野　智司
山田　良一

あなたの町の「石屋さん」
そんな石屋をめざしています！！

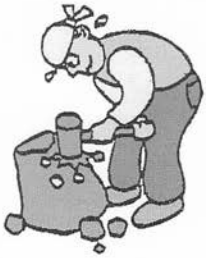
墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役　堀　公二　柏高 昭和36年卒

いしやは　ここよ

0120-1480-54



工場・事務所　TEL 0795-72-3032
FAX 0795-72-4343

丹波市柏原町母坪425　http://www.tanba-sekizai.com

❖ 本誌にご協力有難うございました

自動車補修部品販売

株式会社　京　浜

代表取締役社長　上武　正次　柏高 昭和 36 年卒

本　社　〒292-0826　千葉県木更津市畑沢南 1-2-37

TEL 0438-36-2111(代)

営業所　市原営業所・千葉営業所

株式会社　アイ・ケイ・アイ　I.K.I co.,LTD

株式会社　ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸＆生産管理　＆　小売り

代表取締役社長　岸田　勇　柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

本誌にご協力有難うございました ❖

みんなで作るから楽しい

みんなの掲示板

読者どうしで情報交換。
▽譲ります・譲ってください
▽メンバー募集▽ボランティア募集一などなど。

自由の声

あなたの主張やメッセージ、「ちょっと一言」など、どしどしお寄せください。

ふるさとクイズ 丹Q

丹波地方に関するクイズです。

ケータイでパチリ

ケータイカメラで撮った“あなたのベストショット”写真を紙上に!!。家族、ペット、花、身近な風景…などなど、コメントと一緒に『Let's 送信』。アドレスは patiri@tanba.jp

同窓会ひろば

同窓会でのひとときを紙面で紹介します。簡単な文章と、写真を送って下さい。いい記念になりますよ。

関東からのご応募を歓迎します

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201
tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956
Web http://tanba.jp E-mail tanba@tanba.jp
週2回(日・木)発行 1ヶ月1,220円(郵送料200円)

60歳からの知恵と体験交流誌

隔月刊誌【さすが&されど】好評発売中

書く・読む・交流する雑誌

年間購読料 3700円(税・送料込み) 見本誌進呈

時代と共にあなたの歴史
自分史年表
書く・読む・調べる便利な歴史年表
定価 1,800 円(税・送料込)

これから書き継ぐ生活ノート
メモリー50
1年2頁、50年間書ける気軽なメモ帳
定価 1,800 円(税・送料込)

あなたの本つくりませんか

安心の35万円システム(100頁・100部) お気軽にご相談下さい。

自分史・評伝・記念誌・小説・エッセイ・句集・詩歌集・写真集

株式会社 **ホンゴー出版**
〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1
TEL045(895)2712 FAX 045(895)4338

❖ 本誌にご協力有難うございました

水・電気・熱などエネルギー全般の御相談に応じます。

電気主任技術者第一種免状　第2-319号
技術士（電気部門）登録証　第15810号
エネルギー管理士（電気）免状　第 2857号
エネルギー管理士（熱）　免状　第 5191号

若森技術士事務所

所長　若森敏郎

〒302-0023　茨城県取手市白山5－4－13
TEL・FAX 0297－72－0907

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なはげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますよう願い上げます。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、〝丹波のきずな〟の強さを思います。

（山ざる編集部）

本誌にご協力有難うございました ❖

芦田重秋

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科　非常勤講師
足立和孝
〒347—0015
加須市南大桑字下鳩山一六二〇—一
TEL〇四八〇—六五—五九八八
FAX〇四八〇—六五—六〇九七
E-mail : kazu358@pastel.ocn.ne.jp

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ幹事
広範な国民連合・東京世話人
EMネット埼京理事
足立和巳
〒183—0051
東京都府中市栄町一—一五—二七
TEL・FAX〇四二—三六四—七二七

株式会社ナレッジリンク
足立国際会計事務所
代表取締役
税理士・米国公認会計士（Certificate）
足立知佳子
〒152-0035
東京都目黒区自由が丘一—一三—四 藤タワービル六〇二
TEL〇三—三七一八—八〇四七 FAX〇三—三七一八—八一四七
E-mail : cadachi@aia.gr.jp

足立静雄

飯田光雄
〒285—0045
千葉県佐倉市白銀三—八—十一
電話〇四三—四八五—〇五〇三

❖ 本誌にご協力有難うございました

生田清弘
東京都世田谷区成城一―七―七
電話〇三―三四一五―一八九三

井本義一

上野重喜

氷上郷友会監事
臼井小五郎
（丹波市氷上町絹山出身）
〒275―0025
習志野市秋津二―一―四―五〇二
TEL〇四七―四五三―八八五七

有限会社 PPC大洋
岡吉明
〒351―0014
朝霞市膝折町四―四―三〇
TEL〇四八―四六〇―一六〇一
FAX〇四八―四六〇―二三九七
http://www.pcc-taiyo.co.jp

岡田昌子

本誌にご協力有難うございました ❖

岡林逸男
〒177—0051 東京都練馬区関町北二—七—一七

小田富士夫

梶原清
やす子

金出一郎

木呂子恵美子

久保春雄
〒300—0031 土浦市東崎町十三—二—六〇四
電話〇二九八—二二—二九七八

❖ 本誌にご協力有難うございました

栗田　功

近藤仁司
〒112—0012
東京都文京区大塚二—四—八—五〇一
電話　〇三—三九四三—九一一五

坂上勝朗

坂上　登
山口泰男
仲一聰
仙台市在住

合唱指揮者
笹倉　強
〒352—0014
新座市栄四—五—二五
TEL・FAX　〇四八—四七七—五六四〇

高見嘉都司
〒173—0025
東京都板橋区熊野町四〇番十一号
電話　〇三—三九五六—〇六〇〇

本誌にご協力有難うございました ❖

高見秀史

柏陵同窓会東京支部のホームページは検索サイトで「柏陵同窓会東京支部」でご覧いただけます。

谷口浩章

株式会社 シードコーポレーション
代表取締役 千種倫幸
〒104—0061 東京都中央区銀座一丁目二一—九
電話 〇三—三五六七—九七〇〇

日本画家
常岡幹彦
〒357—0205 飯能市白子一七三—七
電話 〇四二—九七八—一〇九八

鶴田宏

日本舞踊 西崎祥
端唄 根岸妙
〒224—0027 横浜市都筑区大棚町五〇〇—八
電話 〇四五—五九一—六六五五

❖ 本誌にご協力有難うございました

西山裕三
〒669—4302 兵庫県丹波市市島町中竹田一一七一

原谷洋美

青葉山 八王子 真照寺 青葉霊苑（都営八王子霊園隣り 第二期墓地分譲案内中）
住職 堀井隆川
〒193—0821 東京都八王子市川町四九三—二
電話 〇四二—六五二—二〇一一

村上末吉

山口和久
恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・由佳・愛々・茶々・凪人・愛莉・思温
〒196—0031 東京都昭島市福島町二—一〇—二七
電話 〇四二—五四四—八八六一
http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi0330/

渡邊隆男

編集後記

★九十四歳の姑は週に二回お昼間に、介護ヘルパーさんにお風呂に入れて貰う。ぬるめのお湯が良いらしく、設定温度は五度も低くなっている。それを忘れて湯を張ることもしばしばで、湯加減も湯量も毎日一定にピッとボタン一つに管理を任せている。冷房然り暖房然り。皮膚感覚や匙加減を忘れつつあるこの頃である。祖父や父が薪をくべる五右衛門風呂で育った私は便利を享受しつつ、物足りなさも覚えている。（原谷）

★山ざる誌をさかのぼってみたら、「ふるさとトピックス（丹波新聞から）」を担当して早や五回目になっています。三回目ぐらいと思っていたのに、光陰矢のごとし。そして、この五年間には丹波にずいぶん変化があったことも記事からうかがえます。日本社会の変化そのものを反映していると言えますね。UターンやIターンがうまく行き、農業従事者の定着が丹波を活気づけてくれたら、在京の我々もどんなにうれしいことでしょう。それに、今号ではUターン組から寄稿が多数あったのは、丹波と郷友会が同じ線上でつながっているという実感をもたらしてくれましたね。（上）

★41号の編集委員会を九段会館喫茶室にて二回開催。今号は丹波在住の方々との交流に重点を置き「丹波Uターン生活」特集を組みました。また「インタビューコーナー」を新設。取り上げて欲しい方がおられましたらご一報下さい。42号から「文芸欄」を開設します。短歌・俳句・川柳など募集します。詳細は一二七ページご参照ください。

今号は何人もの方から長文の原稿を積極的に投稿していただき感謝感激。残念ながら枚数の関係上減数していただき恐縮です。なるべく《原稿用紙五枚（二〇〇〇字）くらい》に収めていただければありがたいです。皆様の原稿をお待ちしています。（岡田）

★今号では、特集「丹波Uターン生活」と「ふるさと発信」で、郷里からのご寄稿を多く頂きました。有難うございました。

この夏、大正五年の同年生まれで、郷友会の副会長として共に会の発展に尽力された吉住自由造さんと木村つた江さんが九十四歳で亡くなられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（池）

山ざる　第41号

平成二十二年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄　池田　忍　井徳正吾
上　高子　上田正文　岡　吉明
岡田昌子　木呂子恵美子　坂上勝朗
常岡幹彦　鶴田ゆき子　徳田八郎衛
原谷洋美　藤原ひさ子　本城英明

発行者　関東氷上郷友会会長　坂上　勝朗
〒351-0014　埼玉県朝霞市膝折町4-4-30
関東氷上郷友会事務局（岡吉明）
☎〇四八（四六〇）一六〇一
振替〇〇一一〇―三―一二三一三〇
製　作　株式会社二玄社
編集協力　株式会社ホンゴー出版

おもわず　新しい

NEXTA

人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東　京　支　店　111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル　TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッピイ株式会社

東　京　工　場　121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12　TEL 03-3849-6611
千　葉　工　場　270-0202 千葉県野田市関宿台町2192　TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケイ株式会社

栃　木　工　場　323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938　TEL 0282-62-3321

阿吽：　相手を八方にしても生まれない呼吸

「ものごとのABC」という言い方をしますね、「そんなことは、いろはのいだよ」とか。「阿吽の意味を言えば、阿は万物の根源で、吽は一切が帰滅する究極、始祖と最後の音です。あいうえおの「あ」と「ん」と一緒です。

始まって終わる、ものごとのすべてがこの二音で表わされています。

「あうん」の呼吸、というのは「あ」と「うん」の間に余分な雑念がはいらない息があった様子のこと。この呼吸はきわめて自然。口を開ければ「あ」という音に、その口を閉じれば「うん」になります。だから「あうん」は相手をめえた呼吸ではないのです。相手ばかりを見て、お世辞のために「うん」とうなずくのではありません。ものごとが始まる時から終わる時までの呼吸が簡潔で、理屈や説明がいらない。相手を疑ったり、バカにしていては決して生まれない呼吸です。

ほっとする禅語70

監修：渡會正純
書：石飛博光

やさしい言葉と美しい書で日頃の疲れた心を癒す。

きびしく難解な禅語の印象を一新、やさしい言葉と美しい書で説き、日頃の疲れた心を癒す。不安に満ちた現代にあって本書こそ、誰もが求めていた一冊です。

B6判変型・160頁
●1050円

楽に生きるための知恵を説く安らぎの一冊。

続 ほっとする禅語70

監修：野田大燈
文：杉谷みどり
書：石飛博光

誰もが一度は聞いている70の言葉を元に、書家、石飛博光が書を添え、内と外から心を癒す。

B6判変型・160頁●1050円

話題の著者、エッセイ画集。

ほっとする老子のことば

[いのちを養うタオの智慧]

画・文：加島祥造

B6判変型・152頁●1050円

良寛さんの、心にふれる…。

ほっとする良寛さんの般若心経

著：加藤僖一

B6判変型・152頁●1260円

人生の知恵を優しい言葉で。

ほっとする論語70

文：杉谷みどり／書：石飛博光

B6判変型・160頁●1260円

もっともやさしい仏の教え。

ほっとする般若心経

文：野田大燈／書画：高木大宇

B6判変型・144頁●1260円

二玄社　会長 渡邊隆男
〒113-0021 東京都文京区本駒込 6-2-1 Tel.03-5395-0511 Fax.03-5395-0515 http://nigensha.co.jp